である。兩宮の尊嚴さは主としてこの境域の森嚴より來り、人をして坐ろに敬虔の念に耐へざらしむる。

『何ごとのおわしますかは知らねごもかたじけなさに涙こぼるゝ』

兩宮御正殿始め、各宇の殿舍は何れも建築家の所謂神明造と名づくる樣式に成つて居る。殊に御正殿は最純正なる式に由つて居るので、工匠家は古來「唯一神明造」と名づけて。普通の「神明造」と區別して居る。

唯一神明造は兩宮にのみ限られて、決して他に例が無い。最純正に近いのは熱田神宮であるが、夫でも御屋根は萱でなくして檜皮である。

破格の神明造は到る處に存在する。東京市では日比谷の大神宮の本殿、靖國神社の本殿、芝の神明の本殿等は夫である。

さて純正唯一神明造の特徴は、其重要なる數件を枚擧して見れば、其正殿は前面三間側面二間で、緣を廻らし、左右切妻、正面中央階の上に扉がある。

全部檜の素木造屋根は萱葺で、直線形である。柱は丸柱で地中に埋め込だのである。「底津磐根に

宮柱太しき立て」とは之である。

兩褄の千木は直線形で、相重なつて交叉し、その尖端は屋根を突き貫て高く天に沖するのである。

「高天原に千木高しりて」とあるのが夫である。

千木の尖端は内宮は水平に切り、外宮は垂直に切る。共に風切と稱する穴が二つ宛明けてある。

勝男木は元來葛緒木と書くのであると云ふが、内宮には十本、外宮には九本並列して棟上に横はる。

棟木は覆板と云ふ。其兩端が長く屋根の外に突出して居る。

その下に前後に泥障板がある。前後兩泥障板を縫て樋貫が貫通して居る。建物の兩側面に游離して棟持柱が立ち、緣板を貫通して棟桁を支へて居る。

千木の上方交叉點に近い邊りに四本の細い棒の如きものが並んで、表面に差込まれて居る。之を「おさ小舞」又は「鞭掛け」と云ふが其起原は不明である。

緣は簀の子に張られ、四周に勾欄が繞らされ、御階の兩側の登勾欄と接續し、登勾欄は階下の寶珠柱に取付いて居るのである。

四　神代ながらの森林の内に

御柱も據束も、總て上の方に向つて太さを減少し、棟持柱は殊に内方に向つて少し傾斜して居る。

殿内の事は謹んで口外することを遠慮致したい。又東西寶殿以下の殿舍、垣、門、鳥居等に亘つて

舉ぐべきことは數多あるが、一切今回は差控へ度い。

要するに、現今の樣式は、殆ど總て持統天皇の御代、二十年造替が制定された當時の型であると見て差支ないと思ふ。

尤も、微細な點に於て、後世追々變化したものと認められるものもあるが、夫は別問題として、今は觸れたくないのである。

兩宮の殿舍は總て檜造である。元來、伊勢志摩の國境神路山の檜を用ゐたのであるが、後材盡きて

大和の國境の山々から之を供給した。

夫も缺乏を告げたので、最後に信濃、飛驒の間に亘る木曾山系の諸山から之を伐採して今日に及んで居る。併し今日夫も漸く缺乏を告げんとしつゝある。

他年若し供給不可能となることがあれば、又他に其供給を求めねばならぬことであらう。

御屋根は萱を以て葺くのである。之は附近の山野から採取して居るが、漸次山野が開墾されて田畝

となり、萱の供給に差支る虞があるので、政府は曩に適當の山野を買收して萱を養成しつゝある。

構造に關する最も重要なる問題は御屋根である。元來木造萱葺であるので、御屋根は朽損し易く、曾て漏雨のことがあつて、當局をして恐懼措く所を知らざらしめた。

その後下地に銅板を張り、覆板、泥障板等の外部に露出する木部は皆銅板を以て包むことになつた。斯の如く必要に應じて多少構造上には改善が加へられたが、その形式手法に關しては、厘毫も改竄されぬのである。勿論厘毫も改竄されてはならぬのである。

伊勢兩宮の建築に關して、今日自分の語らんとする點は、以上の諸項である。

要するに、兩宮の殿舍の建築は、殆ど全く、我國太古の宮室、神社の樣式を忠實に傳へたもので、建築史上これ程尊重すべきものは無い。

あゝ、千木勝界木の半空に冲する御正殿を拜する時、何人か我國體の尊嚴を懷ひ、天壤無窮の國運を祝し奉らざるべき。

兩宮の神靈は、皇國の續かん限り、幾萬億年も替ることなく、あの御敷地の上に、あの御正殿の內に、あの神代ながらの森林の內に、鎭まり座すのである。(完)　「大正十年一月「東京日々新聞」)

江戸城の保存

一　城堡の發達

先頃宮內省で宮城內の舊江戸城の五門を取こはすことに決定されたといふ報道が傳はつたので、國民の一部に取毀し中止の請願運動が起り、宮內省でも考慮の結果、取毀しは沙汰止みになつた樣に傳へられてゐる。

これは誠にさもあるべき事で、取毀し沙汰止みの噂が眞實であることを希望してやまぬ次第であるが、この機會において私は江戸城の遺跡が何ゆゑに大切であるか、何ゆゑに取毀しが宜しくないかを述べて江湖の批判を仰ぎたいと思ふ。

抑々江戸城はわが國における城堡の最壯大なるもの、最完備せるもの、最善美なるもので、即ち城堡の最好標本であることは勿論、わが帝都の發祥の記念的遺跡である。

江戸城の保存

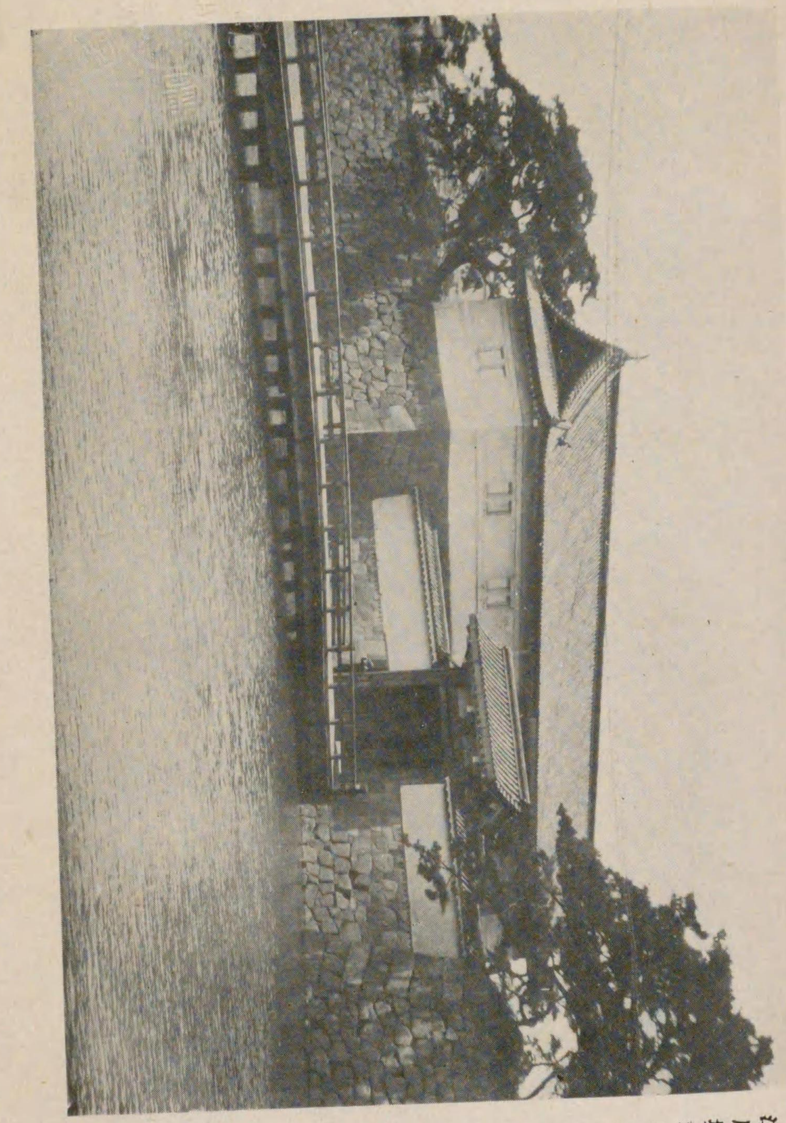
これを歴史上より見るも、建築上より見るも、はた又文化史の何れの方面より見るも、その意義の甚だ深遠なるものがあつて、國民の精神修養上極めて貴重なものである。

元來わが國の城堡はその淵源甚だ遠く、すでに飛鳥奈良時代において、各地方要害の地に柵又は城が置かれ、その後連續して文獻に夥しく現れて來る。

尤もその規模、構造等について的確なことは分り兼るが、古代より足利時代に至るまでは大なる變化はなく、多くは塹壕をほり、その土を以て壘を築き、障碍物を置いて敵の侵入を妨げ、入口には城戸を開き矢倉を備へたもので、これが二重三重になつてをり、内には城主の居館をはじめ、家の子郎黨の屋舍、武器兵糧等を收納する雜舍等が具備せられたのであつた。

これ等の證跡は各種の物語り本や繪卷などによつて大體推知することが出來、柵や城の遺跡の踏査によつて略的確に知り得るのである。

南北朝頃から城堡の設備が大いに整つた樣に見える。それは太平記などによつて想像されるのであるが、城堡に一新紀元を畫したのは足利氏の中葉以後、即ち應仁亂以後戰國時代にかけて、日本全土が兵戰のちまたとなつた時である。



江戸城和田倉御門

二　江戸城の發達

その城堡の設備としては、即ち塹壕には漫々たる水をたゝへ、土壘は發達して堅牢なる石壁となりその上には木骨漆喰壁の半耐火的の多門塀がめぐらされ、塀には狹間が穿たれ、石壁の隅々には二重又は三重の櫓が聳え立つ。

そして壕には橋梁を架け、入口には武裝した高麗門を穿ち、その中に桝形を作り、一方に渡櫓を築いて、下に武裝した櫓門が開かれた。

壕は二重三重又は數重に穿たれ、その間の區域に三の丸、二の丸、本丸、又は特殊の名稱が與へられ、本丸の中には豪壯なる城主の居館と、巍々たる五重七重の天守が築かれたのである。

城堡はこゝにおいて建築の重要なる一科となり、建築界に一異彩を放つ樣になつたのである。

この完成せる城堡は、天正から慶長の間に、日本全國の津々浦々の大名等によつて築かれた。

なかんづく織田信長の安土城、豊臣秀吉の大阪城、伏見城などは豪壯無比と稱せられたが、徳川家康から秀忠、家光と三代にわたつて經營せられた江戸城こそ、實に古今未曾の雄壯偉大なる城堡である。

江戸城の保存

今の江戸城の地には、平安朝の末頃から江戸氏代々の居館があつたと傳へられてゐるが、その地點や規模はよく分らぬ。

足利時代の中葉に扇谷上杉家の老臣、太田道灌が長祿元年に江戸城を修築してより、その歴史ははじめて明瞭である。

道灌の居城は今の本丸に當ると考定されてゐるのである。

文明十八年上杉定正は道灌を殺して江戸城を沒收したが、上杉氏は大永四年北條氏綱に破られ、江戸城は北條氏の占有に歸した。

天正十九年北條氏は豊臣秀吉に亡ぼされ、その領土は德川家康に轉封されたので、家康は江戸に入城して居宅を構へた。

然るに慶長五年關ヶ原戰役の結果、天下の實權は家康に歸し、諸大名が江戸に參候する樣になつたので、江戸城擴張の必要を感じ慶長十一年から諸國の大名に賦課して大工事を開始した。

三　江戸城の完成

家康が諸國の大名に賦課した江戸城擴張の大工事は、斷續的に幾回も施工せられ、秀忠の元和七年に至つて一先づ功をはつたので、この時江戸城の内廓即ち本丸、西の丸、二の丸、三の丸を包擁する部分が略出來たのである。

三代家光は更に父祖の事業を繼ぎ、寛永六年に工を起し、諸國大名を强制して既成の部分を補修し寛永十三年に外廓の全部を竣成した。

即ち淺草、神田、小石川、市ヶ谷、赤坂から海に至るまで内廓をめぐつて外壕を築造したので、江戸城の經營はこゝに大成したのである。

その後江戸城は大なる變化がなかつた。たゞ八代將軍吉宗は石壁の上の多門塀を取こぼち、その代りに松を植ゑたが、この松が今も木振り面白く生ひ茂つて、得もいはれぬ風致を添へてゐる。

明治維新以來江戸は帝都となり、國情一變して何事も歐米の文化を模倣することに焦慮し、日本固有の歴史や藝術は弊履の如く捨てられることとなつたので江戸城も當然無用の長物として邪魔物扱ひを受け、片つ端しから廢毀の運命に遭つたのである。

勿論新に東京市を建設する場合であるから、交通の便、その他各種の要求のために、或程度まで江戸城の廢毀はやむを得なかつたのであるが、江戸城無用といふ考へが先きに立つて、保存といふ考へ

がなかつたので、あたら數百年の史跡も散々蹂躙されたのである。

かつては日本第一の壯觀として誇つた江戸城も、維新以來時世の變遷とはいひながら指を切られ、手を切られ、耳をそがれ、鼻をそがれ、なぶり殺しの極刑を受けつゝ今日に至つたので、心ある者はこれを正視するに忍びないであらう。

江戸城の末路もまた哀れなるかな。

四　江戸城の價値

わが國の城堡は、建築としても一種特別の異彩を放つものであり、當時の戰術上必須の約束を具備してゐるばかりでなく、その門、塀、櫓、天守等の建築は、勇壯の氣分を現すと同時に、簡明高潔にして優美なる輪廓を描いてゐる。

正にこれ古の武士が、威風凜々たる中に物の哀れを知るてふ、ゆかしい溫情の籠るに似てゐる。

これを歴史の方面から見れば、城堡の歴史はわが國史の半面を語るものである。その遺跡によつて武門の制度、軍事の組織、さては當時の國民の思想、社會の狀態、手に取るが如くに闡明されるのである。

これを名勝古蹟として見れば、紅塵萬丈熱鬧喧囂の現代の修羅のちまたをよそに見て、昔ながらのおもかげをその儘に、蒼然として立つ城門、やぐら石壁等は、そゞろに人をして懷古の情に堪へざらしめるのであらう。

正にこれ飢ゑ疲れたる國民精神を補强すべき榮養物である。

いはんや江戸城は日本唯一の完備せる巨城であり、帝都發祥の記念的史蹟であり、當時の諸大名がしぼり盡した血と汗との結晶であり、即ち日本國總がかりの大作である。

その一石一瓦も皆相當の價値がある。これを無用の長物とするが如きは、以ての外の沙汰である。

先頃米國の某建築家が東京を視察し、その感想の一端を漏らして『現時の東京市は實に荒涼たるものである。亂脈なる道路、劣惡なる建築、貧弱なる公園、一も見るべきものはない。神社佛閣は純日本の精神を表現してゐるが、小規模である。たゞ驚くべきは舊江戸城の規模で、その雄大と莊嚴とは眞に世界の異彩である。今や東京の誇りはこの史蹟のみである。然るに交通の便をはかると稱して、漸次この貴重なる國寶を破壞しつゝあるは實に無謀の暴擧である』といつた。

この外にも同様の意味の感想を語つた外人が二三あつた。

私は元來外人の說に雷同することが大嫌ひであるが、この說ばかりは反對する餘地がないやうに思はれる。

五　史蹟尊重は世界共通の事實

世間には、江戸城の如きは舊時代の殘骸で、今日の社會生活とは沒交涉であるといひ、建築上又は藝術上においても何等今日の參考に資する所がないといひ、これを讃美するものは一種の骨董癖か、好古癖の徒輩であるといふものがある。

併し一國一民族の間においてその歷史は最尊重さるべきものである。歷史の徵證となるべき史蹟の尊重せらるべきは自明である。

これは世界共通の事實であり、世の文明國といはるゝ程の國では互に爭つて史蹟の保存に努めてゐる。

これを城堡に徵すれば、古代ギリシア、古代ローマの城壁城門の僅に殘存するものは夙に世界の珍寶として保存されてゐる。

中古においては英京ロンドンのタワー・オヴ・ロンドンはロンドン發祥の記念的史蹟として尊重されフランスではビエルフオンの古城が一度廢滅に歸したのを、十九世記の中葉に巨額を投じ古式に從つて復原せしめた。ドイツの諸城もその殘存するものは何れも大切に保存されてゐる。

そる他世界の類例を擧げれば際限がないが、特に擧げたいのは一六六六年のロンドンの大火に燒け殘つた木造の市街建築が今も現代建築の間に介在して大切に保存されてゐる事である。

日本では現に殘存してゐる舊大名屋敷の門や、舊江戸城の城廓門櫓をさへ片ッ端しから取壞さんとするのであるから、外人等が驚くのも無理はない。

先に問題となつた宮城內の五門の中、平河門や桔梗門は殊に有名である。梅林、三角、山里の三門は內部にあるので餘り多く世に知られてをらぬ樣だが、その地點は太田道灌時代の城趾と密接なる交涉があると考へられ、重要なる史蹟であるは勿論である。

近時わが國でも史蹟の尊重すべき事が漸く理解され、現に史蹟名勝天然記念物保存會が設けられ、地方でも古城趾の保存に盡力しつゝある折柄、宮內省が率先して城門徹廢の例を示した事は、如何にしても穩當とは思はれない。（完）

（大正十五年三月「東京日々新聞」）

日本三景と新八景

一　日本三景の意義

日本は風光明媚な國であるとは、われわれ國民の手前味噌ばかりでなく、よく外國の觀光客からも聞く言であるが、これは必ずしもかれ等の外交的辭令ではない。

日本の如く風景に富む國は實際世界にあまり多くない。たゞその規模が小さいのは、日本の地理地質等の關係によるので、すでに斯道の專門家がその說明を與へてゐる。

何時誰がいひ出した事か知れぬが、安藝の宮島、丹後の天の橋立、陸前の松島を日本三景と稱することは、何人も熟知の事である。

この三つが果して日本最美の風景であるかといふに、決してさうでない。

もちろん風景の美をはかる尺度はないのであるから、見る人の了簡次第で、どこの景色が絕對に最優であると定め難いが、いはゆる日本三景以上の景色は決して少くないと思ふ。

然らば日本三景の選拔されたのは何ゆゑであるか。予の觀る所ではこれは日本の本州を、中央、西部、東部の三區に分けたとして、各區に一ケ所づゝ特色のある景色を選んだものである。

即ち近畿地方で天の橋立、中國で宮島、東國の松島を選んだのである。

更に他の方面から見れば、日本海で橋立、瀨戸內海で宮島、太平洋で松島といふ海洋に關聯する景色の選擇で、三景は畢竟地方代表的のもので、絕對的ではない。

獨り風景ばかりでなく、何では地方代表の意味で三つの優越なるものを選んだ例は澤山ある。

例へば、昔は日本三大河として板東太郎即ち利根川、筑紫二郎、即ち筑後川、四國三郎即ち吉野川を擧げたが、太郎は本州、二郎は九州、三郎は四國を代表したのである。

當時北海道はまだ知られなかつたが、若し知られてゐたら、石狩川が蝦夷四郎として參加したであらう。

曾て富士川、最上川、球磨川を日本三急流としたのは少しく見當違ひであつた。

富士山、愛岩山、比叡山を日本三高山とした時代もあつたが、これはまた酷い。明治初年には富士

山、御岳、白山を三高山としてゐたが、これは多少恕すべき點がある。

二　宮島の美

元來三といふ數は吉數であるといふ信仰から、古來何事にも三を選ので、話は大に脫線するが、例へば、平安時代に出雲の大社、大和の東大寺大佛殿、京都の大極殿を三大建築として、雲太、和二、京三と呼び、京都の三條の大橋、宇治橋、瀨田橋を三大橋と稱し、室町時代の後期から、の奈良大佛、鎌倉の大佛、東福寺の大佛を三大佛といつた。

日本三景も必定この筆法によつて選ばれたので、必ずしも最美の景の意味でないと解すべきであらう。

予の觀る所では、日本三景の中で、安藝の宮島が第一である。廻れば七里の浦々の中で、嚴島神社と彌山を海上から眺めたところが壓卷である。

崢嶸たる彌山の輪廓、平靜なる海淨の面、その間に介する優麗な社殿曲廊、彎橋の線、よくも變化と調和の妙を現してゐる。

のみならず、彌山の深綠、海水の濃藍、社殿の丹堊は配色の美を遺憾なく發揮してゐる。

要するに宮島の美は自然と人工との調和にある、若しこゝに嚴島神社の建築がなかつたならば、その山水の風景の價値は過半は失はれるであらう。

若し彌山を背景とし、海水を數地としなかつたならば、社殿の美はその大部分を失ふであらう。

この景勝の地に、この奇巧なる社殿を經營した平相國清盛の藝術眼は、確に超凡である。

予はこの點から見て、清盛か世俗に傳へられる如き惡虐暴戾の人でないと想像するのである。

社殿はもちろん全部特別保護建造物である。

瀨戸内海には、單に山と水との關係から見れば、その規模、布置、色調等において、宮島にまさるとも劣らぬ所は決して少くないと思ふ。

たゞ神社をその間に點じて風景を引き締た點において、恐らく宮島に及ぶものはなからうと思ふ。

三　橋立と松島

日本海の沿岸は概ね平板で、海岸線の出入が少い、僅に出雲の北帶、若狹灣、能登半島、男鹿半島がその平板を破るに過ぎぬ。從つて奇巧なる風景は比較的少い譯である。

この間において比較的超凡なる風景を求むれば、橋立の如きはその選に入るべき資格は充分であら

う。

橋立の風景は宮島とは全くその趣を異にし、延長一里七町にわたる沙嘴の上に青松の駢列する處を主眼とするので、宮島の立體的なるに對してこれは線的である。かれを第三次元的構圖とすればこれは第一次元的といへる。

宮津の西廿餘町の橋立の南端切戸の文珠は有名な知恩寺といふ伽藍で一基の多寶塔が聳えてをり、室町後期の建築で特別保護建造物となつてゐる。

橋立の知恩寺におけるは、宮島の嚴島神社におけるか如き重大の意味はないが、なほ丹後の國道に當り、橋立の行路を扼し、橋立と併存して離るべからざる關係にある。即ちまた自然の風景に人工の美を點ずるものと解することが出來る。

＊　＊　＊　＊　＊

太平洋方面の海岸線は可なり複雜であり、從つて風景の變化も多く、觀賞の價値ある所は澤山ある。併し陸前の松島は普通の景色とは異なり、陸前灣に臨む陸地の一部が海水に浸蝕され、無數の大小の島が取り殘された形で、その島の形がとりごりに面白い上に、ひねくれた松が必ずその上に嬌姿を現してゐるのが更に面白い。

松島の景色は即ち海と島とを取混ぜて、平面的即ち第二次元的の景色である。

松島の全景は富山の頂から展望しなければ分らず、細部の妙趣は島めぐりせねば分らぬといはれてゐるが、併し景色かやゝ散漫で中心がないともいへる。從つてその印象は淺く弱く、宮島ほどの深さと強さはないと思ふ。

四　新八景の選出

松島の景色に點ぜられた人工の景物は瑞巌寺である。

今の堂宇は伊達政宗の建立にかゝるもので、慶長建築の絶好の標本であり、もちろん特別保護建造物である。

殊に五大堂は海中の小島の上にあり、蟠龍の如き老松の間に立つて一段の風致を添へてゐる。

寺は松島によつて名高く、松島は寺によつて名高いのである。

日本三景は何れも海を取り入れた景色であつて、三者各その趣を異にするとはいへ、畢竟同一種類である。

然るに今回大阪毎日、東京日日の主催にかゝる新八景選出の計畫は、景色の種類を八項に分け、各項毎に候補地を募集し、更にこれを愼重に審査したのであるから、八景が八方面から選拔されたのでたしかに新しい試みである。

併しその選拔されたものは北海道一、本州四、四國一、九州二であり、北海道から九州にわたつて全國を貫いた點は申し分ないが、何ゆゑに北海道に與ることの、吝であつたか。

人を北海道に導く手段としても、北海道の面積からも、少くとも二つを選みたかつた。いはんや北海道には海に、山に、原野に、沼湖にみるべきものが甚だ多いに於てをや。

一體風景とは何であるか、理窟を揑ね出せば際限がなく、風景の種類も無數であるが、要するに大自然の偉大な技巧によつて山岳、河海、樹林、原野等の地物の布置色調を整へ、見る人に何等か深い感興、强い印象を與へるものである。

眞の風景は大自然そのまゝの姿であるべきで、これに人文的素因、例へば樓閣、村落、橋、船、燈臺その他各種の物件を點じてはじめて景を調ふるのは、概ね小規模の舊式風景であると解し、既往の日本三景の如きその一例であると考へ、山ならばヒマラヤ、川ならばアマゾン、沙漠ならばサハラの如きものが眞の偉大なる風景であると唱ふる者もあるが、さう簡單には片付けられぬ。偉大なる地理的現象と風景とを混同してはならぬ。

五　人文的素因の添加

若し自然の構圖が極めて巧妙に壯大に出來てをれば、これに人文的素因を點ずるに及ばず、又點ずる餘地もない。

併し普通の場合には矢張り何等かの人文的物件の點出によつて風景が引き締られるものである。尤もそれが餘りに多ければ、却つて風景を俗化せしめ、または庭園化せしむる。

例へば、近江八景では、石山の秋の月といつても、月だけでは景にならぬ。石山寺がその人文的素因となつてはじめて美しい。

瀨田の夕照では、瀨田の長橋が中心となり、矢橋の歸帆では、湖面を走る帆船が點景物となり、三井の晩鐘では三井寺の伽藍が後に隱れてゐる。

絕大なる自然の構圖でも、餘りに絕大では、風景にならぬ場合がある。この時人文的素因を投じて中心點を作ればはじめて風景になり得る。

例へば、一眸千里の沙漠は、風景としてはむしろ索漠たるものであるが、そこにはるかに一群のらくだの列が點出されるとき、好個の畫面となる。

若しらくだの鈴の音が、風につれて斷續して聞こえるならば、更に幽情を深からしめるであらう。

又例へば萬仞の峻嶺が雲を破つてそばだつ姿は實に雄壯である。しかしこの山岳に伴ふ何等かの神秘的傳說を想ふとき、非情の土石も、有情の靈山として觀客を魅するのである。

この場合は、無形の精神的人文的素因が加はつたのである。

舊日本三景はこの點から見て意味の深長なるものがある。近江八景は小細工を弄した點があるが、兎に角味はふべき所がある。

新日本八景は、美しいものもあれば、物足らぬのもあると思ふ。願はくは今後大いに考慮を費して、完美な日本百景を選み出したいものである。（完）

（昭和二年七月「東京日々新聞」）

國語尊重

一　國語は國民の神聖なる徽章

元來わが日本語は甚だ複雜なる歷史を有する。

大體に於てその大部分は太古より傳來せる日本固有の言語及び漢語をそのまゝ取り入れたもの、またはこれを日本化したもので、一部は西洋各國例へば英、佛、和、獨、西、葡等の諸國の語から轉訛したもの、及び梵語系その他のものも多少ある。

近來世界の文運が急激に進展したのと、國際的交涉が忙しくなつたのとで、わが國においても舊來の言語だけでは間に合はなくなつた。

殊に新しい專門的術語はおほくは日本化することが困難でもあり、また不可能なのもあるので便宜上外語をそのまゝ日本語として使用してゐるのが澤山あるが、勿論これは當然のことで、少しも差支

はない　である。

併しながら、永くわが國に慣用された歴史のある我國語は、充分にこれを尊重せねばならぬ。

國語は國民思想の交換、聯絡、結合の機關で、國民の神聖なる徽章でもあり、至寶でもある。

不足な點は適當に外語を以て補充するのは差し支へないが、ゆゑなく舊來の成語を捨てゝ外國語を濫用するのは、即ち自らおのれを侮辱するもので、以ての外の妄擧である。なかんづく一國民の有する固有名は最も神聖なもので、妄りに他から侵されてはならぬ。

曾て寺内内閣の議會で、藏原代議士が總理大臣から「ゾーバラ君」と呼ばれて承知せず、「これ猶ほ寺内をジナイと呼ぶが如し」と抗辯して一場の紛議を釀したことがあつた。

これは一時の笑話に過ぎぬが、こゝに看過し難きは、わが日本の稱呼である。

わが國名は「ニホン」または「ニッポン」である。外人は思ひ〳〵に勝手な稱呼を用ゐてゐるが、それは外人の自由である。

併しわが日本人が外人等に追從して自ら自國の名を二三にするのは奇怪千萬である。英米人の前には「ジャパン」と稱し、佛人に逢へば「ジャポン」と唱へ、獨人に對しては「ヤパン」といふは何たる陋態ぞや。

吾人は日常英國を、「イギリス」、獨國を「ドイッ」と呼ぶが、英獨人は吾人に對して自ら爾く呼ばないではないか。

日本人中には今日でもなほ外人に對して臺灣を「フォルモサ」、樺太を「サガレン」、朝鮮を「コレア」旅順を「ポート・アーサー」、京城を「シウル」新高山を「マウント・モリソン」なごといふ者があるのは不都合である。

露國でさへ、曾てその首府のペテルスブルグは外國語であるとて、これを自國語のペテログラードに改名したではないか。

二　母語の輕侮は國民的自殺

日本固有の地名を外國になぞらへて呼ぶことも國辱である。

例へば、曾て日本を「東洋の英國」なごとほこり顔にとなへたことがある。飛驒と信濃の境を走る峻嶺を「日本アルプス」なごと得意顔に唱へ、甚だしきは木曾川を「日本ライン」といひ、更に甚だしきは、その或地點を「日本ローレライ」なごといつたものがある。

この筆法で行けば、富士山を「日本チンボラソ」と呼び、隅田川を「日本テムズ」とでもいはねばなるまい。

日本古來の地名を、郡町村等の改廢と共に變更することは、或場合にはやむを得ないが、古の地名に古の音便によつて當て欲められた漢字を妄りに今の音に改讀せしめ、その結果地名の改稱となるが如きは甚だ不用意なことである。

例へば山城の「サガラ」は最もこれに近い音を有する相(サング)樂(ラー)の二字によつてあらはされたのが、今は「ソーラク」と讀ませてをり、能登の「ワゲシ」は最もこれに近い音を有する鳳(フング)至(シ)の二字によつて示されたのが、今は「ホーシ」と讀む者がある。

その他伊賀のアベ(阿拜)は「アハイ」となり信濃のツカマ(筑摩)は「チクマ」となつたやうな例はなほ若干ある。

この筆法で行けば、武藏は「ブゾー」、相模は「ソーボ」と改稱されねばならぬ筈である。

尤も、古の和名に漢字を充當したのが、漢音の讀み方の變化に伴なうて、和名が改變せられた例は、古代から澤山ある。

例へば、平安京の大内裡の十二門の名の如きで、その二三を擧ぐればミブ門、ヤマ門、タケ門は、美福門、陽明門、待賢門と書かれて、つひにビフク門、ヨーメイ門、タイケン門となつたやうなものである。

和名に漢字の和訓を充當したものが、理由なく誤訓された惡例も可なりある。

例へば、羽前の「オイダミ」に置賜の文字を充當したのが、今は「オキタマ」と誤訓されてゐる。

この外、古の地名を、理由なく改廢した惡例も澤山ある。

例へば、淡路と和泉の間の海は、古來茅渟の海と稱し來たつたのを、今日はこの名稱を呼ばないで和泉洋または大阪灣と稱してゐる。

尤も「チヌノウミ」は元來和泉の南部のチヌといふ所の沖を稱したのではあるが……。

また有名なる九州の有明灣を理由なしに改竄して島原灣などゝなへてゐるものもある。

三　外語濫用からパパ樣ママ樣

以上日本の固有名、殊に地名について、その理由なく改惡されることの非なるを述べたが、ここに更に寒心すべきは、吾人の日用語が、適當の理由なくして漫然歐米化されつゝあるの事實である。

これは吾人が日々の會話や新聞などにも無數に發見するが、例へば、近ごろ何々日といふ代はりに何々デーといふ惡習が一部に行はれてゐる。

わざ〳〵デーといはずとも、日といふ美しい簡單な古來の和語があるのである。

また例へば、父母はとと樣、はは樣と呼んで少しも差し支へなきのみならず、却て恩愛の情が籠るのに、何を苦んでかパパ樣、ママ樣と、歐米に模倣させてゐるものが往々ある。

外國語を譯して日本語とするのは勿論結構であるか、その譯が適當でなかつたり、拙劣であつたり不都合なものが隨分多い、新たに日本語を作るのであるから、これは充分に考究してもらひたいものである。

劣惡なる新日本語の一例に活動寫眞といふのがある。

これはキネマトグラフの譯であらうが、何といふ惡譯であらう。支那はさすがに文字の國で、これを影戯と譯してゐるが、實に輕妙である。

文章の章句においても往々生硬な惡譯があつて、甚だしきは何の事やら分からぬのがある。

「注意を拂ふ」だの「近き將來」などは、おかしいけれどもまだ意味が分かるが、妙に持つてまはつて、意味が通じないのは、まことに困まる。

これ等は日本語を蹂躪するものといふべきである。

ひるがへつて歐米を見れば、さすがに母語は飽くまでもこれを尊重し、英米の如きは至るところに母語を振りまはしてゐるのである。

ドイツでも會てラテン系の言葉を節制してなるべく、自國語を使用することを奬勵した。

ごれだけ勵行されたかは知らぬが、その意氣は壯とすべきである。

四　漫然たる外語崇拜の結果

我輩が會てトルコに遊んだ時、その宮廷の常用語が自國語でなくして佛語であつたのを見ておごろいた。

宮中の官吏が互に佛語で話してゐるのを見てトルコの滅亡遠からずと直感したのである。

インドにおいては、地理歷史の關係から、北部と南部とでは根本から言語がちがふので、インド人同士で英語を以て會話を試みてゐるのを見てインドが到底獨立し得ざるゆゑんを悟つた。

昔支那において塞外の鮮卑族の一種なる拓拔氏は中國に侵入し、黃河流域の全部を占領して國を魏

と稱したが、魏は漢民族の文化に溺惑して、自ら自國の風俗慣習をあらため、胡語を禁じ、胡服を禁じ、姓名を漢式にした。

果然彼れは幾ばくもなくして漢族のために亡ぼされた。獨り拓拔氏のみならず支那塞外の蠻族は概ねその轍を履んでゐる。

わが日本民族は靈智靈能を有つてゐる。炳乎たる獨特の文化を有してゐる。素より拓拔氏や印度人やトルコ人の比ではない。

宜しく自國の言語を尊重して飽くまでこれを徹底せしむるの覺悟がなければならぬ。

然るに今日の狀態は如何であるか、外語研究の旺盛はまことに結構であるが、一轉して漫然たる外語崇拜となり、母語の輕侮となり、理由なくして母語を捨て、妄りに外語を濫用して得意とするの風が、一日は一日より甚だしきに至つては、その結果は如何であらう。これ一種の國民的自殺である。

切に希ふ所は、わが七千餘萬の同胞は、亘に相警めて、飽くまでわが國語を尊重することである。

若し英米覇を稱すれば、靡然として英米に走り、獨國勢力を獲れば翕然として獨國に就き、佛國優位を占むれば、倉皇として佛に從ふならば、わが獨立の體面は何處にありや。

人或ひはわが輩のこの意見を以て、つまらぬ些事に拘泥するものとし或ひは時勢に通ぜざる固陋の僻見とするものあらば、わが輩は甘んじてその譏を受けたい。そして謹んでその教へを受けたい。

（完）

（大正十四年一月「東京日々新聞」）

二重文字からローマ字へ

一　二重文字の日本

わが輩は各地方を旅行の際、鐵道の驛名が數樣の文字で書かれてゐるのを見て、常に異樣の感を起こすのである。

或ひはまた石碑及びその他の記念的物件の銘文なごにも往々數樣の文字を以て刻されてゐるのを見て一種の感興を催すのである。

元來一國をなせる一民族の文字は一樣で澤山なるべき筈である。たとひ字體は幾通りに書かれても字の本體は一つでなくてはならぬ。

然るに日本では日常漢字と假名とを混用してゐるのは不自然である。勿論假名も元來漢字から崩れたものではあるが、今や別種の日本固有の文字となつたのである。

今日の場合、日本では漢字ばかりでは用が足せず、假名ばかりでも用は足せない。兩方を混用してもまだ用が足せず、或時は漢字に假名を振つて特殊の讀み方を示し、或時は逆に假名に漢字を振つてその意味を說明しなければならぬといふ狀態にある。實におごろくべき奇怪なる現象である。

わが輩は以下主として、各地方における鐵道の驛名または標示等に現れた二重三重の文字の實例を擧げ、日本の現狀が如何に不都合であるかを說明し、これを矯正することの必要を述べて見たいと思ふ。

歐米諸國を旅行した人は、誰でも鐵道の驛名が、その國の文字でたゞ一つだけ書かれてゐることを見るであらう。

總てローマ字を用ふる國では、如何なる驛名もローマ字で書くだけで、他國の文字をこれに添ない他國人が見て讀めなくとも、それには少しも頓着しない。

これはローマ字を以て世界的の文字と認めてゐるからで、これが讀めない人はその人が惡いのであるといふ解釋である。

ローマ字以外の文字を使用する民族も多くはやむを得ずこの解釋に服從して、自國文字の外に必ず

ローマ字を添書して、その讀み方を世界的に示めす事にしてゐるのである。日本もまたその一である。

二　二樣三樣の文字

支那では鐵道の驛名に漢字とローマ字の二樣を並書してゐる。即ち漢字の發音をローマ字で世界的に表示してゐるのである。

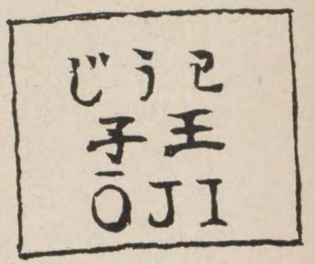
尤も支那では世界的交際を開始しない以前から、必要に應じて二樣の文字を使用してゐた。

たとへば清朝の文書には漢字と滿字とで並書したものが澤山ある。皇帝の御璽なごにも漢滿並書のがある。奉天の北陵や西陵の位牌の面にも、皇帝の廟號が漢字と滿字で並刻されてゐる。

日本でも今日各商店なごの看板に漢字または假名とローマ字とを連記してゐるのが澤山ある。時々門標にもこの例を見かける。否、名刺にも隨分この類がある。二重生活の不都合をやかましく論ずるわが國民は、此文字上の二重生活を何と見てゐるのであらう。

三樣の文字で驛名を書いてゐる地方は、第一に日本である。即ち一は平假名、二は漢字、三はローマ字である。例へば第一圖、第二圖の類で「わうじ」だけでは「ワ・ウ・ジ」とよみちがへ「にでう」だけでは「ニ・デ・ウ」とよみちがへ

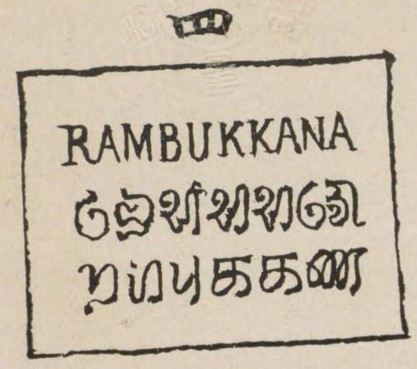
一



二

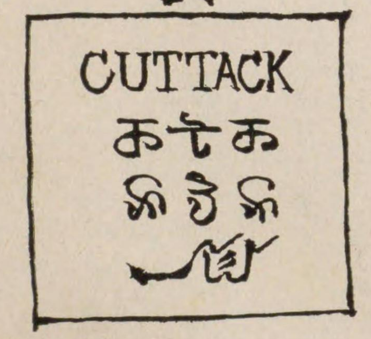
三

四



五

六



る恐れがあるから、漢字で訓釋する必要があり、更に世界的にローマ字で發音を示す必要を生ずる。

次ぎにインドの各地方に例類がある。これはインドには多種多樣の民族がすまつて、各自に異なつて言語文字を有するがためである。

たとへばベンゴール州のモラといふ驛名を表示したものに（第三圖）の如き例があるが、上段はローマ字、中段はサンスクリット字、下段はウルドウー字である。この付近ではヒンヅースタニ語とウルドウー語とが混合して用ひられるからこの必要が起つたのである。

三　三樣四樣の文字

おなじインドでもセイロンへ行くと、また別種の文字が用ひられる。ランプツカナといふ驛名を示すに左の如く書かれてゐる。

（第四圖の如く）即ち上段はローマ字、中段はシンハリーズ字、下段はタミル字である。

やゝ趣は異なるが支那の奉天における北陵及び西陵の下馬碑にも三樣の文字の連記がある。それは漢字、滿洲字及び蒙古字であるが、漢字は

諸王以下官員至此下馬である。

これは清初において滿洲地方に以上三種の民族が住まひ、各自固有の文字を有してゐたからである

四樣の文字の標示は朝鮮に行はれてゐる。例へば水原といふ驛名が

（第五圖）の如く組合はされてゐるが、それは平假名、漢字、朝鮮字及びローマ字である。

朝鮮人が固有の文字を有してゐて、未だことごとく日本化しない間はこれもやむを得ないことであるが、四種の文字を都合よく配列するだけでも、相當の工夫を費さねばならぬことは、隨分馬鹿な話しである。

わが輩はトルコ内地を旅行したとき、必要上名刺にギリシャ字、トルコ字、アルメニア字及びローマ字の四種の文字で姓名を印刷さした經驗を有するが、隨分手數のかかることである。

インドにも四種の文字で驛名を書く地方がある。一例はベンゴール州のオリッサ地方で、カタツクといふ驛名が第六圖の如くである。

即ち上段はローマ字、二段はベンゴーリ字、三段はウリア字、四段はウルドウー字である。インドに四種以上の文字で書かれる所があるかも知れぬが、わが輩は知らない。

四　日本の不名譽

六樣の文字は支那元代の遺趾なる直隷省の居庸關の門内に刻された銘で、漢字、西藏字、梵字（デーヴァナガリ）畏古兒字、西夏字（ダングット）及び蒙古字（八思巴蒙古字）の聯記である。

即ち當時元の勢力範圍内に如上六種の文字を用ふる國民があつたことを證明するものである。

やはり元代の遺跡で甘肅省沙州の莫高窟といふ窟にも、右と同樣の六ケ國文字が同文が刻されてゐる。これは喇嘛教の呪で、その漢字は「唵嘛呢叭噠吽」といふのであるが、元來チベット語である。

自分の承知してゐる範圍では、六種の文字が、聯記されてゐる最大數である。

以上の實例から考へて見ると、凡そ一國内に多數の異なりたる民族がをつて、各自固有の文字を有し、それが統一されない場合には、一の固有名を書くにも、各種の文字を聯用しなければならぬことになる。

また自國文字が自國に局限されて世界一般に通用せぬときは、世界的のローマ字を聯記して置かねばならぬ必要を生ずるのである。

自國の地名または他の固有名を自國の文字だけで記して、それで世界に通用するならば、それは最

も理想的である。

二重三重に種々なる文字を聯用せねば、世界に通用せぬといふ狀態はその國のほこりではない。この點から見て、世界において歐米諸國が最もまさり、支那はこれに次ぎ、日本及びインドの一部これに次ぎ、朝鮮及びインドの他の一部は更にこれに次ぐといふ順序になる。これは日本の名譽ではないやうである。

若しも日本固有の文字が世界的に行はれるならば、申し分はないが、それが殘念ながら當分實現されぬとすれば、結局日本において、さしづめローマ字を聯用することが機宜に適してゐる。

しかし、わが賢明なる國民は、決して永く二重三重の文字を使つて、その煩に苦むことは好まぬであらう。

元來文字は言語の音符である。言語はたゞ聞くべくして、見ることが出來ないから、便宜上符號を以て音を現したので、この符號が即ち文字である。

音符の理想とする所は、なるべく簡單で、しかも如何なる音も都合よく現し得るにある。この點において現今ローマ字が一番要領を得てゐるが、將來更にこれよりも便利な音符が考案されるかも知れない。

若しも或音符が世界共通に用ひられ、いづれの民族の言語も、これによつて簡易に正しく寫し出されるならば、これにまさる便益はない。

この點においては現今の所ローマ字が最もこれに近いものである。差しあたり世界各國がひとしくローマ字を本位と認めることはまことに當然のことである。

然らば日本において在來の漢字や假名を全廢してローマ字を取るべきか。これは大問題である。漢字は漸次に制限されつつあるが、全廢は容易でない。

且また一方には全廢反對の理窟もあつて、その實行は極はめて困難である。それに文字に關聯して言語の問題が交渉して來るから、問題は頗る面倒になる。

わが輩は他日あらためてこれについて所存を述べたいのであるが、結局はやはりローマ字を取るか或ひはローマ字よりも更に便利な音符を考案するより外に良策がないと思ふ。

そしてそれは長い年月の後に、幾多の難關を經て、漸次に解決されて行くのであると思ふ。（完）

（大正十二年一月「東京日日新聞」）

誤まれる姓名の逆列

一　姓名の由來と順位

わが輩はかつて『國語尊重』と題して、わが國固有の言語殊に固有名の尊重せらるべきゆゑんをのべた。今またこれに關聯して、わが國民の姓名の書き方について一言したいと思ふ。

わが國の姓名の發生發達の歷史はこゝに述べないが、要するに今日吾人の姓と稱するものは實は苗字といふべきもので、苗字と姓と氏とはその出處を異にするものである。

姓は元來身分の分類で、例へば臣、連、宿禰、朝臣などの類であり、氏は家系の分類で、例へば藤原、源、平、菅原、紀などの類である。

苗字は個人の家の名で、多くは土地の名を取つたものである。例へば那須の與一、熊谷の直實、秩父の重忠、鎌倉の權五郎、三浦の大介、佐野の源左衛門といふの類である。

昔は苗字は武士階級以上に限られたが、維新以來百姓町人總て苗字を許されたので、種々雜多な苗字が出現し、苗字を氏とも姓とも呼ぶ事になつて今日にいたつたのである。

わが國固有の風俗として家名を尊重する關係上、當然苗字を先にし名を後にし、苗字と名とを連合して一つの固有名を形づくり、これを以て個人の名稱としたので、苗字を先にするといふことに、歷史的意味の深長なるものがあることを考へねばならぬ。

東洋民族は概して苗字を先にし名を後にするの風習である。支那人はその適例である。

ヨーロッパでもハンガリーなどでは即ちマギアール族で東洋民族であるから、苗字を先にし、名を後にする。

西洋では家よりも個人を尊重するの風習から出たのか否かよく知らぬが、概して姓を後にし名を先にする。

ジョージ・ワシントン。ジョン・ラスキン。ジエームス・ワツト。ペーテル・ペーレンス。バウル・ゴーガンなどの類で、前名は即ち個人のキリスト教名後名は即ち家族名である。

印度は地理上東洋に屬するが、民族がアールヤ系であるから、矢張り名を先にし姓を後にする。ラ

ビンドラナート・タゴールといへば、前名は即ち個人名で、後名のタゴールは家名である。

二　歐風模倣の惡例

現今日本では、歐文で通信や著作や、その他各種の文を書く場合に、その署名に歐米風にローマ字で名を先に姓を後に書くことにしてゐるが、これは由々しい誤謬である。小さい問題のやうで實は重大なる問題である。

わが輩の名は伊東忠太であつて、忠太伊東ではない。苗字と名とを連接した伊東忠太といふ一つの固有名を二つに切斷して、これを逆列するといふ無法なことはない筈である。

個人の固有名は神聖なもので、それ〴〵深い因緣を有する。みだりにこれをいぢくり廻すべきものでない。

然るに今日一般にこの轉倒逆列を用ゐて怪しまぬのは、畢竟歐米文明渡來の際、何事も歐米の風習に模倣することを理想とした時代に、何人かゞ斯かる惡例を作つたのが遂に一つの慣例となつたのであらう。

今更これを改めて苗字を先にし名を後にするにも及ばない。餘計な事であるといふ人もあるが、わが輩はさうは思はない。過ちて改むるに憚るなかれとは先哲の名訓である。

況んや若しも歐米流に姓名を轉倒するときは、こゝに覿面に起る難問がある。それは過去の歴史的人物を呼ぶ時に如何にするかといふ事である。

德川家康と書かずして家康德川といひ、楠正成と書かずして正成楠といひ、紀貫之と書かずして貫之紀といふべきか。これは餘程變なものであらう。

過去の人は姓名を順位にならべ、現在の人は逆轉してならべるといふが如きは勿論不合理であるばかりでなく、實際においてその取扱ひ方に窮することになる。

この點において支那はさすがに徹底してゐる。如何なる場合にも姓名を轉倒するやうな愚を演じない。

張作霖は如何なる場合にも作霖張とは名乘るまい。李鴻章は世界の何國の人にも鴻章李と呼ばれ、または書かれたことがない。

世界の何國の人も支那では姓を先にし、名を後にすることを知つてをり、支那の風習に從つてゐる。世界の何國の人も日本では姓を先にし、名を後にすることを知つてゐる筈であるが、日本人が率先し

て自ら姓名を轉倒するから、外人もこれに從ふのである。

三　彼我互に慣習を尊重せよ

或人は、日本人が自ら姓名を轉倒して書く事は國際的に有意義であり、歐米人のために便宜多きのみならず、吾人日本人に取つても都合がよいといふが、自分はさう思はぬ。

結局無識の歐米人をして、日本でも姓を後に名を前に呼ぶ風習であると誤解せしめ、有識の歐米人をして、日本人が固有の風習を捨てゝ外國の慣習にならうは如何にも外國に對して柔順過ぎるといふ怪訝の感を起さしむるに過ぎぬと思ふ。

それよりも、吾人は必ず常に姓前名後を徹底的に勵行し、世界に日本の國風を了解させたならば各國の人も日本の慣例を尊重してこれに從ふに相違ない。

餘談に亘るが總じて歐米の慣習と日本の慣習とが全く正反對である實例が甚だ多い。

例へば年紀を記すのに、日本では年、月、日と大より小に入り、歐米では、日、月、年と逆に小より大に入る。

所在を記すのに、日本では、國、府縣、市、町、番地と大より小に入るに、歐米では、番地、町、

市、府縣、國と、逆に小より大に入る。

日本人が歐文を書く場合、この慣例を尊重して、小より大に入るのは差支ないが、その內の固有名は斷然いぢくられてはならぬ。

例へば地名の中にも姓名を具ふるらしいのがあるが、この場合姓名を轉倒するのは絕對に不可である。

東京市の「櫻田本郷町」を「本郷町、櫻田」としてはいけない。鐵道の驛名の「羽前向町」を「向町、羽前」としてはいけない。同じ理由で「伊東忠太」を「忠太伊東」としてはいけないのである。

日本人が歐文を飜譯するとき、年紀や所在地の書き方は、これを日本流に大より小への筆法に直すが、固有名は矢張り尊重して彼の筆法に從ふのである。

例へばジョージ・ワシントンと名を先に姓を後にして、日本流にワシントン・ジョージとは書かない。

然らば歐米人も日本の固有名は日本流に書くのが當然であり、日本人自らは、なほ更徹底的に日本固有の慣習に從ふのが、當然過ぎる程當然ではないか。

四　斷じて姓名を逆列するな

わが輩のこの所見に對して、或人はこれを學究の過敏なる迂論であると評し、齒牙にかくるに足らぬ些細な問題だといつたが、自分にはさう考へられぬ。

これは曾つてわが輩が「國語尊重」の題下でわが國の國號は日本であるのに、外人の訛傳に追從して自らジャパンと名乘るのは國辱であると論じたのと同じ筆法で、姓名轉倒は矢張り一つの國辱であると思ふのである。

或人は又いつた、汝の所論は一理窟あるが實際的でない。汝は歐文に年紀を記すとき西曆を用ゐて神武紀元を用ゐないのは何故か、いはゆる自家撞著ではないかと。

わが輩はこれについて一言辯じて置きたい。年紀は時間を測る基準の問題である。これは國號、姓名などの固有名の問題とは全然意味が違ふ。

歐文で日本歷史を書くとき、便宜上日本年紀と共に西歷を註して彼我對照の便に資するは最適當な方法であり、歐文で歐洲歷史を書くとき、西歷に從ふは勿論である。

要するに世間は未だ固有名なるものゝ意味を了解してをらぬのであらう。固有名を普通名と同一程度に見てゐるのであらう。

普通名は至る所で稱呼を異にするが、固有名は絶對性のものであり、一あつて二なきものである。即ち日本人の姓名は唯一不二である。姓と名と連續して一つの固有名を形づくる。

外人がこれを如何に取扱はうとも、それは外人の勝手である。たゞ吾人は斷じて外人の取扱ひに模倣し、姓と名とを切り離しこれを逆列してはならぬ。

それは丁度日本の國號を外人が何と呼び何と書かうとも、吾人は必ず常に日本と呼び日本と書かねばならぬのと同じ理窟である。(完)

(大正十五年二月「東京日日新聞」)

今昔小話

一　支那の教科書

私は昨年朝鮮旅行の序に、鴨綠江を越えて安東縣に入り、久方振りに支那の雰圍氣に觸れて押へ切れぬ感興を催した。その時私は現代に於ける支那の普通教育の内容を知り度いと考がへ、その一端の參考にもと思つて一書肆に立ち寄り、尋常小學校の教科書の殆んど全部を買つて見た。そしてその第一卷から順々に終まで目を通して見て或は成る程と感心し、或は窃かに眉をひそめ、或は會心の微笑を催ふし、或は呆然として開いた口が塞がらなかつた。色々面白いことを發見した内で茲に科學に關係のある一節を御紹介致すのである。

◇

科學と云つても尋常小學校の教科書であるから平易中の平易なもので、取り立て〻言ふ程のものは無いが、只一つ面白いと思つたのは「鯨」と題した一課であつた。

頁の下半部に鯨の圖を掲げ、上半部にその説明があるが、劈頭に「海中大魚有り、その名を鯨と曰ふ」と立派な古典的な文章で書き出したものである。總じて文體は古典的で、用字、文章共によく洗練され、申し分のない名文である。日本第一流の漢文學者と雖も恐らくは之に及ぶまい。流石に本場は本場であると感心した。

夫れから鯨の記事に移り、簡明平易の裡に巧みにその要領を述べ終り、最後に鯨が胎生哺乳であることを説いて、「故に魚の名有てその實無し」と結んである。

◇

諸君、如何にも面白ではないか。「海中大魚有り」と書き出し、「魚の名有てその實無し」と結んだ處は天晴れ構想ではないか。日本の小學校の教科書なら第一に、鯨は哺乳獸の一種で、と書き出すに相違ない。併し夫れでは餘りに理性的で露骨である、理性の發達して居らぬ兒童には餘りに乾燥ではあるまいか。兒童は鯨の挿圖と魚に從ふ字の形とを見て先づ魚であると直覺する、そこで「これは鯨と云ふ大魚だ」と話し出し、追い〻と其説明を進め、終りにその胎生哺乳であることを説て、名は魚

であるが實は魚でない」と教へる所に妙味がある。

支那の文章には此の種の構想が甚だ多い、蘇東坡の范增論も夫である。始めに范增を散々にけなして置いて、最後に「嗚呼增も亦た人傑なる哉」と激賞して結尾とした處は、慣用手段とは云へ實に面白い。總じて支那人の論法は決して一本調子でない。一つの理論を眞向に振り翳して、ヒタ押しに押すのではない。先づ悠然として論線に入り、進むに從て或は緩に或は急に、忽にして左に曲り、忽にして右に折れ、突加として跳躍し、遽然として逆進する。そして結局不得要領に終ることが多い。支那人に對するには先づこの支那一流の兵法を承知して置く必要がある。

◇

話は大に脱線したが、彼の小學校教科書の中に別に又面白い現象を發見した。夫は民政、自由、平等、外交等の課目を掲げてしきりに政治外交や思想問題を說いて居ることである。中華民國の興つた由來や、支那の外交が振はずして常に列强から壓迫されて居ることや、例の美文で巧妙に書き立て、國民を激勵して居る。成る程支那人は兒童の時から斯かる方面の教訓を受けて居るから、言論や外交に練達する筈である。しかも教科書全體を通じて觀れば、その中に科學的の課目が比較的に少なく抽象的のものが割合に多い。中學以上の教科書の詳細はよく知らぬが大體日本を標準として居る。要するに支那に科學的知識の普及せらるゝのは何時の事か、一寸見當がつかぬ。

尤も以上は安東縣の教科書の話である。支那の各地方には夫々異なつた教科書があり、內容も亦た互に相異なつて居るのであるが、一の參考とするに足りるであらう。

二　社寺の緣起

昔し或る處に珍書蒐集癖の人があつて、藤原佐理が書いた徒然草を珍藏して居た。友人之を聞いてその人に向ひ、徒然草は南北朝時代に兼好法師が作つたものである。藤原佐理は平安朝初期の人であるから、徒然草を書く筈は無いと忠告した。處がその人は一向平氣で、書く筈の無い人が書いたのだから、これ程珍らしい書は無いではないかと言つた。

◇

これは昔の笑話であるが、今も之に似た笑話の絕へないのは面白い。余が十數年前播州路を探險した時或る一小寺を訪問した、寺僧は大に喜んで勸待して吳れた上、寺の緣起を事細かく說明し、昔神功皇后が三韓征伐からお歸りの途中こゝにお立ち寄りになり、記念の爲に一寺を創建せられたのが即

ち當山であるとて頗を得意の體であつた。余は可笑しさをこらへて、「日本に佛教の渡來したのは欽明天皇の御宇である、然るに神功皇后は夫より三百五十年も前のお方である。當山の緣起も隨分振つたものである」と言つた所が、寺僧は一向平氣な顏で「佛教渡來の傳記なごはドーでも宜しい、當山が神功皇后の御創立であることは眞實正銘疑の無い處である」と答へたので余も二の句が繼げずに閉口したが、如何樣これ丈の信念がなければ安心してこの寺の住僧として居られぬ譯であると感心した。

◇

今一つ類似の話は信濃の善光寺の由緒である。寺傳に從へば、印度に於て釋迦在世の時毘舍離國の月蓋長者が閻浮檀金を以て阿彌陀三尊を作つたのが一千年を經て支那に傳はり、更に三百年を經て百濟に傳はり、夫から又百年にして欽明天皇の御宇に日本に傳はつた。始め蘇我稻目が向原寺を建て之を奉安したが轉々して推古天皇の十年四月信濃の人若麻績東人善光が之を信濃の麻績に移し、後皇極天皇元年に今の地に遷し伽藍を造營した。善光寺伽藍の溢觴は即ち之であると。

◇

若しこの由緒の通りであるとすれば、欽明天皇の御宇佛教渡來は西紀五五二年で、釋迦時代に作つたと云ふ三尊佛は夫よりも千四百年前であると云ふから、西紀前八百四十八年になる。然るに最近の學說に從へば釋迦の年代は西紀前五六五——四八六であるから、傳說と正史の間に三百年からの差が生ずる、況んや印度で佛像を作り始めたのは遲く西紀第四世紀の始からであると考定されて居る。余は、寺の緣起は緣起として面白いもので、之を正面から史實によつて論ずるのは耆家の骨頂であると考へて居るから、善光寺の緣起に就ても別に理屈は言はないが、隨分矛盾が多いのである。總じて社寺の緣起と云ふものは、荒唐無稽なものが多く、一々之を理屈攻めにしたら、殆んご際限が無いことになる。併し荒唐無稽な傳說を生み出した動機、それが多年尊信され來つた歷史、この傳說が如何なる程度に人を感化し善導したかを考へれば、荒唐無稽必ずしも一蹴するには及ばぬのである。却て正確眞實にして、しかも世道人心に益なく、社會及國家の爲に毫も利する所なきものが隨分在ると思ふ。經世に志ある人は大に考へなければならぬ。

三　鶯張り

十數年前の話であるが、余は或る富豪の依賴に由り彼の爲に宮殿風の建築を考案した。その材料は殆んご全部木曾の檜材であり、隨分鄭重な普請であつた。これを傳へ聞いた一棟梁、主人なる富豪の

許に一書を奉つて珍無類なる建議を試みた。その内容はザツと次の如きものであつた。

◇

凡そ古來宮殿の床はすべて板張りであるが、その板は鶯張りにするを正格とする。京都の御所や有名なる佛寺にその例が澤山ある。然るにこの鶯張りの法は匠家極秘の傳があつて、之を知るものは殆ど無い。幸に小子の家には祖先以來この秘法が傳はつて居る。願はくば小子に命じて貴邸の床に鶯張りを實施せしめ給へ、鶯の鳴く音そのまゝの音を出して御覽に入るべし。

◇

主人はこの一書を余に示して意見を諮ふた。余は一讀して將に噴飯せんとしたが、主人に請はるゝまゝに鶯張りの講釋一番、聞き入つた主人其他の人々も成る程と合點された。所謂鶯張りとは抑何であるか、其因緣は實は次の如きものである。

誰でも京都の巨刹殊に知恩院の方丈の廊下を踏んだ人は、その床板が足の踏むに應じて一種の喇曉たる音樂的美響を發するのを聽くであらう。踏む力の加減で、華經華經と鳴り、法華經と鳴り、さながら梅に囀る鶯の聲に似て居るので、案内の小坊主は聲朗かに『床板は鶯張り』と說明する。日本各地方の無數の神社佛殿等にこの現象は洵に稀有であるに係らず、獨り京都地方にのみ類例が多いのは何故であらう、或は京都地方には特殊の技術を有する工匠があつて、何等か秘密の手法を用ひたのであらうと想像するのも無理ではない。併し事實は決して爾く神秘的なものではない。

◇

凡そ高級なる神社佛殿の床板は原則として檜材を用ゐるので、夫も成るべく良質の、幅も厚さも相當に大きなのを選むのである。この板を充分鄭重に仕上げて密着せしめ、隱釘を以て根太に取付ける。然るに長い年月の後には、板も釘も若干瘦せるので、その間に間隙を生じ、人が之を踏む毎に動搖し板と板、板と釘との肌が摩擦して音響を起す。この音響が、間隙の程度と材の性質とに由て偶然に清朗鶯の囀るが如くに聞こえるのである。若し材質が粗であつたり、間隙が不正であればその音響は騷濁で不快である。即ち鶯張りなるものは全く偶然の結果であつて、始めから計畫して出來る譯のものではない。唯精良なる材料を以て周到なる工事を施こしたならば、他年或は鶯張りの現象を生ずべき可能性はある。しかし又餘りに嚴密なる工事を施せば却て音響は生じない、餘りに粗漫なる工事であれば、ガタ〳〵騷音を發するから鶯强りでなくして蛙張りとなるのである。

◇

世には偶然に想ひもよらぬ奇果を得ることが少なくない。併し奇果を得る丈けの素因は初めから作られて居るのである。この偶然の結果を、始から故らに畫策したものと誤解して、それに何等かの解釋を試みようとする類例は、吾人の日常生活にも社會生活にも常に經驗する處である。吾人は漫りに彼の鷲張りを進言した大工を嗤ふ譯には行かない。

四　番匠氣質

昔桓武天皇が平安京を經營された時、大内裡の八省院の建築には格別叡慮を煩はされ、親しく工事を監督せられた。或時天皇は八省院の正門なる應天門の工事を臨檢せられ、つくづくと其恰好を御覽になつて、係りの番匠を召され、この門の形は洵に美しいが、只だ丈けが一尺高過ぎる、早速變改致せとの勅諚を下された。番匠は謹んで拜承したが、さて自ら最善と信じた形を變改するに忍びない。思案に餘つて遂に五寸丈け低くして工を竣つたのであつた。

工事竣成を告げた時、天皇は親しく檢分の爲に行幸せられ、空に聳ゆる應天門の雄姿を熱心に御覽になり、彼の番匠を御呼びになつて、朕曩きに高さを一尺縮めよと命じたるが、今にして思へば過てり、一尺五寸縮むべかりし、なほ五寸高過ぎしものをと後悔の御氣色なり。番匠は之を聽いて恐懼措く所を知らず、地に拜伏して有の儘に白狀した。天皇は歎息し給ひつゝ、今は詮方なし、見よ後に必ず異變あらんと仰せられたが、果せる哉幾年の後烈風の爲に應天門は壞倒したのである。

◇

これは昔の傳說であるが、之と同工異曲の傳說が、百年前の近代に語り傳へられて居るのは面白い。夫は江戸下谷の廣德寺の門の話である。この門を造つた番匠の名は忘れたが、當時有數の名工で、丹精を抽んで、造り上げたので、天晴れの手際と賞讃されるかと思ひの外、見る程の人は皆一尺低過ぎたと貶した。番匠は非常に落膽して、每朝その門の前に往つて、『一尺低過ぎたか』と歎息しつゝ終日門を眺め暮らして家に歸り、夜も碌々安眠しない。斯くの如きこと數十日に及んで、彼は心身の疲勞の爲に終に死んだのである。

その後間もなく安政の大地震があつて、江戸の民家は勿論、堂塔伽藍も多く壞倒又は破損をしたが獨り廣德寺の門は少しの異常もなかつたので、彼の番匠の隱れたる技倆は茲に始めて顯はれ、始めに一尺低過ぎたと笑つた人達は、深く自分等の不明を耻ぢたといふ事である。

◇

然るに茲に更に復た之と同工異曲の實話があるのは不思議である。夫は余の知人の實驗談であるから虛僞は無い。たしか明治の初年である。京都の某番匠が某寺の唐門を造つた所が、仲間の工匠等が之を評して、『洵に申分の無い出來榮だが惜しいことには軒の出が一尺淺過ぎた』と言つた。番匠は之を氣に病んで毎日唐門を見に往つて、『軒の出が一尺淺過ぎたか』と言ひ暮して居たが、終に之が爲に神經衰弱に陷つて死んだと言ふことである。

◇

建築の形の美は實際極めて微妙なものであるが、高低五寸や一尺の差で烈風や烈震に耐へると否との結果を生ずる程きわどい物ではない。以上の話は勿論建築の微妙と名匠の責任觀念を宣傳する爲の傳說であらうが、唐門の話丈けは確實である。今時の人が聞いたら、定めて馬鹿な話だと笑ふであらうが、昔の番匠質氣は多く斯くの如きもので、純眞誠實の心は誠に美しいものであつた。

五　增上寺大殿

桓武天皇と應天門の話をその儘再現した樣な實話が一つある。それは予自身に關することであるから、之を吹聽することは如何にも烏滸がましい次第であるが、姑らく諸君の寬恕を得たい。

◇

夫は芝の增上寺の大殿再建の話である。予は寺から工事設計監督の依賴を受けたので、早速京都から佐々木岩次郎君を招聘して一切の技術上の事を委任した。佐々木君は京都の巨匠木子棟齋氏の高弟で夙に出藍の譽高く、今日に於ては日本唯一の日本建築の老大家であり、現に帝室技藝員である。佐々木君は周到嚴密なる考慮と老練圓熟せる技術を以て、苦心慘憺の結果、數ヶ月を費して大殿の設計圖を描き了り、寺の役員及關係者等一同の前に提出して批判を求めた。

◇

流石に佐々木君の考案である。堂々たる巨殿の雄姿は見るからに爽快であり、その一線一條一點一劃の末に至るまで寸分の申し分もない。一同はたゞ陶然として醉へるが如くであつたが、予に熟視數刻の後『洵に結構であるが、丈けが少しく高過ぎはせぬか、一尺低くしたら如何であらう』と切り出した。佐々木君は『いや自分は高過ぎるとは思はぬ』と主張する。一尺高過ぎる、いや高過ぎぬの押問答に果しがないので、並居る人々は呆れ顏、中にも寺の執事は眉をひそめて『百尺からの大殿の高

さに僅か一尺位の高低を、何もそんなに八釜敷く曰ふには及ばぬではないか』と言へば、誰やらが横槍を入れて『いつそ兩力から讓歩して五寸低くしたらごうだ』と仲裁を試みた。斯くてなほ數次の押問答の末、終に原案より高さ五寸丈け低くすることに決定されたが、佐々木君は定めて不本意であつたと思ふ。

◇

曩にも述べた通り、建築の形は實に微妙なもので、百尺に對して一尺は隨分荒い療治である。柱なごでは一分を爭ひ、板なごでは一厘を爭ふのである。この分厘の差で美醜が別れるのは、猶ほ人の眼鼻の形が分厘の差でその表情を異にするがごときものである。

◇

斯くて增上寺の大殿は十年の星霜を閲して漸く竣成に近づいた時、大正十二年の大震に會した。巨山の如き大殿は物凄い吁嗚を立てて動搖したが、精査の結果毛筋程の損傷も發見されなかつた。半葺きかけた屋根の瓦も、一枚もズッたものさへ無かつた。併しこれは高さを五寸低くした結果ではない全く佐々木君の周到なる注意によつて、繼手や仕口が特別に入念に施工され、材料構造か最完全に出來て居たからである。

◇

由來完全に造られた殿堂は、アレ位の地震でビクともするもので無い。あの地震で潰倒又は大破した建築は、地盤の不良、構造の脆弱、老朽、その他何等か缺陷のあつたものでなければならぬ。

六　血天井

京都の三十三間堂の眞向に天台宗の養源院といふ相當に大きい寺がある。と云つても分らぬかも知れぬが、桃山の血天井と云へば、京都名所の一として大低の人は知つて居る筈である。夫は伽藍の殿堂の天井板に點々暗褐色の人の手や足の痕が見へるので、それは桃山落城の際勇士共が城を枕に自殺した時の血痕で、その板を當寺の天井に記念として使用したのであると云ふ。

◇

桃山城即ち伏見城は豊臣秀吉が文祿三年に造營したもので、慶長三年秀吉薨去の後秀頼は大阪城に移住し、德川家康が桃山城を保管して居た。慶長五年關ケ原の役の發端、家康が上杉景勝を押へる爲に東下した機に乘じ、浮田秀家、島津義弘が桃山城を强襲したので、留守番の鳥居元忠が極力防

戰したが、力盡きて手下の將士と共に自殺したことは有名な話であるが、その時血痕に染まつた床板が、ドーして養源院の天井になつたか、一寸解し難い經緯である。

◇

歴史のことは自分は門外漢であるが、養源院は淺井長政と緣故の深い寺だと聞いた。長政の長女は即ち淀君で、三女は德川秀忠の夫人である。こんな關係から、元和六年桃山城を取り毀つた時、殉難の勇士を記念する爲に秀忠の夫人が斯く取り斗らつたと解するのかも知れぬが、神聖なる伽藍の天井に血痕淋漓たる古板を用ふるとは受け取れぬ話である。自分の觀る處では、あの天井の手や足の痕は血ではない。

◇

自分の經驗によれば、凡そ良質の檜材をけづり上げて、夫に脂手を觸れると、必ず程經て手の痕が現はれる、始めは少しも分らぬのであるが、一年二年と經つ中に段々濃く現はれて來る。終には夫が暗褐色となつて殆んど血痕の樣になるのである。しかもそれが殆んど如何なる方法を以てするも拭ひ去ることが不可能である。

◇

伊勢の大神宮その他高級の社殿はすべて檜造りであるが、その用材を仕上げた後は、之を取扱ふ際に大工は必ず白い手袋をはめるのである。これは汚れた手を御用材に觸れるのは畏多いと云ふ意味ばかりではなく、手の脂が用材に着くと後に必ず汚點を現はすからである。何故に檜材にこの現象が著しく起るか、檜以外に於て如何なる程度にこの現象が起るかははまだよく知らない。

以上の經驗から推察するに、養源院の天井に點々として手や足の痕の見へるのは、必定造營の際大工や人夫が脂手で用材を取扱ひ、脂足で踏んだ爲にその痕が現はれたのであらう。なほ注意して見ると、手の痕は天井斗りでなく、柱や羽目板にも隨所に見へるのである。

◇

只だ分らぬのは、京都の無數の神社佛寺に、之に類する實例を聞かぬことであるが、なほ詮議して見たならば、恐らくは他にも多少の類例を發見するのであろう。去るにても養源院のみが特に著しく目立つのは奇蹟であるが、これ軈て桃山の血天井の傳說を產んだ所以であろう。

佛說に從へば釋迦の軀體に三十二相と云ふものがあるが、若し釋迦が眞にこれを具備して居たとすれば、夫は途方もない畸形兒である。否到底之を具備し得ないのである。その具備し得ざるものを具備して居る處が釋迦の釋迦たる所以かも知れぬ。

◇

先づ三十二相なるものを列擧して見ると、(一)足下平滿相、(二)足下千幅輪相、(三)手足柔輭相、(四)手足長指相、(五)手足指鞔相、(六)足痕廣平相、(七)足趺高滿相、(八)伊泥延腨相、(九)正立靡膝相、(一〇)馬王隱藏相、(一一)一孔一毛相、(一二)衆毛上向相、(一三)細薄身皮相、(一四)眞妙金色相、(一五)七處平滿相、(一六)肩頂圓滿相、(一七)腋下平滿相、(一八)大人直身相、(一九)身相端嚴相、(二〇)身體廣長相、(二一)上身獅子相、(二二)面各丈向相、(二三)四十齒齊相、(二四)四牙鮮白相、(二五)常得上味相、(二六)廣長大舌相、(二七)弘雅梵聲相、(二八)牛王眼睫相、(二九)紺青眼睛相、(三〇)獅子王頰相、(三一)眉間白毫相、(三二)頂上肉髻相とある。

◇

これで見ると隨分不思議な形相で、就中第五相では手足の指に鵞の如き水搔きがあり、第十四相では全身が金色に光り、第二十二相では齒が四十本あり、第二十六相では舌の大さが面を掩ふ程であり、第三十二相では頭の頂に肉瘤があるなど、到底眞人間ではない。併しこれ等の畸形はなほ有り得べしとするも、絕對に有り得ないのは第九相と第二十相との共存である。第九相では手を垂るれば膝を掩ふと云ひ、第二十相では左右の手を廣げた時指端から指端までの長さが頭の頂から足の裏までの高さに均しいと云ふのである。この二ツを別に考へれば別に不思議は無いが、同時に考へると到底不可能となるのである。

若し兩相が同時に成立するとすれば、或は殆んど肩幅の無い人が、或は殆んど上腿の無い人とならなければならぬ。若も肩幅が充分であれば膝が腿の附け根の處になければならず、脚が普通であれば肩幅が無くなることは、試にこの約束に從て釋迦の像を畫いて見れば直ちに分るのである。

尤も釋迦は必しも常に三十二相の總てを示したのではなく、隨時その中の若干相を現はしたので、現に三十二相を完全に具備した佛像はその實例を見ないと說明するかも知れぬが、それは餘りに曲解である。

◇

由來この三十二相なるものは何時如何にして拵らへられたか、予は未だ詳なることを知らぬのであるが、恐らくは一半は上古佛陀の姿を石に刻し又は壁に畫いた時、製作の都合で自然輪廓が非寫實的になり一半は佛陀の超人間的尊容を現はさんが爲に故らに不自然な形相を作つたのを、後世造像の型典にしたのであると思ふ。

然るに何を勘違ひしたものか、古今日本では三十二相具足と云へば絶世の理想的美人の條件であると思つて居るかの如くであるが、冗談ではない、陰部は馬の如しとあるではないか。若し眞に三十二相完備の人間が現はれたならば、之を見た人は卒倒せずには居られまい。予は試にその姿を畫いて見ようと努力したのであるが、何分前記の第九相と第二十相の矛盾を適當に處理することが出來ないので、終に形が纏まらなかつたのである。

八左甚五郎

慶長寛永の間に造られた神社佛寺宮殿等の建築若しくは建築彫刻に、左甚五郎の作と稱するものが可なり澤山ある、甚五郎なる建築家又は建築彫刻家は果して實在であるや否や、頗る疑問とされて居るが、今の處これを否定すべき確證もなく、又肯定すべき證據も無い樣である。但し「歌俳百人撰」によれば、彼は播州明石に生れ、後伏見に住ひ、寛永十一年四十一才で死んだと云ふ。若もこれが正しいとすれば、世間に傳へられた彼の逸話は大抵虚僞になるのである。指しづめ伏見桃山城の落成は文祿三年即ち甚五郎誕生の年であるから、桃山の建築や彫刻に彼が關係する筈はない。次になほ最も人口に膾炙して居る二三の例を擧げて見よう。

◇

一は京都知恩院本堂の軒下の抖拱の間に挾まつて居る骨斗りになつた傘で、これは左甚五郎が置き忘れたのだと傳へられて居る。この本堂は寛永十六年に出來たもので、屈指の名建築と稱せられて居るが、東南の隅に當つて軒下に傘の殘骸が挾まつて居る。これを左甚五郎に附會したのは、この傘に由て觀衆の眼を堂の軒廻りに引きつけ、傘と比較してその搆架材の如何に巨大であるかを感知せしめ、同時に抖拱が如何に精巧なる組み方に成つて居るかに注意せしむる爲であると解する說は頗る要領を得て居ると思ふ。併し甚五郎は既に五年前の寛永十一年に死んで居たのである。

◇

二は日光東照宮の眠猫である。傳說によれば、甚五郎は一生の内に只だ二疋の猫を彫つた。一疋は

大阪の四天王寺に在つて牡であり、一疋は日光に居つて牝であると云ふ、東照宮は寛永十一年起工、同十三年の竣成であるから、甚五郎の死後の造營である。眠猫は本殿の周圍の廻廊の東南部、奥の院に通ずる路に當る開口の上の蟆股の中の彫刻で、成る程よく出來ては居るが、別に非凡の技工として驚歎すべきものでもない。之を甚五郎の作として日光第一の名物にしたのは、恐らくは人の眼をこゝに集中すると同時に、人の足を奥の院に向けしむる爲であらう。奥の院の入口は廻廊の東南部の凹入した處にあるので、人足が自然遠くなり勝ちである。此處に眠猫を置て招き猫に利用した遣り口は中々巧妙であると思ふ。

◇

なほ甚五郎に關する傳説中で多少重要視すべきものは、近衛三貌院信尹が自邸の唐門の扉の一方は甚五郎に、一方は當時の巨匠甲良宗廣に命じて彫刻を施さしめた。然るに其成績は甲良の方が優つたので、彼に豊後の稱號を與へたと云ふのである。甲良豊後宗廣は徳川幕府の大棟梁で日光廟建築の技師長である。若も甚五郎の技倆が甲良に及ばなかつたとすれば、彼の手腕も亦た知るべきものであらう。尤も近衛信尹は慶長十九年に薨じた人であり、彼が門に彫刻せしめたのはその數年前であると假定すれば、甲良は四十五六才の練達の時代、甚五郎は十五六才の小僧であるから相撲にはならなかつたかも知れぬ。

九　小堀遠州と桂離宮

我が茶道や生花に遠州流と云ふ一派を開いた小堀遠江守政一に關する逸話は、隨分人口に噲炙して居るが、就中彼が一生一代の傑作と稱せらるゝ京都の桂離宮の庭園乃至茶室は、兎に角大に觀るべきものがある。これに就て例の如く一條の傳説が語り傳へられて居るが、夫は左の如きものである。

◇

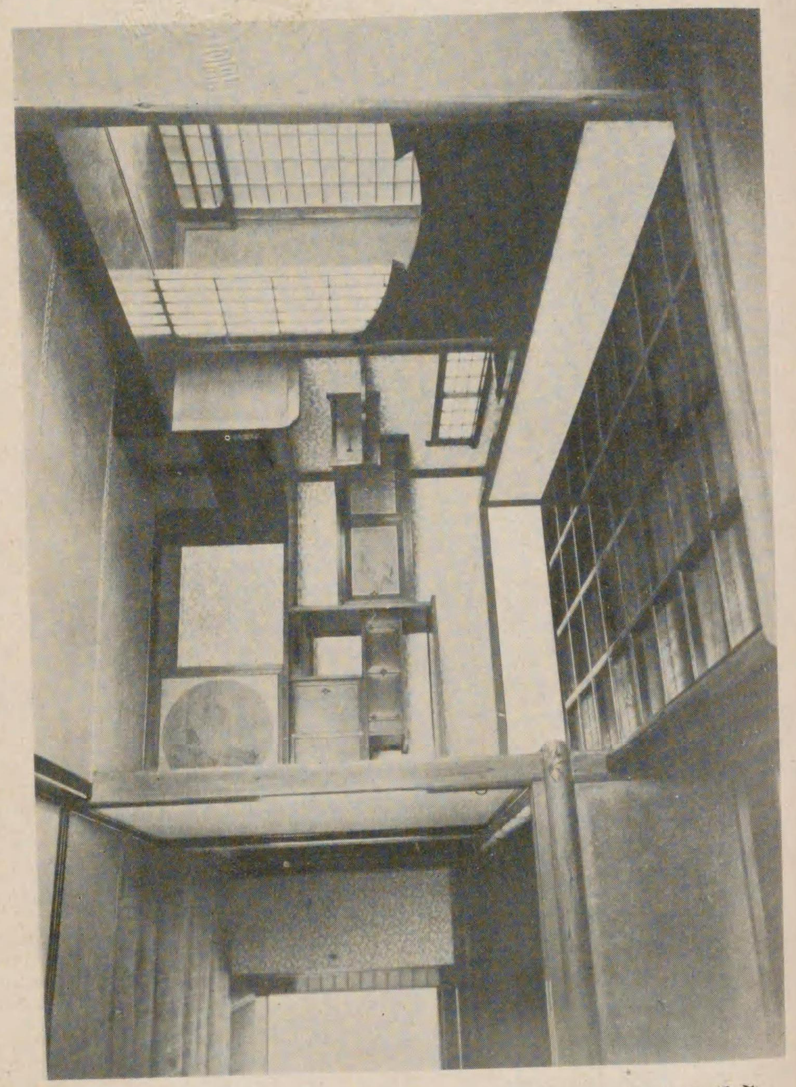
桂離宮は豊臣秀吉が小堀政一に命じて考案實施せしめたものであるが、小堀はこの命を受けたとき秀吉に向つて三個條の條件を提出し、この條件が容れられたならば引き受け樣と申出た。その一は意匠考案に就ては絶對に他の容喙を許さないこと、その二は竣功期限や工費に制限を設けぬこと、その三は工事中は絶對に見に來て呉れるなと云ふことであつた。寛大な秀吉は欣然として之を承諾したので小堀は丹精を抽んで、思ふ存分にその技倆を揮つたので、あの樣な美しい庭園や茶室なぎが大成したと云ふのである。併しこの傳説が全然虚構であることは甚だ明瞭である。

◇

抑〻小堀遠州なる者は、天正七年の生れで、始めは秀吉に仕へて居たが、後には德川家康に仕へた。豐臣滅亡後、元和九年に伏見奉行となり、在職二十五年間、頗る治績を擧げた。茶道は千の利休の門人古田重能に就て學び、終に一家を成したのである。彼は所謂萬能の人で、茶道以外に總ての美術工藝に精通し、殊に繪畫は狩野探幽と親交のあつた關係から狩野流の畫を能くしたと云ふ。正保四年二月六日六十九歲で死んだ。

◇

この年譜から算出すると、秀吉の薨じた慶長三年には、小堀はまだ二十才の少年である。さて又桂離宮は天正十五六年頃、即ち小堀が九才か十才の頃、秀吉が正親町天皇の皇子陽光院の第六子智仁親王を謂ふて猶子とし、八條の宮と稱してその別墅を桂の里に造營したので、今現存する舊御殿は即ちこれである。新御殿茶室庭園は、二代智忠親王の時、德川氏が小堀に命じて造らしめたもので、寛永の初年に完成したと云ふが、これは眞實であると認められる。即ち元和の終か寛永の初かに、伏見奉行たりし小堀が造つたので、秀吉とは全然關係がない。若し小堀が三個條の注文を提出したとすれ



桂離宮新御殿内部

ば、夫は二代將軍秀忠か、三代將軍家光に對して試みたものでなければならぬ。

◇

小堀の三個條の要求なるものは、畢竟藝術家の理想を事に托して假作したので、之に類似の傳說は古今に珍らしくない。今日に於ても富豪が趣味の爲に造營する邸宅庭園類には、工費と期限に制限を設けぬ例もあるが、意匠考案を技師に任せて干涉しない例は殆んど無い、況や工事中絕對に見に來ないと云ふ條件は到底成立しそうにもない。官公の造營に至つては一から十まで干涉づくめで殊に會計法で縛られるから碌なものゝ出來よう筈はない。されば桂離宮の庭園建築は餘りに巧である。寧ろ巧に過ぎる。これ遠州の長所にして同時に短所である。

十　鳴　龍

日光東照宮の本地堂、即はち德川家康の守本尊なる藥師如來を祀る所の佛堂の內陣の天井に、狩野永眞筆と稱する墨繪の龍が蟠まつて居る。この龍の頭の下に立て拍手すると、之に應じて天井でビリ〳〵と震へ聲の反響が聞こへる。是が即ち日光名物の一なる鳴龍で、多くの見物人を驚かせ又は喜ばせて居る。

◇

この反響は龍の頭の下で拍手しなければ起らぬのみならず、その音響は龍頭の直下でなければ聞こへない。これは何故であるか、久しく疑問とされて居たが、今以て誰も的確に解釋を與へて居らぬ。曾て或は龍の頭に當る處の天井板に龜裂があるか、或は龍を描いた紙が破れて居る爲に、そこに震動が起るのであらうと想像されたが、實際の調査によつて紙にも板にも異狀が無いことが慥かめられた。

◇

最近早稲田大學の理工科の助教授佐藤武夫氏が精密なる調査を遂げて、その眞相を闡明されたが、氏は堂の天井板が偶然龍の頭の處で微かに彎曲して上つて居ることを發見された。誇張的に云へば天井の一部が下から見て球體若くは楕圓體類似の形に彎入して居るので、拍手の音波がその凹底に中り反射してその人の頭の邊に集中する。鳴龍の正體は即ち之であると云ふ事である。精しくは何れ同氏から近く公表される筈である。なほ同氏の調査によれば、此種の類例はなほ他にもあると云ふ事である。

最近余の知人某氏からの報告によれば、某氏の逗子の別墅に於ける一室に於ても同樣の現象があるといふ。夫は普通の木造の統日本風の家であるが、疊を撤去して床板を露出した上で拍手すれば、之に應じて天井に反響が起り、疊を敷き込めば消滅すると云ふのであるが、成る程有り得べきことである。

◇

要するに鳴龍は單純なる反響であつて、別に何の不思議も無いらしい。反響は床と天井の間に限るのでなく、壁と壁との間にも起り得る譯であり、又その響音の性質も四圍の狀態や音源の位置や、その他種々なる條件に由て無究の變化を生ずる譯で、之を徹底的に研究することは專門的の大事業である。

日光の鳴龍は何時頃發見されたかよく分らぬが、明治三十何年かであつたと記憶する。この建築は創立以來幾度か修繕されて居るが歲月を經るに從て天井や床の面に異動を生じ、いつしか偶然にも斯の如き奇蹟的現象を見るに至つたものと思はれる。さるにても夫が丁度畫龍の頭の所であるが爲に獨り本地堂をして名を成さしめ、日光の財源の一たらしめたのは僥倖の樣でもある。併し今後この建築に大修繕を加へたならば、或は畫龍は沈默するかも知れぬ。若し日光の當局者が、名物を失ひ財源

を失ふことを恐れて修繕を加へず、終に荒廢に陷らしむることがあらば、これ日光の禍である。

十一　龍

支那に於て創案された龍なるものは一體何から暗示を得たか、未だ何人も明答を與へて居らぬ。或は前世界の巨大なる爬蟲類の或る種類から暗示を得たと考へ、或は今も南洋方面に棲む大蜥蜴の一種から案出したと想像し、或は鰐から轉化したと推斷して居る。

◇

一體支那で龍といふ文字の見へるのは何時からであるか、之を文獻に徵すれば、伏羲氏の時龍瑞が有て、龍を以て官に紀したと云ひ、黃帝の時龍が胡髯を垂れて迎へたと云ひ、禹の時黃龍船を負ふと云ひ、孔甲の時二龍天より降ると云ひ、孔子は老子の捕捉し難い老怪の人格を龍に比して嘆息した。斯の如く龍に關する記錄は太古からあるが、さて龍の形を畫き又は彫刻した實物は後漢以前には見當らぬ、周禮によれは周の天子の正裝にはその衣に龍が畫かれ、爾來龍は天子の表象となつたが、その正體は不明である。周の銅器には龍の兒と稱する螭虬・虬などの文樣はあるが、夫は不得要領の蛔蟲の樣なもので、肝腎な龍は更に見へない。

龍の石像畫祠梁武漢後

上　奈良藥師寺金堂本尊の蓮座の龍

下　京都大德寺法堂天井の龍

◇

後漢以來始めて現はれた龍の姿は、今日の龍とは似ても似つかぬ動物である。夫は山東の武梁祠の畫像石や、四川省の各地から發見された墓の石闕や、その他の漢碑の螭首等にも見へ、鏡や甎の裝飾文としても現はれるが、頭は獸の如く、双角を備へ、反轉せる長唇を飜へし、長き髯と鬣を振ひ、四肢と軀體は爬蟲に近い、往々翼を備へて居るが、夫が後には變化して火焔の如き形となつた。

◇

龍の風貌は唐代に於て最も優秀であつたが、宋以後漸く變化し、古への深刻神秘の氣韻を失ひ、形は追ひ〳〵に蛇に近づき、顏は徒らにとげ〳〵しくなつて今日に及んだので、日本に於ける龍の變遷も之と大同小異である。奈良朝の神韻漂渺たる龍と、江戸時代の狩野家の衒氣滿々たる龍とは到底日を同じくして語るべきでない。

要するに、龍は支那人の創作した空想的動物で、地を走り、空に翔け、水に潛み、出沒自在の神通力を表はす爲に一種の混成的生物を考案したのである。故に龍には一定の型が無い。角が一本でも二本でも、夫が牛の如くでも鹿の如くでも、髯が鯰の如くでも螺蟻の如くでも、顏が駝駱の如くでも鼻

が獏の如くでも手足が軍鷄の如くでも一切作者の意匠に任せて構はぬのである。

◇

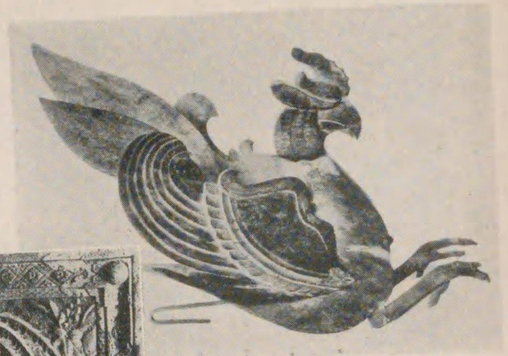
龍に似た怪物の考案は支那以外にも類例が多い。印度のナーガも龍と譯され、西洋のドラゴンも龍と比定されて居るが、支那の龍とは根本的に構想を異にする。ナーガはコブラと云ふ毒蛇から案出したので、一頭から九頭まであるが、形は餘り美化されて居ない。ドラゴンは爲體の知れぬ醜怪なる惡魔で、何等藝術的に妙味が無い。流石に支那の龍は古代に於ては得も云はれぬ雄偉なる威容があつたが、夫も追々醜化して今日の樣な卑俗なる怪物となり果てたのは洵に悲慘な運命である。

十二　鳳

支那で創造された神靈的動物の兩横綱は龍と鳳である。鳳は鳳凰の略だとも云ひ、鳳と凰は雄雌の別だとも云ひ、色赤きは凰で青きは鸞だなぞゝも云ひ、例に由て諸說紛々である。

鳳は聖人が出なければ現はれず、梧桐に非ざれば棲まず、竹實に非ざれば食はず、醴泉に非ざれば飲まず、羽毛五色にして聲五音に中り、世に道あれば見はれ、飛べば群鳥之に從ふと云ふ。

◇



上より
一　法隆寺金堂天蓋の鳳
二　日光東照宮拜殿内の鳳
三　宇治鳳凰堂屋上の鳳
四　大和南法華寺藏磚

鳳の起源が何であるかは明かでないが、その字音が Phöng であるが爲に、之を埃及の Phönix から出たと附會する說もある。Phönix はアラビアに棲む鷲に似た靈鳥で、五百年目に一度ヘリオポリスの神殿に來り、自ら身を燒いて灰の中から再び雛となつて現はれる。即ち彼は不死、又は永久を表徵するものとせられて居る。この埃及人の Phönix に對する思想と支那人の鳳に對する思想とは全然異なるので、その字音の類似を以て同根と考ふるのは甚だ早計であると思ふ。

◇

鳳の姿は既に周代の銅器に鳳紋として現はれて居るが、全く文樣化して居て正體は不得要領である。漢代には朱雀として鏡・碑・甎・闕等に靑龍と共に現はれて來るが、これも甚しく便化されて生物的本質が晦まされて居る。唐に至つては立派な風貌となり如何にも鳥類の王らしい態度となるが、夫から段々低下して品位を失ふことは龍と同樣である。

◇

茲に面白いことは唐の德宗の崇陵に石鳳として石に鳳を刻したものが立つて居るが、その鳳が慥かに駝鳥である。之は德宗が愛飼して居たので、德宗の死後その靈を慰める爲に石に刻して陵前に供へた

のであらうと解せられて居る。然らば鳳は駝鳥から暗示を得たか、否そうではあるまい。漢の武帝の上林苑に飼養されて居た條支の鳥と云ふのは駝鳥だと思はれるが、それ以前にも支那に傳はつて居たかも知れぬ。併し支那で鳳を空想したのは更に夫よりも遙かに古いと認めねばならぬ。但し鳳には『大鳥』の意があつて、駝鳥の如き巨大なる鳥は譯もなく之を鳳と稱したのであらう。

◇

要するに鳳は常識から考へて、孔雀、錦鷄、樂土鳥等の美鳥から暗示を得て、之を極端に修飾し誇張したのであらう。孔雀の孔は大の意、雀は鳥の總稱である。然らば孔雀は即ち大鳥、即ち鳳ではあるまいか。只だ鳳凰の文字は慥かに外國語の音譯であると思ふ。即ち何等か鳳凰の漢音Phông Whang に近い名を有する孔雀の種類の鳥が何國にか有れば、夫れが即ち鳳の起源であることは疑ひない。

◇

日本では鳳は飛鳥時代以來連綿として或は彫刻に、或は繪畫に、或は文樣に、各種の方面に賞用されつつ來つたが、飛鳥の古勁、奈良の雄渾、平安の優麗とりどりに面白い。爾來漸次に衰頽し、今日に至つては只だ古への殘骸を遺すのみである。

十三　麒麟

支那の瑞獸の一なる麒麟は、勿論空想的動物であるが、その文字は外國語の音譯であることは明かである。元來漢語は單綴一字主義で、二字以上を連ねて一語とするものは無い、若しあればそれは形容詞或は修補字を前後に附加したものであるか、或は二語以上の合成である。同じ偏や冠を有する二字連續の物名は殆ど總て外國語の音譯で、その偏や冠は所屬を示すのである。麒麟・狻猊・駱駝・瑠璃・葡萄・莨菪等數ふるに遑がない。

◇

麟麟の古音はキラムであろう、キラムはキラフと音通である。然らば麒麟の起源はギラフ又ジラフであろう。ジラフは今はアフリカ内地に限つて產するが、太古も今の如くであつたか否かを知らぬ。又ジラフの語源が何處にあるかも知らぬ。要するにジラフが古代に於て支那に傳來したとき、漢人が之を見て其稀有の珍獸なるに驚き、例の空想を逞うして之を瑞獸とし、之を靈化して奇怪の姿に作り上げたのであろう。

漢人の空想に從へば麒麟は聖人の出る瑞兆として現はれ、生草を履まず、生物を喰はず、形は鹿の

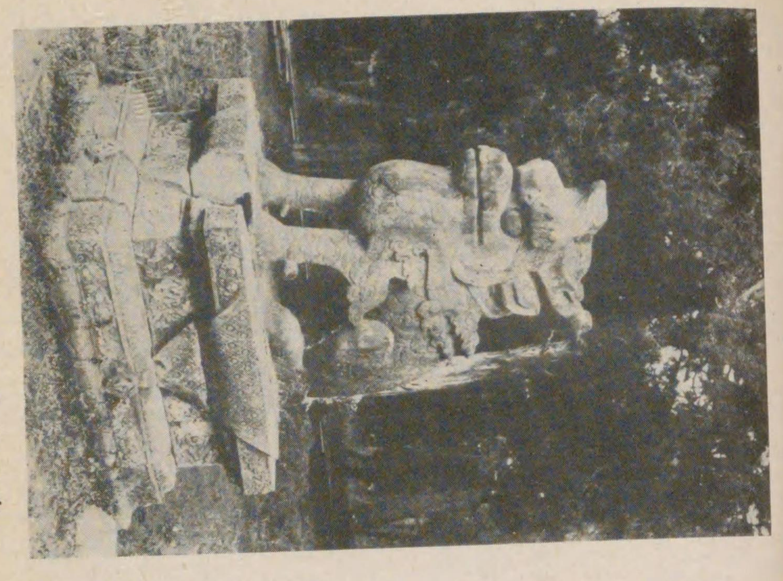
如く、尾は牛の如く、蹄は馬の如く、頭は一角ありと云ふから、大體ジラフに似て居るのである。但角が一本であると云ふ點が不思議である。

支那の古圖に現はれた麒麟は鹿の類の如く、やゝジラフにも以て居るが、後世に至るに從て追々變化し、果は頭も胴體も龍の如く、尾は唐獅子の如くなり、肩に火襷をかけて居るが之は翼から變化したものである。日本では麒麟の彫刻や繪畫は主として桃山時代以後に實例を見るが、元來六ケ敷い混成獸であるから古來傑作と稱すべき程のものは見當らぬ樣である。明治末年頃と記憶するが、東京の日本橋の欄杆の親柱につけられた麒麟の如きは蓋し醜劣の極に達した惡作であらう。

◇

支那で古來麒麟を捕獲した傳記がある。たとへば孔子が春秋を作り、筆を魯の哀公十四年、西狩して麟を獲たるに絕つと云ひ、漢の武帝は麒麟を獲たとて閣を作つて其像を畫かしめ、之を麒麟閣と名けたと云ふ。宣帝の時匈奴が服從した記念に、功臣十一人の像をこの閣の壁面に畫かしめたことは有名である。併しこの傳記の麒麟が如何なる動物であつたかは不明である。

支那式の麒麟の圖は、支那系の文化を傳へた地方には往々その例を見る。殊に土耳其・波斯方面に



麟石の陵北天奉

碑麟麒漢

も之を發見するのは甚だ興味ある事である。波斯では第十五六世紀以後の陶磁器や織物の文様に現はれて居るが、土耳古では北叙利亞のハレブ市の某舊家の壁に畫かれてあるのを見た。これは家人の話ではその當時から約五百年を經て居るとの事であるが、實に珍らしく感じた。

麒麟の姿も、龍や鳳と同じく勿論一定の型は無い。如何なる姿に作つても誰も咎めはせぬが、今日に於てその普通の型とせらるゝ所は、先づ麒麟ビールの商標に描かれて居る樣なもので、誠に藝術味の乏しい醜怪なる動物である。現今の支那に於ても同樣甚しく低級に墮ちて居る。

十四　狻猊

狻猊は獅子である。獅子は梵語で Simha であるが、又 Sinha 或は Singha とも發音される。猊はその音譯であり、獅子はその頭の si を取つた略稱である。

元來支那には獅子を產しない。文獻に徵すれば古い處では後漢の章帝章和元年に安息國から、翌年月氏國から、和帝の永元十三年安息から、順帝の陽嘉二年疏勒國から各々獅子を獻じて居る。即ち西方亞細亞・中央亞細亞・西北印度等から傳來したのである。

始めて獅子を見た支那人は驚くと同時に喜んだに相違ない、そして之を百獸の王として畏敬し、魔を卻け鬼を防ぐの靈獸として、例に由て空想化したのであろう。

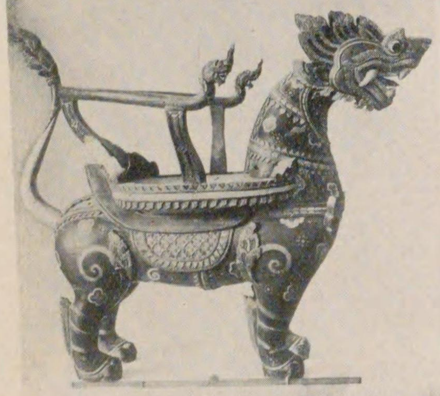
獅子の最古の遺例は恐らくは後漢の武梁祠の前に一對据へられた石獅であらう。夫は可なりよく獅子の特徴を捕へて居る。魏の曹操が造つた銀雀臺の遺趾から發見された石獅は更に寫生に近い趣があつて實に面白い逸品であるが、これは今東京の大倉集古館に藏せられて居る。

◇

六朝以後の實例は無數である。六朝の翼ある獅子は蓋し最奇拔なものであり、唐の獅子は最形の整つたものであるが、既に大に寫實に遠ざかり、所謂唐獅子、狛犬なぞの型に進んで居る。宋以後意匠も工作も漸漸に低下して今日に至つたことは他の工藝と同程である。

◇

獅子の彫刻・繪畫・文樣等に於て最も意匠の豊富なるはサラセン系の藝術である、夫は獅子の產地であるからである。之に次ぐものは、印度系、又之に次ぐのが支那系で、日本は支那系であるが、獅子の實物を見たことが無い爲に、しきりに空想を畫いたのである。夫も例に由て奈良朝頃が最雄健で



上　支那江寧縣梁安成康王陵の獅子

中　東浦塞の獅子（東京河内東洋學院藏）

下　アッシリアの獅子（メリポタミア、ニムルードの王宮趾にて發見）

あつたが、時と共に低下した。神社によく見る狛犬なるものは蓋し獅子から一轉したものである。

◇

さて獅子の語源が梵語の狻猊であるから、印度地方には狻猊に因む地名が少なくない。錫蘭は古へシンハラ國と云つたが獅子國と譯されて居る。シーロンは即ちシンハラの轉訛である。印度内地にシンハプラ即ち獅子城といふ地名が數ケ所にあり、後印度にも一つ有名なのがある。夫は即ちシンガポールで、本來シンハプラ又はシンガプラと云ふべきである。之を新嘉坡と音譯するのは可笑しいので若し古典的に云ふならば狻猊城、略して云ふならば獅子城である。

◇

獅子と佛教とは深い關係がある。釋尊の座の下に獅子が居るので之を獅子座と云ひ、釋尊の説法を獅子吼なぞ云ふ。文珠菩薩はよく獅子に騎つて居る。斯くて佛教國では獅子に對して或る信仰を有ち獅子を刻し又は畫くにも敬虔の念を以てするから自ら寫實を離れた神秘的なものになる。西洋では兎角之を單なる猛獸として取扱ふから、形は巧に出來ても、そこに何等の妙味もない。

葡萄は元來裏海の南部から、カウカサス地方に產したもので、夫から西方亞細亞・埃及・希臘方面に弘布され、終に全世界に蔓延したのだと稱せられて居る。支那へ初めて葡萄の輸入されたのは、前漢の武帝の時、博望侯張騫が月氏に使して匈奴に囚へられ、後囚を脫し、月氏の跡を追ふて今の露領トルケスタンに入り、更にペルシアに入て西亞の事情を窮めて漢に歸つたが、彼は西亞の多くの文物と共に葡萄を漢土に傳へたと云ふのである。

◇

葡萄の文字は例の如く希臘語ボトルスを音譯したのである。最初は蒲桃と書いて居たが、蒲陶又は葡桃と書いたのもある。日本に傳はつたのは何時であるかよく知らないが、裝飾文樣に現はれた處では南都藥師寺の金堂內の本尊藥師如來の臺座に鑄出してあるのが最古であると思ふ。年代は白鳳時代である。これは葡萄の珍果であり、之を食へば藥餌として壽を延ぶと云ふ信仰から、藥師如來に聯關させたのであると解し得るかも知れぬ。

◇

この葡萄から草の形式には西亞乃至東羅馬の氣分が現はれて居るのは、歷史的に見て甚だ面白い現象である。

支那では海獸葡萄鏡又は海馬葡萄鏡とて、裏面に何やら怪獸と葡萄から草とを現はした鏡が葡萄を適用した最初の物であると思はれる。これは一般に六朝から行はれたと考へられて居るが、支那では古來漢に初まると言ひ傳へ、今日でもこの說を固守する一派がある。

◇

西亞以西では數千年前から葡萄を裝飾紋に使用して居る。その古さは的確には知り難いが、埃及では五千年前既に葡萄から酒を造つて居たと云ひ、少くも三千年前と認められる遺物に葡萄の圖樣が見へる。亞述利亞、波斯、希臘等にもその太古時代から實例がある。

◇

葡萄の種類は非常に多い。支那では何時頃からか知らぬが、黃・白・黑の三種に區別し、黃を蒲陶、白を馬乳、黑を黑水晶と稱した。今日でも世界一般に葡萄の種類を大別して赤・白・黑の三種として居るが、日本產では甲州葡萄が最も有名で赤種に屬して居る。

◇

葡萄に關聯して一小笑話を添へる。予の知人某君一ツも外國語を知らずして歐洲漫遊を試み、佛國の某旅館に投じて夕食の卓に就き、さて葡萄酒を命じようと思つたが言葉を知らない。いろいろ考へた末、ポルトガルを葡萄牙と書くことを思ひ出し、必定葡萄はポルトに相違ないと考へ、給仕にポルトをと命じた處が、物の美事に命中して、給仕は早速ポルトワインを持て來た。

◇

某君は得意滿面でこの事を知人に吹聽し、これだから外國語は知らずとも結構用は辨ずると誇つて居た。勿論葡萄牙は、ポルトワインの主要なる生産地である。

十六　酒

世界に於ける酒の始まりは知らないが支那では禹の時儀狄が始めて酒を造つたといふ。禹之を飲んで美しとし、後世必ず酒の爲に國を亡す者があるだらうと言つて、終に儀狄を疎んじたといふが、儀狄こそよい迷惑である。

◇

爾來四千百餘年、果して酒の爲に身を亡ぼし、家を亡ぼし、國を亡ぼした例は無數であるが、また之が爲に身を興し家を興した例も澤山あつて、酒に關する逸話は限なく豐富である。孔子でさへ、只酒は量なし、亂に及ばずと曰はれた位で、時には百藥の長と賞せられ、天の美祿と稱へらる。酒の利害は微妙なる實際問題で、一片の理屈では片付けられぬ。

◇

酒に關する挿話の一として茲に支那の昔話を擧げて見よう。北宋の仁宗から神宗の代に、有名なる王安石と司馬溫公とは時を同ふして世に重んぜられたが、安石も溫公も大の下戸であつた。或時さる處に饗宴が設けられ、兩人共に之に臨んで席を列ねた。主人は二人に酒を薦めたが、安石は辭して受けない。薦むること再三に及んでも彼は頑として受けない。主人も終に强ゐることを得ずして止めた。溫公も始は固辭して受けなかつたが、主人の要請極めて懇切であつたので、終に枉て一盃を手にした。之を見た列座の客は、安石の剛愎にして意志の頑强に驚くと同時に、溫公の溫情の深きに敬服した。宴果てゝ後溫公は、安石の態度の强硬なりしに引きかへ、己の意志の薄弱なりしを恥ぢ、我終に安石に及ばずと歎息したと云ふ。

◇

しかも安石はその剛愎に祟られ、その政策は天下の怨を招き、終に逆境に陷て悶死したが、溫公の德は普ねく世人の敬慕する所となり、功成り名遂げて終を全うしたのである。この二人の性格が一盃の酒に由て現はされたのは面白いではないか。

◇

之に對して近頃頗る科學的な挿話の一ツを擧げて見よう。或る年我が工學部で職員學生打ち連れて日光へ遠足を企て、某館に晩餐の宴を開いた。團長格の中野初子博士が上坐に陣取て頻りに盃を傾むけて居る所へ、一學生が押しかけて來て獻酬を請ひ、さて先生はごれ程お飲みになるかと問ふた。博士はニツコリともせず、いくらでも飲むと答へられたので、學生は呆れ顏、でも大抵酒量に限があるでしやうと反問すると先生は「馬鹿ッ」と一喝して置いてさて破顏微笑、酒量は時間の問題だ、時間を規定せずに酒量を問ふのは馬鹿である。學生に似合はぬ愚問である。無限の時間に飲み得る酒量は無限ではないかと言はれたので、學生は恐縮して引き下つたが、如何にも中野博士らしいとて、聞いて居る人々がさゞめいた。

◇

今一つ奇拔な話。或る酒客が健康を損じて醫師から一年間禁酒を命ぜられた。酒客は迷惑そうにやゝ暫く思案した後醫師に對ひ、二年間隔日に飲んでは如何？

十七　茶と茶室

茶の原產地は一ケ所ではない。支那では中國が茶の原產地で、夫から印度方面や日本に傳播したと稱して居るが、東印度諸島のシャヴァや、印度のアッサム地方も茶の原產地であると云はれて居る。畢竟茶に色々な種類があるからで、何れも原產地であらう。併し茶の文字が支那固有の一語一綴であるから外國語の音譯でなく、英・佛・獨等の茶の語音が漢音の轉訛と想はれるから、茶は支那から世界的に廣がつたと解せられる。

◇

支那で茶を喫み始めたのは唐からであると云ふ。唐の陸羽の茶經には詳細に茶の講釋が述べてある。日本では天台宗の開祖傳敎大師が入唐して將來したに始まると云ふが、その後中絕したらしい。鎌倉時代の始めに、臨濟宗の開祖榮西禪師が宋から將來して以來、茶は漸次に日本に廣まり、足利氏時代に至て始めて喫茶の作法が出來た。

◇

茶と禪宗とは密接なる關係がある喫茶の趣味と禪味との間に一脈の相通ずるものがあるからで、知名の茶室は多くの禪刹と相伴つて居る。大德寺の孤蓬庵●眞珠庵等の茶室、建仁寺の如庵、鹿苑寺（金閣寺）の夕佳亭、高臺寺の時雨亭、傘亭など類例は甚だ多い。喫茶の作法即ち茶道、俗に所謂茶の湯の濫觴は、足利義政の經營した東山の慈照寺（銀閣寺）の東求堂内の四疊半の一と間であると云ふ。茶道の宗匠の元祖は、義政と同時代の珠光であり、紹鷗から宗易即ち千の利休に傳へて大成した。

◇

茶道は、以前は專ら王侯貴人の遊嬉であつたかの觀があるが、利休以來普く士民の間に行はれる樣になり、其の直系の三代目の宗旦から、宗左の表千家、宗室の裏千家が分立し、なほ色々の別派が簇出し、江戸時代を通じて茶の大流行となり、終に日本全國津々浦々の各家庭に於て、茶を喫まぬ者は一人もない樣になつた。

◇

喫茶の作法を行ふ室を茶室と云ふ。又茶席と呼ぶ人もあるが、茶室と茶席とは同じではない。茶室は一室に與へられた名稱であるが、茶席は茶室を有する獨立の一棟である。併し茶席は普通の住宅ではなく、茶室を本位として之に若干の房室を配置したものである。その建築は元來書院造から出たので、之を崩し之を碎き、風雅簡素の趣味を發揮し、閑寂なる庭園と相俟つて、藝術味の豊なる特殊の建築を大成したのである。

◇

斯くて茶席茶室の出現と共に、我建築界に一大紀元が劃せられた。今迄は主として嚴めしい楷書の書院造の世の中であつたのが、一轉して風流な行草の茶的建築の世界が現はれたのである。同時に之に關聯して、茶に伴ふ工藝や美術の趣味が鼓吹せられ、江戸泰平の時代を飾つたのであるが、またその餘弊も少なくなかつた。兎に角吾人常住の日本風の家屋が今日まで發達して來たのは、偏へに茶のお蔭であるといふも過當では無い。

◇

日本に於て喫茶が斯くの如く藝術化せられたのに引き替へ、本家の支那では茶に對して頗る無頓着であつた。之が爲に特殊の作法の出現も見ず、從て建築界に多くの影響も與へず、美術工藝振興の副

作用も起さなかつた。日支の國民性の差は斯かる方面にも現はれて面白い。

十八　煙草

煙草の原産地は一般に南米にありとせられ、その原音 Tobacco は今や煙草の普及と共に世界共通となつた。支那では明代に始めて呂宋から傳來したと稱せられ、始めは Tobacco を音譯して淡巴菰又は淡婆姑と書いたが又菸草とも云ひ、又蔫の字を當てたのもある。日本では何故か莨の字を慣用し來つたが、今日では和漢共に煙草の字を常用して居る。

◇

日本に煙草の渡來したのは天正の頃葡萄牙人によつて輸入されたと云ひ、慶長十年種子を長崎の櫻の馬場に植えたるを嚆矢とすと稱し、又は慶長の初年薩摩の揖宿に植えたるを濫觴とすと唱へ、何れが正しきかを知らぬ。

◇

歐羅巴に傳來したのは、一五五八年西班牙王フイリツポ二世の時メキシコ探險隊が彼地から將來したと云ふ。英國の傳來は一五八六年にアメリカに旅行したローリ（W, Raleigh）なる者がヴァージニアから將來したと云ふ。米地には太古から喫煙の風があつたことは北米合衆國・メキシコ・ペルー等の有史以前の墳墓内から煙管が發見せられた事實に由て推知せられ、コロンブスがアメリカ發見當時、住民が喫煙して居るのを見たと記錄されて居る。

◇

喫煙の道具は、日本では煙管と莨入と煙草盆とが必要品であつた。煙管の語音キセルの語原はよく分らぬ。或は西班牙語の管から出たとも云ひ、或はオランダ語から轉訛したとも云はれて居る。キセルのラウ（羅宇）の語原もよく分らぬ。或は最初老樞國産の竹を用ゐたに由ると云ふが、餘り當にはならぬと思ふ。

◇

莨入は江戸時代貞享の頃始めて油紙で作り出し、緞子・繻絽・更紗等で作り出したのは享保頃であると云ふが、爾來急速に流行すると同時に種々な型が案出され、果は趣向を凝らして巧を競ひ奇を爭ひ、爲に莫大な價を費す樣になつた。

◇

支那では煙管の外に煙臺を賞用した。これにも彫縷を施したり七寶や象嵌で裝飾したものであるが日本の如き豊富なる趣味は無い。予の經驗によれば、支那大官の煙管は往々長さ三尺乃至四尺にも達するものがあり、自分で操縱することが出來ないので、必ず傍に從者が侍立し、主人の爲に雁首に裝塡したり點火するのであるが、如何にも支那氣分が現はれて面白いと思つた。安南では天秤棒を煙管に兼用し、荷を卸して休むとき、棒の先へ煙草をつめてスパリスパリやるのを見た。これは慥かに五尺位の長さであつた。

◇

近頃は葉卷又は紙卷の煙草が大流行を來たした爲め、卷莨入には相當意匠を凝らしたものや、精巧な立派なものも出來つゝあるが、昔の煙管・莨入・煙草盆の妙趣味は最早見られなくなつた。歐米の喫煙具のことはよく知らないが、何としても東洋程の凝つたものは無さそうである。

十九　火事

可燃質材料で家屋を造る以上、火事は當然免るゝことの出來ない災難であるが、都市の發達と並行してその災害が增進する。そこで消防の方法を研究し、不燃質の材料で家屋を造ることを考へる。斯くて大火は次第に減少する。

◇

日本に於ける古代の火事の記錄は極めて斷片的であるが、江戸時代から可なり明瞭になる。江戸時代の火事の兩横綱は明暦と安永の大火である。前者は明暦三年一月十八九日の二日に亘つた所謂振袖火事で、本郷丸山から三田札の辻まで燒けたので、恐らくは數萬戸を灰燼に歸せしめたらうと想ふ。安永の大火はその元年十二月二十九日に目黑の行人坂から千住の大橋まで延燒したと云ふから、之も前者と同程度のものと想はれる。この外これと伯仲の間に在る大火は少なくなかつた。例へば享保十年二月十四日の火事は靑山から谷中金杉まで延燒し、文化三年三月四日のは高輪泉岳寺から淺草まで燃へ拔けたと云ふ、その他數萬戸を燒いたと思はれる大火は實に十數回の多きに上るのである。何故に斯樣な大火が頻繁に起つたかと云ふと、第一は勿論江戸名物の烈風の爲で、夫は必ず常に東南乃至東南南、又は西北乃至西北北の方向であつた。第二は家屋の大多數が草葺又は板葺であつた爲に、火の子が先へ先へと飛び移つて、同時に幾ケ所からも燃へ上つた爲である。第三は消防の方法が幼稚であつたのみならず、鳶の者や役人共も只景氣よく騷ぐ斗りで眞劍味を缺いた場合もあつたからである。火

事は江戸の花なぞと云つて寧ろ自慢にして居た位なものである。

◇

明治以後は眞劍に火の元要心と家の構造の改良に努力した結果、大火は漸く減少し、昔は數千軒を燒かなければ火事らしい氣分にならなかつたが、今は百軒燒けても大火だと驚くやうになつた。夫でも明治の初年に一萬戸以上を燒いた大火が二度あつた。一は十二年十二月廿六日の日本橋箔屋町の大火で一萬四百九十三戸を燒き、他は十四年一月廿六日の神田松枝町の大火で一萬六百卅七戸を燒いた。

その後非常の大火は無かつたが、彼の大正十二年九月一日から三日にかけての大震火災は特別の場合であるが、東京全市の四割四分の面積を燒き拂ひ、約七割の家屋を烏有に歸せしめた。恐らくはこれ世界開闢以來の大火で、また恐らくは絶後のものであらう。

世界的大火と呼ばれる外國の數例を比較して見ると、一六六六年七月のロンドンの大火は同市の過半を燒いたと云はれるが、其燒失面積は僅かに五十三萬五千坪で、我が東京市の四谷區の三分の二に過ぎない。一八七一年十月北米シカゴの大火は二百六十萬坪を燒いたが、これ迚も我が芝區より稍小さいのである。一九〇六年四月の桑港の大火は三百六十八萬坪を燒いたが、これも本所深川兩區を合

せたものよりは小さい。即ち大正十二年の東京の大火は既往の大火とは全然比較にならぬものである。

◇

彼の大震火災の燒け止まりの原因の統計を見ると、バケツ手桶に由るものが一五・四九%であり、ポンプに由るものが一〇・五六%であり、破壞消防が二・四九%、土塊瓦を投じて防いだのが〇・七%で、その他は總て自然鎭火である。器械力に由るものよりも筋肉的努力に由るものが遙かに多かつたのは、大に吾人の注意すべき處であると思ふ。

二十　地震

地震は日本開闢以來の名物であるから、太古に於ても頻々として烈震が起つた譯であるが、之に關する傳說記錄は乏しい。第一神話に地震を暗示するものが無い。尤も、恐るべき天變地異は一切素盞嗚尊一人で引受けて居るかの觀があり、地震も、火山の爆發や暴風雨と共にその中に包含されて居ると解し得られるかも知れぬ。

記錄上では孝靈天皇の五年に近江の地が裂けて琵琶湖を生じ、駿河に富士山が噴出して近國が夥しく震動したと云ふを手初めに、追ひ〳〵地震關係の事蹟が現はれるが、後世に至るに從て具體的

となり詳細となる。最近大正十二年九月一日の相模灣の烈震を體驗した國民は今更の樣に驚いて爾來地震の印象は深く國民の頭に刻まれた。

◇

日本が古來木造建築で一貫し來つたのは、震災に對する考慮から出たと云ふ說は數十年來唱へられ今も之を信ずる人が少なくないが、これは非常な錯誤であると思ふ。元來地震が人間に悲慘な災害を與へるのは都市の發達に伴ふ家屋の密集、巨大なる建築物の聳立と震災に伴ふ火災とが主因であり、比較的近代の事である。古代に於て矮屋が三々五々散在して居た時には誰も地震の怖るべきことを感じなかつた。地震よりも頻繁にしてより恐ろしかるべき火災に對してさへ、近頃まで無關心であつた我が國民が、何で古代から特に地震を考慮すべき。日本の建築が古代から木造單層を原型として來たのは別に理由がある。

◇

記錄に現はれた處では、日本で地震に對して建築上特に考慮した形跡は江戸時代の柳營に地震の間と云ふ特別に堅牢な一室が造られたのを最初とする。安政の大地震の後、安政二年十二月に、江戸の町醫者小田東叡なるものが防火策圖解と云ふ一書を著したが、その中に彼の案出した耐震構造を圖解して居る。夫は柱の間に筋違貫を入れる法であり、洵に合理的な簡單なことであるが、普ねく行はれた形跡はなく、最近に至てもなほこの方法が慣用されぬのは、即ち我國民が如何に地震に對して無關心であるかを語るものである。

◇

近頃鐵骨及鐵筋コンクリート構造が耐震的に最も有利であるとして普及されつゝある。勿論夫に相違ないが、要は構造法と施工法の如何によることで、同時に地震に由て起る建築のあばれ方を的確に知るにある。今や我國の地震學は今村博士その他の專門家の努力に由て世界第一の位置に達し、遠からず地震豫報の可能なことが釋明されそうであると云ふ處まで進んだのである。併し實際問題として隨分六ケ敷そうであるが、若し完成されたら世界最大の功績の一である。

◇

餘話であるが、地震の和語なるの語原、地震の源因を鯰に附會した動機に就ては未だ會心の說明を聞かぬが、願はくは識者の敎を得たいと思ふ。但し雷の正體を怪獸とし、火の精を妖鳥に託するの

例に比すれば、地震の製造者を巨鯰とするのは寧ろ愛嬌があつて面白いと思ふ。

（自大正十五年十月至昭和三年五月「科學知識」）

紀行

琉球紀行

一動機

茲に東京美術學校出身の鎌倉芳太郎君は、曩に沖繩に教鞭を執つて居られた際、琉球藝術の研究に沒頭せられ、多大の成績を齎らして歸京されたが、琉球藝術を徹底的に研究せんとの大勇猛心を發し余に相談をかけられた。余は君に就て琉球藝術の說明を聞き、多大の感興を覺へたので、終に君と共にその研究に從事することになり、その資金を得べく財團法人啓明會に諮つて見た處が、幸にして承諾を得たので、鎌倉君は大正十二年四月先發して琉球へ行かれ、余は後れて七月に出かけたのである。

余はこれ迄琉球に關して何の研究もしたことがない、馬琴の弓張月を耽讀したお蔭で、頭の中に小說的な琉球が思ひ浮ぶ位のものであつた。いざ琉球研究となつて、泥繩的に豫備知識を得なければな

らぬことゝなつたので、取りあへず沖繩一千年史や中山世譜などを讀み出し、その他斷片的なる琉球に關する記事を新聞雜誌雜書等から集めて見たが、隔靴搔痒の感があつて中々要領が得られない。今更ながら琉球に關する知識が世に普及して居らぬのに驚いた。

次に余は琉球を見たと云ふ數名の識著に就てその事情を問ふて見たが、矢張り眞相は得られぬ樣に思はれた。甲は曰く、琉球は貧弱な孤島で格別見る所もない、古建築などは恐らくは無いだらう。乙は曰く琉球は珊瑚礁であるから不毛の地である、「琉球は石原小石原」と云ふではないか、丙は曰く、琉球の名物はハブとヤモリとアンガである、行て見て驚いてはいけない。丁は曰く琉球は非常に熱い食物もマヅい、水が惡い、用心しないと健康を損ずる。こんな消極的な話を聞かせられる斗りで、藝術上の話は一つも聞くことが出來なかつたので、悉く失望した。

しかし余の希望は毫もこれが爲に減殺されなかつた。何となれば余は鎌倉君の斡旋により、東京の尙侯爵家を訪ふて同家に傳はる數々の古琉球の藝術品を觀覽し、なほ同家にて琉球出身の東恩納文學士及數多の琉球研究家に會見して、親しく彼地の事情を聞き、古代琉球に於て一種獨殊の文化が成立して居たことを知つたからである。なほ尙家から余が琉球研究に關し特に便宜を與ふる樣、首里の侯爵邸へ沙汰せられたことは余に取ては非常な仕合せであつた。

二　彩雲

斯くて余は往復一ケ月の豫程を以て七月二十五日に東京を出發し、二十八日の朝鹿兒島に着した。兼て友人の注意により、旅舍に此日の午後解纜すべき船の一等船室を申し込んで置いたので、直ちに乘船が出來ることゝ思つた處が、大島附近に低氣壓があるとのことで、出帆見合せとなつた。

船は大阪商船の大信丸と云ふ千三百噸の老朽の小船で、元來支那の白河を上下する爲の河川用運送船であつたのだから、海洋には不適當である上に、琉球航路は海が甚だ荒い、殊に七島洋は黑潮を縫つて行くので大低の時は波が高い、況や七月以後は颱風の季節で、天候頗る測り難いものがある。余は元來船には極端に弱いので內心甚だ不安に思ひつゝその日を暮し、翌二十九日になつて見ると、天氣晴朗にして微風もない。旅舍から海を距てゝ眞正面に聳ゆる櫻島は、裾から頂まで赤裸々の雄姿を現はし、黑い溶岩の流れは物凄く手に取る樣である。

船は午後三時半威勢よくと云ひ度いが、實は蠢々として港を離れた、一時間九哩餘の速力と云ふのであるから心細い話である。船客の中には沖繩縣選出の代議士、製糖會社員、沖繩縣廳及鹿兒島縣廳

の官吏、その他數名あつたが、互に刺を通じ、旅のならいとて忽ち舊知の如く歡談を交へたのである。

余の琉球訪問のことが既に逸早く地方新聞に報道されて居たとて、船客等は遠來の珍客として余に好意を表して呉れ、琉球に關する事共を何くれとなく話して呉れるので、余も夫から夫と質問を連發して多大の知識を得たのであつた。日が漸く西に傾いた頃、右に海門岳の美容を仰ぎつゝ甲板の椅子に身をもたせて居ると、年若き一紳士が傍に寄り來り、「先生は科學知識によく畫をお出しになる伊東博士ですか」と云ふ。余は意外の知己を得た心地で、紳士と日の暮るゝまで科學談や琉球談に耽つたが、硫黄島も後に見る頃靜なる一日は過ぎ去つて星の輝やく夜になつた。

余は茲に琉球航路に於ける驚くべき大自然の大技巧、畏るべき神秘の大藝術を感得したのであるが、恨むらくは筆之を叙すること能はず、口之を說くことが出來ない。試みに只だ其現象の經過を述べて讀者諸君の想像に訴へることにする。

渺茫として際涯を知らぬ海洋は東の果から暮れ初め、輝々たる太陽はやがて波の中に隱れたと思ふ頃から、西の地平線上の湧き立つ樣な叢雲が次第〳〵に色取られて來た。次いで中天に飛ぶ綿の樣な靈芝の樣な、或は華紋のやうな散雲がとり〴〵と色ごられて來た、終りに東の地平線上に割據する重重しい層雲が色ごられた。忽ちにして血の如く、忽ちにして火焰の如く、一變して碧玉となり、再變して瑠璃となり、須臾にして紫となり紺となり、終に暗黑に沒するのである。その色の美麗なる、その光の鮮明なる、其變化の幻妙なる、其規模の壯大なる、何と形容する言葉も無い。余は今まで世界の各地方に於て未だ曾て斯の如き美しい彩雲を見たことが無い。或は琉球近海の特殊の現象か、はた南洋一帶の通有か、余は未だ之を知らないが、この偉大なる神力に對して恍惚として身を忘れたのであつた。昔し日本內地の人が遠く南島南洋に航してこの現象を見た時に、必ず神仙の國に近づいたと思つたに相違ない、龍宮城から立ち登る瑞雲と考へたに相違ない、余は琉球に於て必ず此の天象を詠じた偉大なる詩が生じたであらうと想像したのである。

只だ怪むべきは船客の一行がこの美しき造化の妙技に對して何等の感興をも起さないことである。多年見慣れた爲に免疫になつて居る人もあるかも知れぬが、去りとは無神經な話である。「ドーです、あの美しさは」と話しかけても「ナル程」とのなま返詞に、余は少なからず失望したのである。

三　奄美大島

夜がほの〴〵と明ける頃船は七島洋を南西に向ッて惡石島の邊を走つて居る。やがて奄美大島の山

山が見へて來る。午前十一時半と云ふに船は徐々として大島の名瀨港に入つた。鹿兒島を距ること海路二百五哩である。約一時間の碇泊の後再び出發すると云ふので、船客は何れも上陸を見合せたが、余はこの機を逸しては再び大島を見ることが出來ないかも知れぬと思つたので、沖繩縣土木課長をそのかして同行を求め、愴惶として小舟に飛び乘て六七町隔たつた海岸に上陸した。

海岸は直ちに名瀨の町である、町は三方山に包まれ、一方海に面した小都會で人口は二萬に餘ると云ふ全速力を以て市街を一と通り視察した處では、町は可なり活氣を呈して居る樣であるが、聞けば不景氣の爲に特產物なる大島紬が薩張り賣れない爲に弱り切て居ると云ふ。余の視察の目的は大島に於ける民家、琉球人の骨相風俗、土地の狀態等であるが、第一の民家は市街に於けるものは悉く內地化して居る、農村まで行つて見る時間は無し、この目的は終に達せられなかつた。第二の琉球人の骨相風俗は多少知ることが出來た、先づ第一に其頑丈作りな骨組、濃い眉と髯、輝く眼、等で直覺的にアイヌの血が傳はつて居ることを感ぜしめる、女子の手の甲から指へかけて色々な形の入墨がある、これは南洋的か、或は亦たアイヌとの關係か、將た又特殊のものかはよく判らない。芭蕉布や染更紗の特殊の衣服は始めて見る眼には珍らしい。

本島は約四十八方里の面積を有するが、見渡す所全島始んご山岳で、其最高峰湯灣岳は二千數百尺あると言はれて居る。山々には蘇鐵が叢生して居るのも面白く、奧には鬱蒼たる森林もあるらしい、耳を欹つれば、何處からか聞き慣れた鋸の音が聞こへる。これはこの近所に製材所があつて、山から伐り出す各種の木材を製材して居るのである。

要するに奄美大島は琉球人發祥の地と稱せられ、最高の湯灣岳は祖神臨降の地と言はれて居るが、まだ眞の琉球氣分は現はれて居ない樣である。否、夫は慶長十四年島津が琉球を征服して以來、大島の一群は薩摩の領土となり、廢藩置縣と共に鹿兒島縣に編入された爲め、琉球氣分は漸次に驅逐されて、內地氣分が侵入しつゝあるが爲でもあるが、自然の風物が既に充分に琉球氣分を發揮して居らぬ樣に思はれた。

愴惶として再び船に還つて見ると、數名の土地の商人が手に手に大きな風呂敷包を抱へッ、船客の間に奔走して大島紬の押し賣りを試みて居る。余も忽ちにして彼等の包圍に達つたが好奇心に驅られて冷かして見るとサー大變、是が非でも一反買へとて挺でも動かぬ强請振りに、ほと〳〵持て餘して居ると、琉球紳士や船員が應援に來て吳れ、「モー船が出る、早く歸れ」と叱り飛して追ひ歸して吳れ

たので、漸く虎口を逃れたのであつた。聞けば彼等の持て來る品は何れも怪しい劣等品で、値段は廉そうに見へて實は高いのであると云ふ。果せる哉船客中に一人として買つた者は無かつた。

時正に午後一時半船は一聲の汽笛を擧げて其軸を廻らし、徐々として名瀨港を去て沖繩に向つた。

四　那　覇

奄美大島の連山を送り終つて德の島の峻峯を迎へ、德の島往いて沖の永良部島來る筈であるが、海氣漂渺として明かに見へなかつた。日は漸く暮れ、彩雲大空に驅ける偉觀は昨夜にも增して物凄い程美しい、余は恍惚として無我の境に入れば、余の魂は飄々として去て蒼冥の裡に在り。

昨日から乘客が頻りに豚の話をして居た。大信丸の下甲板にはギツシリと箱入の豚が滿載されて奇聲を擧げて居る。聞けば今琉球では豚の缺乏を告げて居るので每船斯の如く內地から豚を輸入するのであると云ふ。味は琉球豚の方が遙かに美味であるが、その原因は人糞を以て飼ふにあると誰やらが說明した。すると一人が之を否認した上、そんな汚ないものは喰ふ氣になれぬと言ふ。余は茲に於て「人糞必しも汚なからず、只だ臭ひがよくないが豚にとつては芳香であらう。支那では人糞は犬が喰ひ、犬糞は豚が喰ふ。豚が一躍して人糞を喰ふのは破格の御馳走である。尤も豚糞は殆んど土の如くで無臭であるが、何物も之を喰はない」と糞談を飛ばして一同の鼻をしかめしめた。

夏の夜は早くも明けて旭日が沖繩本島の後から出る頃、船は伊江島の外を通過して居る、沖繩本島は延長三十里からあるので、一眸の裡には見へないが大體の地勢はよく分る。その北半部は山岳が連なり、南部は低い丘陵が起伏して居る。北部の最高峰が勝雄岳と云ふので千五百尺斗り、之に次ぐのがその南に聳ゆる恩納岳で、千二三百尺位である。その他は千尺に充たざる程度であるから、奄美大島の山岳に比すれば問題ではない。

南方一帶は絕體に山がない、二三百尺乃至三四百尺位の丘陵が斷續し、船が陸地に近づくに從て人家、樹林、田畝が手に取る樣に見へる。

この第一の印象は余に取て甚だ良好であつた。始め東京で聞かせられた琉球は索莫無味の孤島であつたが、今海上から見た琉球は風光明媚である、見渡す限り滴る樣な翠である。何等か前人未發の寶がその內に埋められて居る樣な氣持になつて來る。船客は甲板に出て沖繩の地點を指摘して居る。「あれが辨ケ岳」だ、「首里の王城が見へる筈だが」、「那覇の市街はそこだ」、「あの絕壁の上のお宮が波上宮だ」などゝさゝめいて居る。やがて船は徐行して那覇港口に進んだ、海岸は一面の珊瑚礁であるが

その間に水路が通ぜられ、右に「やら座」左に「三重城」の古址を見て、午前八時と云ふに那覇の棧橋へ着いたのである、奄美大島の名瀬から海程百七十九哩である。

埠頭には沖縄縣廳首里市役所の官公吏員諸氏、尙侯爵家新聞社の人々鎌倉君等十數名が迎へられた。余は篤く感謝の辭を述べ、導かれて五六丁距たりたる楢原旅館と云ふに投宿した。

五　國　土

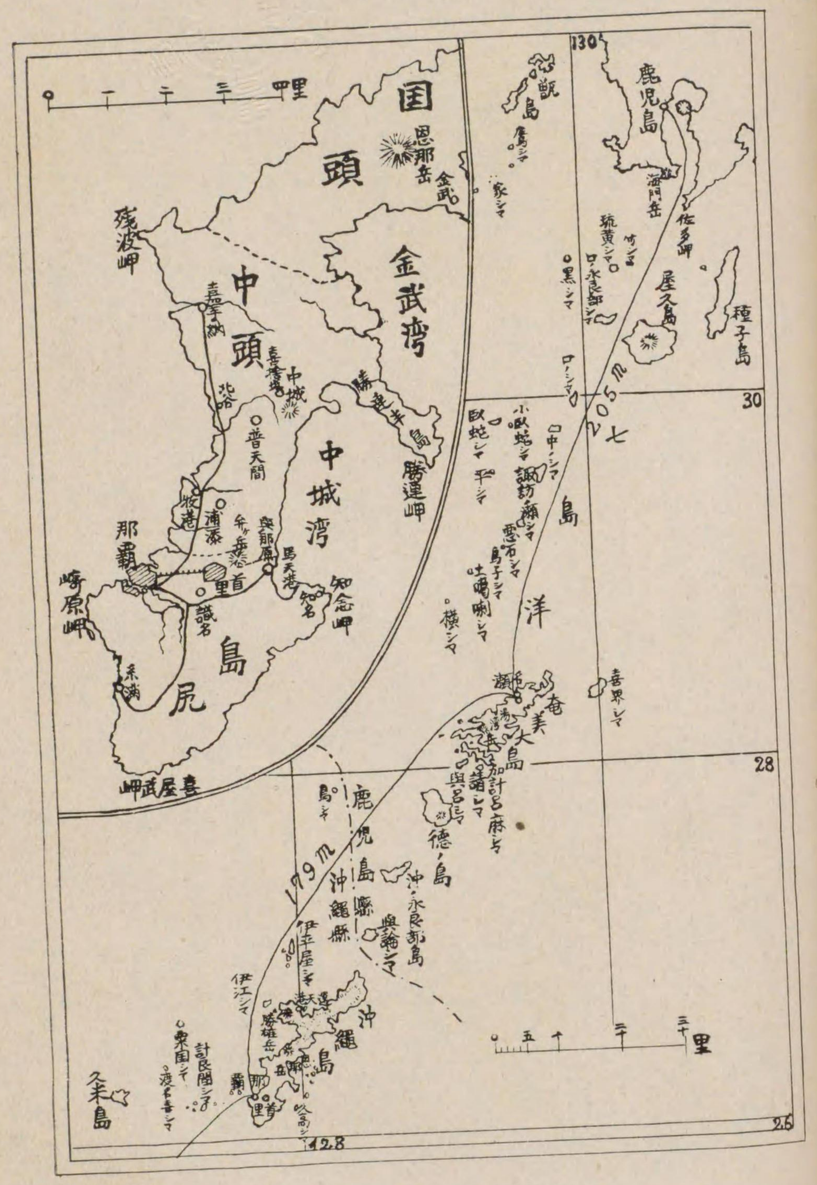
抑々琉球は、なごと改めて說く必要はないかも知れぬが、一と通り土地の有樣を觀察して見る。

い　廣袤と人口

元來琉球群島は奄美大島、沖縄本島、先島の三群に分れ、先島は又宮古群島と八重山群島の二つに分れて居るが、この內奄美大島の一群は鹿兒島縣に屬し、その他が沖縄縣に屬して居る、たゞ德の島の西方約五十哩にある鳥島と云ふ小島が、何故が沖縄縣所屬になつて居る。

琉球諸島の數は嘗て三十六と謂はれたものだが、何時の間にか五十餘島と云はれ、或は七十二島とも稱せられる、これは恐らくは支那の傳說であらう。支那では例えば浙江の天臺四明兩峯の支脈が三十六峰となり、更に分れて七十二峰となると云ふが如く、三十六、七十二は常套の數字である、五十

琉球地圖



餘島は之を平均した數である。斯く見て來ると琉球の島の數は實際何幾あるか分らない、官憲に訊して見てもよく分らぬと云ふ、夫は潮の滿干によつて出沒するやつが澤山あツて、之を島と認めるか暗礁と認めるかに由て、大に島數に增減を來すと云ふのである。

島々の輪廓がまた薩張り分らない、沖繩縣廳で作つた圖が二三種類あるが、何れも互ひに隨分違ツて居る。只だ商船會社の船に備へ付けられた海圖に現はれて居るものが、先づ殆んど正しいと思はれる。何分陸地測量部の手が未だ屆いて居らぬので、土地の面積も不確實であるが、或は百三十六方里と云ひ、或は百四十四方里と云ふ、その內譯も不確實であるが、附屬小島を合計して沖繩本島が約八十七方里、宮古島が十二方里、石垣島が十七方里、西表島が二十四方里と算し、合計百四十方里とすれば先づ內地の東京府の面積より少し大きいくらゐである。

人口は約六十萬であるから、一方里に約四千三百人と云ふ驚くべき密度で、內地の兵庫縣の密度と同等である、しかも西表島の如きは淡路島の三分の二の大さであるに關らず、マラリヤが激烈である爲に、住民は僅かに千七百人に過ぎぬと云ふ、夫れ丈け他の島々に戶口が密集されて居る譯である。

沖縄本島は國頭、中頭、島尻の三郡に分れて居るが、國頭は北部で丁度全島の三分の二を占め、地質は古代水成岩であり、中頭、島尻は南に連續して地質は近代の水成岩であり、海岸は珊瑚礁である。北を頭と云ひ南を尻と云ふのは、琉球の文化が北から南漸したことを示すもので、結局琉球文化の根元は日本本土である。

北部には山が多いから樹木も多いが、中頭以南は寧ろ乏しい、建築材は松が可なりあるがその他の針葉樹は殆んど見ない。跋扈して居るものは榕樹である。盤踞して居るものは蘇鐵である樟と椿が少し許りある。

石材は到る處に石灰石を產する、これが唯一の建築材でもあり、道路の舗設にも用ゐられる「琉球は石原小石原」とはこれである。北方からは砂岩も出る、その他若干の異種も產する樣だが詳細は知らない。

島は約三十里の長さであるが、幅が四里乃至一里餘と云ふのであるから河らしい河は無いが、清泉の湧出る所は少なくない。水が惡くて困ると云ふのは那覇の如き珊瑚礁上の陸新地のことである。併し土壤の關係から、水田は貧弱であり、農產物としては甘蔗と甘藷が主なものである。米は琉球人の需要の三分の一丈けの生產で、他の三分の二は外から輸入するので、甘蔗から黑砂糖を製して之を輸出して相償却して居るのである。鑛產物も特筆する丈けのものは無い。水產物も僅かに鰹節丈けが問題になるのみである。要するに日本各府縣の生產物價格の最低は即ち沖縄縣の六千八百餘萬圓で、之に次ぐのが鳥取縣の七千六百餘萬圓である（大正九年調）。之を見ても沖縄縣が假令土地が狹いとは云へ、生產力に薄いことを知り得るのである。

動物は土地柄で巨大な野獸は居らない。在來の猪、と內地から輸入した鹿とが筆頭であると云ふ。但し爬蟲類兩棲類以下の諸動物には隨分面白いものがある。ハブは今は人里遠き野中にのみ棲んで、市街附近には殆んど見當らないが、縣廳で農民から一疋四圓で買ひ上げて絕へず飼つて置く、これは珍客ある毎にマングースと鬪はせて見せて興を添へる爲たと云ふ。マングースはよくハブを退治するが、その代り農作物も荒すので結局利害相消殺するとは天の配劑は妙なものである。海蛇の一種なるエラブ鰻は非常な珍味として賞美されて居るが、一般に魚類は甚だ粗味である。巨大なる蠑螈、熱帶的情調を發揮する蜥蜴、屋內に橫行して怪鳴を擧げて旅客を脅かす守宮、化けそうな大蜘蛛、千種萬樣なる貝類や珊瑚類、その他隨分興味ある動物も居る、余は出來得る丈けこれ等の小動物を採集して

持て歸ッたのである。

は氣候

氣候は世間で想像する程熱くもなければ悪くもない。那覇に於ける一年の平均溫度が二十二度で、之を東京の十三度八分に比べると非常な相違であるが、これは沖繩に殆んど冬と云ふべきものが無い爲である。沖繩の絶對最高氣溫は三十五度をレコードとするから東京よりも低いのである。しかも琉球には殆んど常に海風が吹いて居るから、決して炎暑を感じない。余は盛夏の最中に往て見たのだが實に涼しかつた。丸で避暑にでも來た樣な心地であつた。

海風が常に吹くのと、雨が多い爲に濕氣は可なり强く、一年の平均濕度が八十二%を示して居る。若し夫れ暴風雨に至つては實に猛烈である。何分石垣島と云ふ颱風の策源地が近いので、七八月以降は頻繁に襲來する。平均最大風速が四十七米となつて居るが、絶對最大風速は七十五米に達したレコードがある。若もコンな猛風が東京を襲つたならば、市の家屋の大半は翻飜として虛空に吹き飛ばされねばならぬ。併し沖繩の民家は皆非常に低く頑丈に作られて居るから、案外に被害が甚しくないのである。尤も四月から六月の始頃は天候常に好良で暴風の起つた例はないと云はれて居る。余

が那覇滯在中に經驗した一大風雨は、八月九日から十六日まで八日間百四十九時間ノベッ幕無しに吹き荒んだもので、その最大風速は三十八米、雨量は合計一坪十石と云ふことであつた。余の旅舍は時々ミシ〳〵と震動し、雨が壁ににじみ出した位で何等の損傷もなかつた。琉球では三十八米位の風は一向平氣であるが、百五十時間ブッ通しと云ふのは近頃珍らしいとて話頭に上つた。

こんな風であるから沖繩の海上の連絡は實に不規則である。鹿兒島沖繩間の定期船も實は不定期であつて、烈風が起るか、又は烈風に遭ふ虞があれば何時でも航海を中止するのである。沖繩から先島への航海は一層不安であり、運が悪ければ半月も船が出ない爲に空しく待たねばならぬ。結局琉球旅行には豫め日程を作り旅資の豫算を作ることが出來ないことになるのである。これ併しながら一は船が小さくて老朽であるが爲で、若し六千噸級位の船ならば大低な風波は押し切つて行けるが、今日の樣な千噸や二千噸級のボロ船では致し方がない、又今日の場合では、假令六千噸級の船が廻航するとしても、鹿兒島港にも那覇港にも寄り附くことさへ出來ないから矢張り駄目である。結局鹿兒島と那覇の大々的築港が先決問題となるが、これが果して何時成就すべきかは全然測り知られぬ問題である。

六　國　民

一體我々は琉球人と云へば日本人以外の異人種であるかの如くに思ひ、甚しきは臺灣の生蕃の親類でゞもあるかの如くに思つて居る樣であるが、途方もない間違ひである。琉球人は矢張り我々と同族同種の日本人である、大和民族である、その間に何の區別もない。

余は人種學者でないから學術的說明は差控へるが、余の直感する所では琉球人は內地人と同樣、甚だ複雜なる混血兒である。そしてその主成分は要するにアイヌ、ツングース及南洋の三系であると思ふ。

余は琉球人中に非常に毛深い人の多いのを見た、夫は人と云ふよりは寧ろ熊と云つた方が近い位に毛深い人もある。眉太く髯濃く、眼沈み鼻筋の通つた人も少なくない。これ等の相貌は南洋にも見なければ支那朝鮮にも見ない、結局アイヌに酷似して居ることになる。

亞細亞大陸から朝鮮を經由して日本に移住したツングース族の一派は、九州から更に南下して琉球へ移住したと考へられて居るが、これも確實であらうと思はれるのは、琉球の言語に之を證明すべき好例があることである。夫は琉球の王城の首里で、首里即ち Siuli は朝鮮語の京城即ち Seul と同

語である。天孫は日本の日向の高千穗のクシフル峯に降臨したとあるが、これも Kusi—Siul で同語であらう、クシは今日でも沖繩で美しいと云ふ意味の日用語である。

なほ琉球で城をクスクと云ふが、八重山では單にスクと云ふ所もある。クスクは日本語の磯城、村なぞと同根であると云ふ說を聞いたが、余は今の西伯利亞の都邑の名に、例之ばトムスク、オムスク、ニコライエフスクなぞと盛んにスク（即ち都邑）が附くのは、曾て琉球民族の同族が殘した言語ではないかと思ふ。余は試にこの說を提けて某專門家に質した處が、夫は面白い樣だが容易には肯定されないと愼重の態度に出た。

南洋系が黑潮と共に琉球に流れ込んだことも、否認すべき餘地はあるまい。

この外漢民族の血も混じたことは、隋以來支那との交涉があり、明以來は、琉球國は漢土の附庸國として取扱はれ、漢人の往來頻繁であつたが、那覇の一角の久米村はその殖民地であつた事に徵しても推知せられる。

歐人の血は甚だ微弱であると思ふ、只だ島尻郡の糸滿は蘭人イートマンが開いた町で、彼の名から町々が起つたと云ひ、同地方に曾て若干の外人が住つて居た爲に、その血が今も殘つて居ると言はれ

て居る。

琉球人の風俗習慣から見て民族研究上面白いと思ふ節も若干はあるが、余の最も感興を覺へた一例は古代琉球に食人の習があつたことである。琉球神話に鬼餅の話がある、これは後節に紹介するが、人を食ふ男がその妹に擊退される筋で、即ち食人種の居た證據にもなる。又智證大師が渡唐の記に琉球は人を啖ふの地なりとあるのも面白い。食人の習は近くは臺灣の生蕃、南洋のパプア等にもあるが、支那にもあつたと見て差支はない。琉球の食人性は何處から來たかは分らぬが、南方から傳來したものと見てよいと思ふ。

琉球の婦人が手の甲に文身するの習は何處から來たものか、余は寡聞にして之を知らない。琉球の古老に聞いた所では、明初以來冊封使が數百名の同勢で琉球に練り込み、一ケ年も滯在して居る間にあらゆる横暴をふるまつたが、琉球婦人は否應なしに徵發されて彼等の玩弄に供せられた。そこで女子は手に文身して彼等の厭惡を策したのが、最近まで常習として繼續したのだと云ふが、勿論文身は太古の遺習であつて、古老の說は信ずるに足らぬのである。

七　歷　史

琉球の歷史の大要を極めて簡單に述べて見よう。先づ琉球の天地開闢の祖神はアマミキヨ及ミネリキヨの二柱である。これは日本の伊冊諾、伊冊冉の二神に相當するもので、その神話も彼是同工異曲である。この祖神は人種の名であるとも云ひ、個神の名であるとも云ひ、天孫の國訓だと云ひ、海部の轉訛だと云ひ、諸說紛々として居る奄美大島の湯灣岳がその臨降の地であると傳へられる。

その子孫琉球に君臨して天孫氏と稱し、首里を國城として、相傳ふること二十五世一萬七千八百二年とある。チト勘定が合はぬが、それが即ち神代である。最後の王は逆臣利勇の爲に國を簒奪され天孫氏は茲に亡びたのである。

時に浦添の按司尊敦義兵を起して利勇を誅し、衆望を負ふて王位に即いた、即ち舜天王である、舜天が源爲朝の子であると云ふことは、正史の爲朝の傳と相納れない爲に、歷史家は之を信じないがこれは信ずべき理由があると思ふ。琉球の傳說によれば、爲朝は伊豆から(或は靑ケ島からとも云ふ)颶風の爲に吹き流されて沖繩島の運天港に漂着したが、其風采の偉魁なると武勇の絕倫なるとに由て忽ち土人の崇拜する所となり、大里の按司の妹を娶りて一子尊敦を擧げた。しかし爲朝は大望ある身として永く孤島に止まり難く、妻子を伴ふて日本に歸るとて、牧港から船出したが逆風に遭つて再び

牧港に吹き戻された。爲朝は更にまた出發を試みたが、又もや逆風の爲に牧港に押し戻された。島民は爲朝に對ひ「凡そ異鄕の人が島の婦人を海外に伴はうとすれば、必ず島の神々の怒りに觸れるのである、願はくば夫人を島に殘し給はれ」と哀願したので、爲朝も是非なく妻子と袂別し、「この子は他日大業を成すべきにより、必ず大切に育て玉へ」と夫人に懇諭して單獨牧港を出發したが、その終る處を知らずと云ふのである。一說に爲朝は奄美大島に立ち寄つた處が島人の爲に毒殺されたと云ひ、或は病を得て大島で死んだとも云ふ。今大島に爲朝の墓があると云ふがその詳細は知らない。更に他の一說は、爲朝は沖繩を去つて再び伊豆の大島に歸り、平家の討手を引き受けて戰死したのだと云ふ。

琉球の古詩「おもろ」に、昔異邦の一英雄がこの島に漂着し來つたことを叙して居るが、夫は即ち爲朝を詠じたものであると信ぜられて居る。現に琉球の貴族及士族階級に朝の字のつく名の人が夥しくあるが、これは何れも爲朝の子孫であると信じて居るのである。又地理學上から考へて、伊豆七島から沖繩に向つて急潮が流れて居り、同じ方向に季節的に疾風がある。若もこの潮と風に乘ずれば、伊豆七島から沖繩まで一晝夜にして達するが、潮の關係で必ず運天港附近に漂着すると云ふ學說もある。之に反して爲朝漂着說を否認すべき理由は、只だ正史と相納れないと云ふ丈けで、寧ろ薄弱であると思はれる。正史と符合しない事は信じないと云ふのは隨分偏狹な筆法ではあるまいか。歷史はそんな窺屈なものではない筈である。

さて舜天王朝は三代七十三年にして亡び、英祖朝が之に代つた。この時琉球には山北、中山、山南の三國が鼎立して居た。山北は今歸仁に據り、中山は首里に都し、山南は大里に居城を構へた。

英祖朝は五代九十年にして終り、之に次いだのが察度朝である、察度は始めて明に朝貢したが、これは琉球が貧弱で自給自足に困難であるから、明と貿易を開始して利益を擧げ、强大なる明の後援に由て自家の保全を得ようとしたのであると解せられて居る。察度の次ぎの武寧から明の冊封を受ける樣になり、明に正朔を奉じたのである。即ち琉球歷代の王は必ず冊封使を迎へて即位式を擧行したので、明帝から冠服幣帛印綬を賜はつた。琉球からは答禮として謝恩使を派し、支那帝室に吉凶ある每に祝賀弔問の使節を遣はしたので、之が爲に莫大の經費を要すると同時に、又相當の報償も得た樣である。

察度朝は二代五十六年にして亡び、尙思紹朝がその後を襲いだ。二代尙巴思王は不世出の英雄で、先づ山北を征服し（應永二十三年）次で山南を亡ぼし（正長元年）茲に三山統一の大事業を遂け、明

から尙姓を賜はり、琉球國の基礎は茲に確立したのである。五代尙金福王は足利義政に通じたが、爾來日本との交渉も甚た親密になつた。

尙思紹朝は七代六十四年にして亡び、之に代つたのが尙圓朝で即ち現在の侯爵家の系統である。三代尙眞王は非常な名君であつて、この時が琉球の全盛時代である。今日現存する琉球の重要なる遺跡は、殆んど總てこの時代の創建に係るのである。琉球の領土は奄美大島から八重山までの群島全部を網羅し、文運隆々として進んだが、七代尙寧王に至つて一頓挫を來たした。夫は琉球は元來支那を重んじて日本を輕んじて來たのであるが、足利氏の末期日本が戰亂の爲に秩序を失つたので、一層日本に對する好意を缺く傾向になつた、その後豊臣秀吉が四海を平定して薩摩の島津に琉球の統治を委せたが、琉球は之に對して甚だ不平であつた。朝鮮征伐の際にも、尙寧王は逸早く秀吉の計畫を明に內報した。秀吉から征韓の軍に參加して出兵せよとの命を受けたが尙寧王は之を拒絕した。秀吉薨去と聞て尙寧王は朝鮮に祝賀の書を送つたが、文中に秀吉の暴虐天地も之を容さずなぞと云ふ不穩な句もあつた。こんな事情が重なつて、終て慶長十四年に至り、島津は德川家康に請ふて琉球を征伐した。島津軍は殆んど無抵抗なる琉球に伐入て首里を占領し、尙寧王を捕へて引き上げたが、王は家康に謁見した上大に優待されて再び歸還を許されたが、爾來琉球は薩藩の附庸となつた。この間に琉球は島津の爲に思ふ儘に蹂躙され、外國貿易も禁制されたので、琉球の國威は地に墜ち、國運これより衰へたのである。尤も島津の琉球征伐の眞の動機は、琉球の海外貿易の利を自家に奪取するにあつたと解せられて居る。

一時困憊せる琉球は十三代尙敬王に由て中興され、國運再び隆興したが、その後また沈淪して振はず、明治維新に伴ふ廢藩置縣の際には、琉球は薩藩から引離され、明治五年琉球藩として特別の待遇を受けたが、明治十二年に至つて琉球藩は廢されて沖繩縣か置かれたのである。即ち尙圓王朝は十九代四百十年にして終りを告げたので、文治三年舜天即位より明治十二年まで六百九十三年を經過したのである。

最初の鍋島沖繩縣知事から數代の知事の治蹟に就ては別に特筆すべきものを知らないが、その後奈良原知事は在職十七年間の長きに亘り、琉球の土地整理や那覇築港を始め著しき成績を擧げて居る。しかも縣民に對しては寧ろ威壓的政治を行つた樣で、未だ縣民をして悅服せしむるに至らなかつたと思ふ。爾來政府は縣治に就て充分考慮して居ると思ふが、何分長い特殊の歷史を有する地方であるか

ら、内地同様の筆法では圓滑に行かぬ節もある。要するに一般國民が餘りに琉球に就て無知識でもあり無關心でもあるのは、相互の爲に得策でない。

八　文化の素因

琉球には一種特殊の文化が釀成たれたことは、上記の歴史に由て略々推知されるが、今少しくその顚末を附記して見よう。

元來琉球人は吾人と同族同種であるから、其先天的才能に於ても、趣味に於ても、何事に於ても吾人と共通の點がなくてはならぬ。これが琉球文化の基礎を作し、之に外國の影響と、土地固有の風物の感化とが加つて、特殊のものに發達したことは自明の道理である。

琉球と内地との交渉は、文獻によれば推古天皇の時から始まる、この時掖玖、多禰、奄美、度久の人入朝したとある、元明天皇の代に信覺、球美等の人が入朝した、信覺は石垣島、球美は久米島である。孝謙天皇天平勝寶五年の遣唐使の船が阿兒奈波（即ち沖繩）に漂着したが、その第一船に乘た阿部仲麿は再び安南に吹き流されて終に日本に歸らず、第二船の鑑眞大和尙は首尾よく薩摩にたゞり着き、第三船の吉備眞備は黑潮に押し流されて紀伊に漂着したと云ふ。こんな工合で、日本と琉球との交渉は太古から可なり密接であり、從て日本の文化も漸次に琉球に移植された樣であるが、舜天王の頃から日本の平假名が傳來したと云はれて居る。平家が壇の浦で全滅した際平家の遺族が南方海洋に走つたが、沖繩本島には源氏の嫡流が君臨して居るので近寄れず、更に南走して宮古八重山に漂着し、終にこゝに平穩なる新國土を拓いたと傳へられて居る、今日でも島民は平家の子孫であると自稱して居ると云ふことや、この地方に日本の平安朝頃の古語が今も殘つて常用されて居ると云ふことなどは、甚だ興味深いことではないか。

支那の文獻では隋から琉球が現はれて來る。大業元年琉球を征し甲布を取りて歸るとある。爾來琉球の名は屢々見へるが、その範圍は確定的でない。史家の考證によれば隋の琉球は即ち臺灣であり、フイリピン群島までも包括された時代があると云ふ。明の洪武に察度王が入貢し、次で明から冊封使が派遣される樣になつたので相互の交通は極めて親密となり、支那の文物は滔々として琉球に輸入された。

「琉客談記」によれば、琉球の進貢使は北京の紫禁城の正殿なる大和殿で各附庸國の使臣と共に皇帝に謁するのであるが、其順序は朝鮮を第一とし、琉球、安南、緬甸の順であると云ふ、琉球が蕞爾た

る一小島であるのに、安南、緬甸の上位に置かれたのは特別待遇であろうが、如何に琉球が之が爲に得意であつたろうか、又あの雄壯豪華な太和殿と矯小清雅なる日本の皇居や足利將軍の書院とを見競べた琉球人の心理は如何であつたろうか、心中支那の富强なるに畏服すると同時に、日本の貧弱なるを輕侮するの念が起るのも無理からぬ事である。從つて支那の宗教文學や美術工藝が、知識階級に尊重されたことは自明である。漢字は明と交渉以來輸入され、平假名と並用される樣になつたのである。

印度支那及南洋との交渉も重大である。尙思紹思王以來暹羅、馬剌加、爪哇、安南、呂宋等と貿易が行はれたが、その動機の一は、琉球が支郡に朝貢する每に莫大な獻進を要するのであるが、素より貧弱な國であるから國產丈けでは間に合はない、そこで遠く天竺や南洋に珍品を求める必要を生じたのであると解せられて居る。その結果として琉球藝術に若干の印度支那趣味や南洋趣味が漂つて居るのである。

朝鮮との交通も亦た顯著である。察度王は明に通ずると同時に又朝鮮にも通じた。李成桂が高麗を亡ぼして朝鮮國を建てた時には、琉球から祝意を表すると同時に親交を求めた。薩摩の島津は朝鮮から陶工を招聘したが、その一部の者が更に琉球に聘せられて終に特殊の作品を創めた、即ち琉球の陶工は主として薩摩系に屬するが、その他の工藝品に於ても朝鮮趣味の發揮されて居るものが少なくない。

歐米との交渉は餘り重要でない。只だ茲に特筆して置き度いのは、嘉永六年五月二十六日北米合衆國の水師提督ペリーが那覇に着し、六月六日首里を訪ふたことである。琉球人は大に狼狽したが之を如何ともすることが出來なかつた。元來ペリーは日本占領の目的で來たので、琉球を根據地とし、六月九日に小笠原島へ向けて出動したが同廿三日那覇に歸り、越えて七月二日浦賀に向つて出動を試みたが、同二十五日又那覇に引き返へし、琉球に對して脅迫的に條約を締結せしめた。併し米國の政策一變の爲にペリーはその計畫を放棄して歸國したのである。次で安政二年に佛と、安政五年に葡と條約を結んだが、別に之が爲に大なる影響はなかつた。耶蘇教の布教も行はれたが餘り振はなかつた樣である。

要するに琉球の文化の素因は、始め日本が基礎をなし、支那が之に偉大なる感化を與へ、朝鮮、印度支那、南洋等が若干の影響を與へて居るのである。

九　言語と文字

琉球の言語及發音は實に面白いものである。夫は到底こゝに詳細を悉し兼るが、試にその一節を紹介して見よう。

先づ言語は、云ふ迄もなく吾人の言語と同じであるが、只だ地方的の訛りが甚だ著しいのと、古語が殘つて居るのと、發音が違ふので、始めて琉球語を聞いた時は全然分らぬのである。古語は或は足利時代、又は鎌倉時代、更に溯つて藤原時代、或は又恐らくはそれ以前の古語も殘つて居るかと思はれる。試にその二三を擧げて見よう。

東風を　クチ（コチをクチと訛る）
去年を　クズ（コゾをクズと訛る）
女を　イナグ（オナゴをイナグと訛る）
小兒を　ワラビ（ワラベをワラビと訛る）
地震を　ナイ
妻を　トジ
後妻を　ウハナリ
有り難ふを　ニヘデベル（「二拜で侍る」の訛り）
お入りなさいを　イミソーレ（御入り候らへの訛り）

こんな例はまだ澤山ある。

發音に就て最も耳立つて聞こへることは、總てOがUに變化して居ることゝ、EがIに轉化して居ることである。前例の「去年」は Kozo と云ふべきを Kuzu と云ひ、小兒は Warabe と云ふべきを Warabi と云ふの類である。次にIがUに變ずる場合が多い、これは島根縣、新潟縣及東北地方と全く同樣である。Ki を Kwi と發音することもある、これは秋田縣青森縣でもよく聞く處である。

更に面白いのはLとYの轉換で、夫が更に又Zに轉ずるのであるが、これも東北地方には常習である。例へば「踊」の Odoli は Uduzu と聞こへる。又「琉球」は推古天皇の朝に入貢した「掖玖」で、掖玖の Yukyu と琉球の Lyukyu とは同音であるとの說もある。この外KがH又は Ch に、SがTに、GがJに變化する例もある。

終りに最も興味深い問題はH・F・Pの發音の關係である。言語學者の定說として、今日のH音は第十六世紀頃まではF音であり、夫れ以前はP音であつたと云ふのであるが、夫が今日琉球に於て觀面

に立證されて居る。例へば「那覇」は吾々は Naha と發音して居るが、土地の人は今なほ Naffa と呼んで居る。古代琉球では恐らく Napa と呼んで居たであらう。現に沖縄の田舍では今でも「船」を Puni と呼び、宮古では「足」を Pagi (脚)「灰吹」を Paifuki と云ふの類が澤山ある。要するに日本の古音が琉球に保存されて居るのである。

琉球出身の伊波文學士はイハ氏ではなくしてイファ氏である。氏は自署に必ず Ifa と羅馬字で綴つて居られる。

沖縄はオキナワでなくして、ウチナワと呼ばれて居る。

西表はイリオモテでなくして土地の人はイルウムチと發音して居る。因に琉球語では西をイリ、東をアガリ、南をフエイ北をニシと云ふのである。東西をアガリ、イリと云ふのは太陽の出沒に由て名けたのである。

琉球の地名人名には不思議な發音が多い、到底吾人には讀めないのがある。例之ば北谷をチアタン今歸仁はナキジン、眞境名はマジキナ、護得久はグィーク、天久はアミク、川平はカビラ、金武はキム、その他無數である。勿論國語に無理に漢字を當て欲めたものである。

文字は日本の平假名が普通で、文體は近頃まで候文を標準として居た。琉球の古碑には往々表面に平假名を以て琉球語が刻されて居り、その裏面に漢字を以て漢譯されたのが刻されて居る例もある。文廟道觀の如き支那系のものには勿論漢式の碑が立てられるが、佛寺宮殿、その他のものにも漢碑が立てられる例は甚だ多い。

十　宗　教

琉球は外國との關係が複雜である丈け、その宗教もまた複雜である。第一琉球固有の宗教があり、その他に日本傳來の神社と佛寺とかあり、更に支那傳來の道教と儒教とがある。次に順次に之を說明して見ようと思ふ。

い　琉球固有の神祠

琉球固有の宗教は、要するに生殖器崇拜、自然物崇拜、祖先崇拜で、世界大多數の國民の原始的宗教と同工異曲であると思はれる。これ等の諸種の崇拜がいつしか互に相結びついて一つの型が出來たものと解せられるが、要するに琉球の神祇に於て最高の神が三柱ある。即ち

一「御すぢの御前」即ち國土の祖神

二「御火鉢の御前」即ち火の神

三「金の美御すぢの御前」即ち金の神

で之が祭祀を司ごる齋官を聞得大君と云ふのである。聞得大君は王家の女で終身處女としてこの神に奉仕するものであり、神殿を聞得大君御殿と云ひ王家に專屬するもので、近頃まで首里の北の汀良町（古名汀恣良次）にこの御殿があつたと云ふが今は無い。鳥居龍藏博士が曾てこれを撮影して所藏されて居ると聞いたがまだ見たことは無い。

首里には近頃まで儀保殿内、眞壁殿内、首里殿内の三殿があつたが、これは首里の地域に從つて三ケ所に配置したので、之を總稱して三殿内と云ひ、之が祭祀を司るものを大阿母志良禮と云ふ。この三祠は貴族に專屬する階級のもので、その三柱の神體は三基の石棒であるが、即ち男根を象つたものと解せられる。今この三殿は首里城下の天界寺と云ふ古寺の跡に合併されて居るが、祭神は「火の御神」Fi-nu-ukan と稱して居る。併し現場には神體として三基の石棒か安置されて居るので、その大さは高さ約七寸五分、底徑約五寸五分、直徑約二寸で、前に線香立てが供へてある。なほこの殿内に幅二尺二寸、高さ一尺二寸の板に左の如く墨書された札がある。

御殿御始御子孫御眞人國中諸離に到る迄陰陽五行萬物御備はり給はり萬事御心を遂けさせられ毛作の世果保諸船の嘉例吉偏へに

天地御神神の御慈悲御元祖御功德の御蔭深く高恩を仰ぎ奉り候次に御殿御始御子孫御眞人國中諸離に到る迄萬事御心遂げさせられ毛作の世果保諸船の嘉例吉謹みて神護を仰ぎ奉り候

即ち五穀の豐穰と海洋の安穩を祈るの意であるが、この文の中に陰陽五行と云ふ文字の見えるのは注意すべきことゝ思ふ。必定これ支那の道教の思想か加味せられて居るのであらう。

次に農村に於ける平民階級に屬する神祠をノロ殿内と云ひ、その祭祠を司るものをノロと云ふ。ノロ殿内は沖繩に於て國頭に四十四、中頭に六十四、島尻に百〇四、その他全縣下に三百餘あり、ノロは一般國民の信仰の中心となつて大なる勢力を有すると云ふことである。

なほ伊平屋島のノロは尙圓王の姉が最初で、特に阿母加那志と尊稱されて居る。加那志は尊號である。この伊平屋の神殿に對する遙拜所が今歸仁に置かれてあるが、此處のノロだまた特に阿應理惠と尊稱されて居るが、俗にオーレーと呼ばれて居る。

この外に琉球にはユタ（巫女）と稱するものがある、これは一種の自己催眠により、所謂神がかり

の態で豫言を行ふもので、多くは因果應報を說き又夢占もする。又ユタの暗示に從て古き祖先の墓を尋ね廻り、之が爲に一生を棒に振るなどの奇風もある。

別に又琉球には所々に御嶽と稱するものがある。これは元來山を崇拜する意味であらうと思ふ。山川草木に靈ありとするの思想は、幾多の神話や傳說にも現はれて居る。

ろ　神　社

神社は尙金福王の時始めて內地から天照皇大神宮を勸請したのが嚆矢であると云はれて居る。近頃その遺跡が那覇市に發見されたと云ふ報告を得たが、まだ實地を知らない。土地では大神宮を Isinu-Umiya（伊勢の御宮）と云ふて居ると云ふ。夫から引つゞいて八ヶ所に官社が建立されたが、その名稱は波上宮、天久宮、八幡宮、沖宮、識名宮、末吉宮、普天間宮、金武宮である。この外にも若干の小社があるそうであるが顯はれて居ない。祭神は八幡宮丈けが應神天皇で、その他は悉く伊冊諾命外二柱であると云ふが、余の實驗する所では御神體は三柱の石で矢張り男根である樣である。

波上宮は八社の中では最高位を占め、今官幣小社であるが、元來陽石が御神體であつたそうで、その石が今も社務所にあるが、高さ二尺許りもある男根の形の自然石である。普天間宮では最も徹底的な實例を見たが夫は後に說明する。

今日琉球に於ては神社崇敬の思想は殆んど皆無であると云つても過言ではない。官幣社の波上宮でさへも土地の人は殆んど顧みない位である。況て他の七社などは、殆んど絕て荒廢の極に達して居るが、何れも廢社同樣になつて、神職もなければ氏子もないのが多い。稀に土地の者が參詣に來るが、夫も琉球流に線香を薰じて特殊の禮拜を行ふので、內地流に拍手で拜するのではない。

は　佛　敎

佛敎は英祖王の時始めて日本內地から輸入したと云はれ、その最初の寺は眞言宗の極樂寺と云ふので、英祖がその浦添の陵墓の附近に創建したと云ふが、今その遺跡は不確である。その後追々に寺院が出來たが、何故か眞言宗と禪宗のみが許されて、その他の宗旨を禁ぜられて居た。最近に本願寺などが布敎を試みて居る樣であるが、一向に振はない樣子である。

琉球に於ける佛敎は其勢力甚だ微弱であり、一般土人の思想界に何等の感化も與へて居らぬ樣である。首里には元來圓覺、天王、天界の三大寺があつたが、今圓覺寺は尙家の菩提寺として獨り儼存して居る丈けで、他の二寺は亡びた、那覇の崇元寺も尙家の位牌所として立派に保存されて居るが、民

衆とは没交渉である。元來琉球の寺は内地の寺とは大にその職務を異にして居る。琉球では人が死んだ時に寺僧を請じ讀經をして貰ふが、その墓は全然寺と關係はない。舊來の僧は民衆の教化に從事するでもなく、佛教を研究するでもなく、社會に活動するでもなく甚だ手持無沙汰であるかの如く見へる。これでは迚も致し方がない。

に道教

道教が何時琉球に渡來したかはよく分らない。明に朝貢してより以來と考へるのが普通であらうがその根底は恐らくは夫よりも遙かに以前にあるのでは無いかと思はれる。何分琉球には種々なる方面に道教の思想の影響が窺はれる。先づ第一に目に付くことは那覇首里の市街の路の突き當る所に石敢當があることである。石敢當の由來に就ては確說は無いが、一般に宋初五代の時、劉智遠の幕下に石敢當と云ふ者があり、能く凶を轉じて吉となし、侮を禦ぎ危を防ぐの術を得たと云ふが、何れにしても道教の畑の傳說である。次に余は首里その他の民家の門に護符を貼附したのを見た。その一例は門の左の柱に左の文字を長さ一尺五分幅一寸六分許りの羽子板の形の板に墨書して針付けにしてある。

魁魁魑魅魍魎魑魅尊帝

又他の例は同じ位の板に左の句が書かれてある。

門釘桃符噫急如律令

これも言ふ迄もなく道教の思想である。

焚字爐も二三實驗した。首里の圓覺寺の境内や浦添の英祖陵の境内のものが夫である。勿論焚字爐は道教の專有物ではないが。

琉球では道教の風水の思想が可なり顯著である樣に思はれる。例之ば井戸を掘るにその位置を選び井戸を尊重してその前に線香を捧げることや、墓を作るのに其位置方位を八釜敷く考慮することなどは、或は琉球固有の風習かも知れぬが、道教を結びつける事も理由があると思ふ。前に述べた神殿の中の祝札に陰陽五行云々と書いてあることなどは、覿面に道教思想と見ることが出來るではないか。

但し琉球に古へ巨大なる道觀のあつたことは聞かない。只現今那覇に天尊廟があるが、これが余の見た唯一の道教の廟祠である。祠内には天尊の外に天妃と關帝が合祀してある。天妃は此頃まで那覇にあつた天妃廟の本尊を移したのである。關帝も或は曾て或る關帝廟に在つた本尊を移したのであるかも知れない。

ほ 儒教

儒教に關しては萬曆年間に始めて文廟が創建されたと云はれて居る。しかし儒教思想は矢張り更にその以前から琉球に浸潤して居たものと思はれる。第一琉球人の間に厚葬の風があり、身分不相應な立派な墓を造つて身代を傾けたり死者の前に慟哭の禮を行つたり、各家庭に必ず家に不釣合な立派な位牌壇を作つて祭祀を怠らぬことなどは、餘りに儒教の教義によく合つて居る。

文廟は那覇と首里にある、その他にもあるや否やは知らない。これは殆んど全然支那式であるが詳細は後に述べる。文廟と相伴つて學校もあつた。貴族又は有産階級の兒童はこゝに通學し、小學を振り出しに四書五經を習つたものであると云ふ。何分支那との交渉が親密であり、冊封使の一行には相當な學者も多かつたので、琉球の上流階級は悉く漢學を學んだので、書を能くし、詩文に長じ、支那の古典に通ずる者さへ少なくは無かつたのである。

へ 基督教

基督教は特筆すべき程のものがない。元和八年尙豐王の時南蠻船八重山に來つて布教したのがその嚆矢であると云ふ。然るに寛永十三年島津氏が外教を嚴禁したので、その後中絕の姿であつたが、弘

化年間英佛船渡米の結果再燃し、殊に英人ベッテルハイムは極力布教に盡瘁したが、成功を見ずして退去した。その後今日に至る迄基督教ははかゞしい成績を擧げて居らないのは、元來琉球人士が外教を喜ばない爲であらう。併し之が爲に幾分歐米に關する智識を得、科學思想も多少啓發されたことは否定することが出來ない。

十一 歷訪

さて余は那覇の楢原旅館に落ち付いて見るとこゝは全然內地流の施設で、待遇も甚だ親切でまことに居心地が善い、宛然家庭的生活に入つた樣な氣分である。やがて縣廳の末原學務課長を始め野田那覇警察署長、本山縣技手今歸仁縣屬首里市長高嶺朝敎氏、波上宮宮司袴田重宣氏沖繩タイムスの末吉安恭氏、鄕土研究家眞境名安興氏、「おもろ」の研究家文學士伊波普猷氏等十數氏が續々と來訪せらたので應接に暇がなかつた。

この日の午後から諸官公衙及尙家歷訪の日程に入つたが、東道として縣廳の末原課長と今歸仁屬が自動車を以て迎ひに來られた、兩氏は余の滯在中殆んど連日嚮導の勞を取られたので、余は茲に特に兩氏に對して感謝の意を表して置き度い。

余は今や初めて沖繩の風物に接するのであるから、好奇心やら研究心やら、歡喜と希望とに滿ち充ちて、血湧き肉躍る……イヤこれはチト大袈裟であるが、一物をも見逃さじと八方に眼を配つて那覇の市街を視察した。先づ第一に感じたことは軒並の町家が皆重厚なる赤瓦で本葺に葺いてある事で、しかも往々その軒先が微に上に向つて反つて居り、屋根の流れが微に凹曲線を描いて居り、男瓦や大棟隅棟は、嚴重に白漆喰で塗てあることは多大の感興を催さしめる。木造の軸部は「建ち」が甚だ低いが柱は割合に太い、これ等は何れも烈風に對する用意であろう。中山傳信錄卷六屋舍の條に、

作屋。皆不甚高。以避海風。去地必三四尺許。以避地濕。民間作屋。每一間瓦脊四出。如亭子樣。瓦如中國甌瓦。極堅厚。非此不能禦風故也。

とあるのは即ち是である。

次に面白く感じたのは石牆である。隨所に家の周圍に石灰岩を以て高さ五六尺乃至八九尺の塀を築き上げたのを見るが、その石は普通一尺乃至二尺位で、やゝ古代と覺しきものに在ては石を故に切り缺き磨り合せて、シックリ嵌め合せ、目地には、漆喰もモルタルも用ゐない。石の中には各種の珊瑚の塊も交つて居る。この石牆も勿論防風の爲であらうが、如何にも雅致に富んで居る。若し夫れ牆の上又は表面に榕樹(ガジマル)が蟠まり、恰も蠟が溶て、流れた樣な紛糾錯雜せる根を牆面に張つて烈風に耐へんとするの風情に至つては實に奇趣言ふべからざるものがある。

那覇の市街は元は西、東、若狹町、泉崎、久米、泊、久茂地、垣花、牧志の九字に分れて居たが、今は二十三ヶ町に分れ、人口約六萬と云ふのであるから、可なりの大都會で、道路は概して廣くして堅牢である。店舗も廣大なものが少なくないが、割合に活氣に乏しい。建物が一律で、人の視覺を脅かすべき壯大なものも奇巧なものも無いが、夫が却つて一種の平和な氣分を現はして居る。街上には單線の電車が首里の間に駛る外、極めて稀に自動車が往來し、腕車は可なり頻繁であるが、馬車荷車は少ない。古風な鞍に古風な鐙をかけた騎馬の人も見える。內地の風俗に裝ふた上流沖繩婦人、純沖繩風俗の市民農民は始めて見る眼には限りなく面白い。

余は先づ那覇市役所を訪ひて來意を告げ、次に縣廳を訪ふて用務の打ち合せを了し、夫から東方一里餘の首里に向つたが、道路は坦々として砥の如く、農村、田野、樹林に送迎されつゝ小坡に登れば、こゝは早首里市である。取りあへず市役所に赴いて高嶺老市長と挨拶を交換したが、市長は白髮童顏福德圓滿の紳士で溢るゝ斗りの好意を表し吳れられた。鎌倉君は市役所內の一室に起臥され、こゝを

琉球首里城守禮門

首里城正殿

研究の根據として日夜非常なる精勵を續けて居らるゝが、その蒐集された參考品は、數百點の古代更紗、彫刻、各種の工藝品等である。余は一と通り鎌倉君から說明を聞いて今更の如く古琉球の藝術の價値の多大なるに驚歎した。

夫れから市役所を去て市の中央なる龍潭の北岸なる尙侯爵邸を訪ふた。例の獨特の石牆を周らした一と構へに一宇の藥醫門が開かれて居る、がその體裁が何となく內地の古代の大名屋敷の樣な氣分である。門を入て正面の玄關に上り、右に折れて廊下傳ひに書院に請ぜられたがその調子は何となく山城の醍醐の三寶院の構へに似て居る。庭は和漢折衷と云つた形で、殊に敷基の石燈籠は何れも多層塔から暗示を得たもので、意匠製作兩ながら優れたものである。こゝで侯爵家の一族なる王城尙方氏及家扶百名朝敏氏と會見し、少時して辭して更に男爵尙順氏を訪ふた。

尙順男の邸は首里市の北部の奧まつた所で、古色蒼然たる石牆の裡に鬱蒼たる樹林に包まれた幽邃な邸宅である。第一門を入つて右に折れ苔蒸した閑寂なる庭傳ひに應接間に請ぜられ、こゝに男爵と會見した。男爵は文學美術に精通して居られ、趣味極めて宏博なので、その珍藏せらるゝ書畫骨董品は充棟汗牛も啻ならずと聞いて居る。即ち再會を約して別れを告げ、日の暮れ果てた頃那覇の逆旅に

歸着した。

十二　首里城

首里市は那覇の東々徽北約一里餘に在り、小高い丘の上に位し、東西二十町南北十六町許りの廣さである。市は山川、眞和志、町端、大中、桃原、儀保、赤平、久場川、汀志良次、當藏、鳥小堀、赤田、崎山、金城、寒川、半良の十六町及末吉、大名、石嶺の三字より成り人口約二萬五千であるが、市街は昔ながらの俤を存し、よく言へば古雅閑寂、惡く言へば沈滯不振で、勿論那覇市とは全然別種の氣分である。

市の中央に龍潭と云ふ池がある。徑一町位に過ぎぬが、如何にも幽邃である。昔は重陽の節に爬龍船を浮べて支那の冊封使を饗應したと云ふが、今は水も淺く且つ濁つて古への風情は無くなつた。

この池の南に圓鑑池と云ふ蓮池がある。池の中に島を作りその上に一宇の辨財天堂がある。觀蓮橋又は天女橋がこゝに架けられ、その橋の彫刻が頗る精巧なものであるが、今は散々に破壞して居る。

池の東に有名なる圓覺寺がある。これは尙眞王が明應元年に京都の芥隱禪師を請じて建立したので沖繩第一の名刹である。詳細は後章に述べることにするが、七堂伽藍の規模堂々として内地の何處へ

出しても耻かしくないものである。

圓覺寺の南に接して首里の城がある。城は首里市の中央よりやゝ南に偏在する最高の丘上に築かれ西に向つて居る。其プランはやゝ複雜であるから茲には充分に說き悉し難いが、要するに二重の主壁を繞らしてその間に若干の支壁を配したものと見て差支ない。大きさは東西約二百二十五間、南北約百五十間、面積約一萬九千坪であるから大規模とは云へないが琉球としては立派なものである。

創立は遼遠にして知り難いが、天孫氏時代から國王の居城であつたと考へられて居る。勿論規模は隨時に擴張されて今日に至つたもので、周壁や殿門の建築の年代も區々になつて居る。其要害は極めて堅固なもので、石壁は高い處は五六十尺位もあり、幾重の關門がなほ嚴然として聳へ、城の內外には老樹巨幹鬱乎として枝を交へ葉を重ね、晝なほ暗い處もあつて、蒼然たる氣分が溢れて居る。

城の大手は那覇の方から東に向つて大道を通じ、城の下に中山門と云ふ第一門があつたが、惜しむべし今は無くなつた。これは尙巴思王の時（我が正長元年）の創立で、殆んど純支那式の三間の牌樓であつた。夫から緩勾配の道を數町昇ると守禮門がある。これは尙淸王の時の建立で中山門より約百年後れるが樣式は同型である。門を過ぎて左に園比屋武御嶽と云ふ土地固有の拜所を見、なほ數十步進めば城の外壁に達する。こゝに歡會門が第一の正門として開かれてある。門の廣さ九尺六寸、深さ十四尺八寸、拱の高さ十三尺一寸、上に三間二面、入母屋造りの樓が立て居る。尙眞王の御代、我が文明九年の建築であり、門前の石獅一對は殊に奇古觀るべきものがある。

歡會門を過ぎて內壁に到ればこゝに瑞泉門がある。これは俗に龍樋と稱する瑞泉が湧出するから名けたので、門の廣さ九尺五寸、深さ十四尺二寸、拱は無い。楣の高さ十一尺二寸、上に三間二面入母屋の樓がある。門前に一對の石獅がある。

門を過ぎて數十步の處に漏刻門がある。元來この門に漏刻が設備されてあつたので、今門の東方五六間の所に長方形の黑石が橫つて居るのがその殘影であると云ふ。門は廣さ十尺二寸深さ十五尺六寸、楣の高さ十尺五寸である。

門を過ぎて更に數十步進めば正殿前の廣庭に出るのである。

城門はこの外なほ澤山あるが一々說明することは差し控へ、只其重なるもの二三を紹介して置く。先づ外壁の北門は久慶門と云ひ、俗にホコリ御門と云ふ。廣さ九尺二寸、深さ十二尺八寸、拱の高さ十三尺で簡單ではあるが石の積み方が面白い。外壁の東南の繼世門は俗に赤田門と云ひ、門側左右に石

碑がある。北碑は漢文、南碑は琉文で築城の由來を刻してある。その文によると、城壁深二尋、厚五尋高八尋、長二百三十尋とある。外壁の西の木曳御門は殿門造營の際に木材を曳き込む爲に設られたのだと云ふ。

内壁及支壁にも幾つかの門かある。元來漏刻門の内に廣福門があり、更に奉神門があつて正殿の前に通じたのであるが、今この二門は無い。なほ内壁の北に叔順門、南に美福門、東端寢廟の入口に銀門があり、この外名の傳はらない古門もある。

さて正殿は即ち國王の政を聽き又は重大なる式典を擧げられる處で、琉球第一の大建築であり、同時にまた第一の重要建築である。其創建は察度王（我が正平五年即位）の時で尙眞王（我が文明九年即位）の時に殿前に龍柱及石欄を造つたと云ふ。現在の建築は享保十四年の重建で弘化三年八月に修造されたまゝ今日に及んで居る。隨分破損して居るが、巍々堂々として聳へた重層の巨殿は洵に壯觀である。その廣さは十一楹九十五尺七寸、深さ七楹五十六尺六寸、高さ壇上より屋背まで五十四尺前に五楹一面の突出部があり、更に三楹一面の向拜が附加せられ、合計百六十五坪八合三夕の建坪となる。外觀は重層であるが内容は三層になつて居り、棟の兩端には琉球式の異樣な吻が蟠まり向拜の上には巨大な唐破風が架けられてあるがその棟にも同型の巨吻が下界を睥睨して居る。破風の内には痛快な龍の彫刻が施されてあるがその手法は我が桃山時代の雄健なる氣魄を備へて居る。龍柱の龍も石欄の彫刻もみな同型の樣式を示して居る。蓋し和漢の要素を攝取して新たに琉球特殊の樣式を大成したものと言ふも過當ではない。

正殿は古へは百浦添御殿と呼ばれた、即ち百の浦々を支配する御殿と云ふ意味でソへは支配の意である。今は一般に略稱してムンダスイーと呼んで居るがモンダソへの轉訛である。

正殿の左右及後に幾宇の殿宇が配置されて居るが詳細は悉し難く、古今多少の變遷もあつたが夫も今は說明を省く。只正殿の南に連なつて國王常住の殿舍があり、北に連なつて冊封使を饗應する殿宇があり、別に東方に離れて王女姉妹常住の世誇殿があつたことを紹介して置く。

この外遊離して若干の建物があるが、就中尙敬王の作られた佐敷御殿は觀るべきものである。この附近に外壁に沿ふて展望臺があるが、その石階石欄の意匠は甚だ巧妙である。これも漢式から出たものであるが慥かに出藍の巧を示して居る。

首里城正殿が甚しく破損して居ることは既に述べた通りであるが、これに就て特記して置き度い

ことがある。夫はその尨大なる建築の修理維持が、貧弱なる首里市に取ては容易ならぬ事なので、當局者も久しく頭を惱まし來つたのであるが、百計盡きたものと見え、終に之を取り毀つ事に決定し、その敷地を新たに造營せらるべき沖繩神社の境域とすることにしたが心ある沖繩縣の官民諸氏は流石にこの由緒深い重大な建物を毀つに忍びず、苦辛慘憺その保存を計つたが、先立つものは金である、しかも巨萬の金である、その金の出所が無いので涙を揮つて正殿を見殺しにするより外は無いと覺悟を極め、袂別の爲に一同正殿の前で撮影し、いよいよ取毀ちに着手したのであつた。折柄在京中の鎌倉君がこの事を逸早く知て余に急報せられ何とかして正殿の生命を取り止める工夫は無いかと訴へられた。

余はかねて寫眞で正殿の建築を見て居り、その琉球建築の代表的大作であることも知つて居たのでその取り毀たるゝことを聞て大に驚いた。余は直ちに内務省に驅けつけ、神社局長に面會して正殿の救助を依頼した、局長も大に同情して余の提議を即坐に容れ、直ちに電報を發して取毀ち中止を縣廳に命じたのであつた。斯くて一旦取り下された正殿の瓦は再び故の如く葺き返されて茲に辛らうじて九死に一生を得たのである。余は次に如何にしてこの頻死の患者を救ふべきかと云ふ具體的方策を考へなければならなかつた。何はさて置いても先づ患者の容態を診察することが急務であつた。余が琉球研究の一面には此の重大なる使命が伴つて居たのである。

夫で沖繩の官民諸氏は余を琉球研究者として迎へられた以外に首里城正殿診療の醫師として迎へられたのである。斯くて余は諸氏より多大の歡迎を受け、有らゆる便宜を與へられたので余も亦之に對して極力誠心を披瀝して努力せねばならぬことを感じたのである。余はこの機會に於て江湖の諸君に對ひ、この數寄なる運命にある首里城正殿保存の爲に甚深なる同情を賜はらんことを熱望するのである。これ決して余一個人の私情ではない、獨り沖繩一地方の私事ではない。實に我國の……否世界の學術の爲の重要問題であると思ふのである。

十三　歡迎會

沖繩の官民諸士は余の爲に一席の歡迎會を開催して吳れられた。實は再三辭退したのであるが終にその好意を受けることになつて、第四日目の晩に那覇市の中央に在る某樓に誘はれた、主催は縣知事と首里市長で、來會者は土地の官民の有力者八十名許りで中々盛會であつた。

饗宴は一切純沖繩流で、高嶺市長の歡迎の辭、余の謝辭を以て開宴せられ、沖繩流の酒肴が配せら

れた。酒は土地固有の泡盛で、極て芳烈であるが、風味は惡くない。聞けば泡盛にも非常な等差があるそうで、數百年間貯藏したものになると、芳醉言ふべからざるものがあり、決して害毒が無いと言はれて居る、料理は幾分支那趣味がある、殊に豚料理は濃厚なること東坡肉に似て甚だ美味である。

席に待する妓等は勿論沖繩の女子であるが面貌は四角に近いのが多く細長いのは少ない、頭髪は濃いが前髪を取らないから額の輪廓を露骨に現はし、之を調節することが出來ない。多くは肩が張つて居り所謂撫肩のものは少ない。服裝は必しも惡くはないが、卷き帶であるから何となく姿が引き立たぬ。併し見慣れたならばこれで調子が取れて居ることを悟るであらう。

樂器は蛇皮線と琴と鼓とが持ち出された。俗曲數番を聽いたが、何れも最近のもので、深い印象は殘らなかつた。舞踊も數番を見たが、これも珍らしいとは思つたが別に感服もしなかつた。總じて琉球の歌舞音曲は、古代のものには頗る優秀にして高雅なものがあるが、近頃のものは卑俗に陷つて大に價値を失つた。余はその後冊封使の待遇を受けて、琉球の古樂を聞き古舞踊を見て始めて驚嘆したが、それは後章に紹介する。

余は充分に歡を盡くして樓を辭し、那覇の夜景を視察すべく市街を縱横にあるき廻つて見た。樓の附近に那覇唯一の活動寫眞館があつて粗末ながら現代式の建物が聳へて居る。這入つて見ようと思つたが、餘り群衆が雜沓するので引きかへして店舗の冷かしに取りかゝつた。店の多くは沖繩土產の賣店で、多くは陶器、漆器、呉服物、下駄、小間物などである。陶器も漆器も多くは凡庸の品で、これぞと思ふ優良品は見當らない。陶器には一寸風變りなものもあるが漆器は惜しいことに圖案が振はない。品質の粗なるはなほ忍ぶことが出來るが圖案の振はないのは忍び難い。何とか今少しく古代琉球の優秀な作品から暗示を求めるとか、又は全く新しい獨創的な琉球氣分の圖案が出來たならば定めて面白からうと感じたのである。

琉球に關する書籍や圖畫は無いかと思ひ、しきりに物色して見たが、古本屋などといふものは更に見當らない、否本屋といふものが誠に少ない。これは琉球にまだ讀書熱が普及されて居らぬ爲であらうが、聊か心細く感じた。骨董屋も甚だ少ない、古代琉球の藝術品で店頭に出て居るものは極めて少ない。偶々あつても隨分高價で一寸買ふ氣にはなれぬと云ふ仕末である。

併し、一般に物價は案外に低廉である。例へば那覇市中の人力車賃は、市の端から端まで小一里も乘つて二三十錢である。髮剃賃は二十錢位である。一等旅館の最高の宿泊料が五六圓位である。その

他は之に準じて知ることが出來る。

十四　デング熱

余が琉球滯在中、彼地にはデング熱と云ふ一種の流行病が猖獗を極めて居た。デングは西斑牙語であるそうで、これ迄も屢々流行つたことがあるが今度の樣に激しいことは無かつたと云ふ。

余は沖繩到着の第五日目の晩に脚の關節に鈍痛を覺へたので、テッキリやられたと直覺して寢に就いたが、夜半過ぎから疼痛が全身の關節に瀰蔓し來り、朝になつて見ると起きかへることは愚、寢返りも出來ぬ程の痛さである、體温は三十七度八分である。午後になつて痛みはやゝ下り坂になつたが體温は之に逆比例して昇るのである。兼て東京を出發する時、琉球に惡疫の流行して居ることを聞知して居たので、入澤達吉博士に注意事項を問ふた處が、博士は若しも沖繩で病氣に罹つたら金城醫學士の診療を受けるがよいと教へて呉れた。そこで早速同學士の來診を求めた所が、學士は直ちに來て呉れた。一診してこれは輕いデング熱である、二三日で快癒すると事もなげに斷言して呉れたので大に安心した。

その夜は熱が三十九度以上まで上つたが、翌日は著しく低下し、翌々日は殆んど平熱に復し關節の痛みも殆んど平癒した。その翌日に至つて全身に發疹したが夫は恰も麻疹の樣なもので痛くも痒くもなかつた、そして次の日には殆んど全く消滅した。これで規定通りの經過を終つてデング熱は全治したのである。

この病は體温の高い時でも精神に何等の苦腦も感ぜず、脈搏も呼吸も平時と變りはなく、食慾も餘り減退しない、重症では體温が四十一度位に昇り全治に十日以上も要するが、死ぬことは先づ無いのである。只だ時として關節の痛みが數十日間去らないのがある。余は痛みの未だ去らない内に活動を始めて關節を虐使したので今以て指の關節の微痛が止まぬのである。

金城學士の話によれば、那覇市では殆んど毎戸に患者があつて、一家一人も殘らず感染した例も珍らしくない、那覇六萬の人口中、少くともその三分の二は感染したものと思はれるが死者は今の處四十三人である、夫は何れも嬰兒で腦膜炎を併發したのであると云ふ。

要するにデング熱は少しも恐ろしい病ではないが、感染が激しいので厄介である。余が全治した頃は那覇の方は下火になり、追ひ〳〵田舍の方へ蔓延する模樣であつた。土地ではこれを「三日熱」と唱へて居る、夫は大低三日位で去るからである。

十五　神　社

余の沖縄滞在は二十日間であつたが、この内四日はデング熱の爲に奪はれ、五日は百五十時間ブツ通しの大暴風雨の爲に棒に振つたのは誠に遺憾であつたが、夫でも極力勉強して毎日古建築の探檢に出かけ、豫期以上の成績を擧げ得たのは、偏へに沖縄官民諸君の後援と、鎌倉君の幇助とのお蔭であつた。

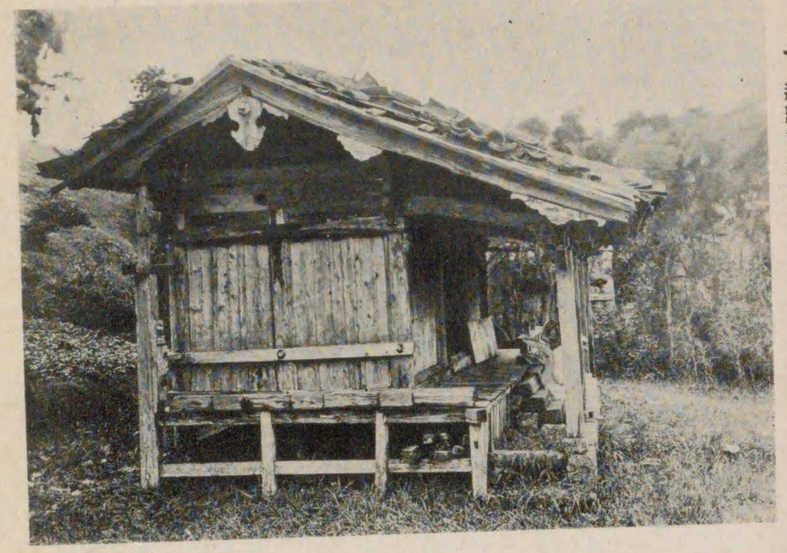
余はこれより余の探檢した事項を簡單に列記するのであるが、便宜上建築の種類に隨つて敍述しようと思ふ。

先づ第一に神社から始めるのである。

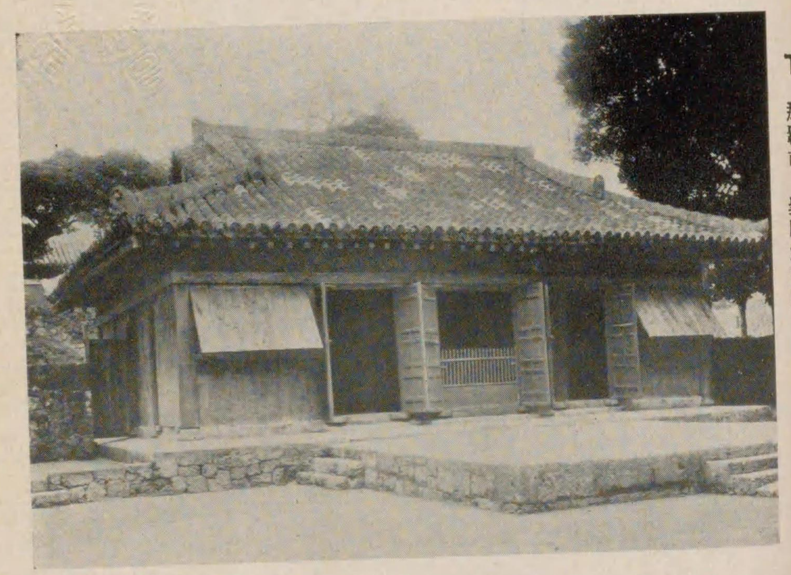
神社のことは第十章宗教の部で概説して置いた通り、當地には古來重大な神社が八ヶ所ある。その中金武宮と識名宮とは終に見る時間が無くなつたが、他の六宮は一と通り視察したのである。

その一　波上宮

那覇市の西北の一角、海上に屹立した絶壁の上に建つ官幣小社で、伊弉諾命、事解男命、速玉男命を祭神とすると云ふが、古へは矢張り陽石を本尊として居たので、その陽石は今も社務所にある。社



上　那覇市外眞和志村　沖宮



下　那覇市　聖廟大成殿

殿は近頃内地流の流作りに改造されたので別に面白味はない。只だ珍らしいのは一口の朝鮮鐘である

ことで、顯德三年の銘が在る。

當社の位置は形勝の地を占めて居り、海風が絶えず涼を送るので、絶好の納涼所として遊客が絶へないのみならず、海水浴場としても常に群集を招いで居る。

その二　大久宮

天久宮は島尻郡眞和志町に屬し、那覇市の北郊にある。敗殘した本殿がたゞ一宇荆棘の間に孤立して居るが、其建築は實に面白いものである。三間二面、向拜附きの流れ造り、入母屋瓦葺の小宇で、内地の普通の社殿と同型であるが、屋根の曲線は甚だ淳朴で、自ら特殊の味を發揮して居る、蟆股の形やその中の獅子や虎の彫刻は慥に室町中期頃の氣分を現はして居る。

内地の社殿と著しく違ふ點は其正面の柱の上部に假面の彫刻が懸けてあることで、これは沖繩の神社廟祠に共通の現象である、假面は何を表はすのかよく知らないが、其面相にいろいろの種類がある。或は鬼の如く、或は金剛の如く、或は伎樂の面の如く、何れも古調を帶びて雅趣に富んで居る。

その三　八幡宮

これも同じく眞和志村の字安里に在る。天久宮と殆んど同型同式であるが、意匠に於てやゝ之に劣る樣である。但し向拜の頭貫の鼻の龍の彫刻は大に觀るべきもので、矢張り室町末期の氣分が見へる。

御神體に就ては面白い傳說がある。夫は始め舜天が父爲朝を慕ふて泣くので、爲朝の顏を假面に作つて慰めたが、後舜天の子が之を見ると非常に恐ろしい顏なので、終にこの社に移して神體とした、その後何時の頃にか薩摩の僧が來て夫を持ち去つたと云ふのである。

その四　沖宮

これは元來那覇の西南、埠頭の對岸の臨海寺にあつたのを八幡宮の隣に移轉したのである。形式手法すべて前者と同樣であるが、この建築はその意匠に於て正に一頭地を拔いて居る。向拜頭貫の鼻の彫刻は文樣化した龍であるが、非常に面白い、內地には見慣れない手法で、室町以前の氣分である。蟇股の意匠も一調子變つて居り、總ての點に於て悠揚として迫らざる溫かさがある。

なほ特に感興を覺へたのは、その枓の形である。即ちその廣さと高さとの比例が十對八になつて居るので、これは內地では奈良朝から平安朝の初期までに限つて慣用されたもので、その他の時代には絕對に見ない。即ち沖宮には遠く平安朝初期以前の氣分が漂つて居るので、實に興味ある現象である。

その五　末吉宮

首里市の西北郊にある。石灰岩の磊々として重なり合つた小丘の上に孤立して居るが、羊腸たる磴路を登りつめた處で四顧の風景は實に絕佳である。建築は我が長祿寬正の間に成つたもので、總て前記の諸社と同型であるが、出來榮へは天久宮と互角である。祭神は熊野權現であると云ふ。

この社の下の絕壁の間に夜半詣御嶽と云ふ土地固有の拜所がある。夫は自然の巖が人の股の形をなして居るその間に石の男根が立てられてあるので、女人が夜半窃に戀の叶ふ樣にと祈願するのであると云ふ。その附近にまた女根を象つた石があると云ふが、これは見當らなかつた。

その六　普天間宮以下の神社

普天間宮のことは何れ後章に紹介する積りであるからこゝには述べない。識名宮は首里城南の識名に在り康熙年間の創立（我が寬正より享保の間）で生殖器を神體として居ると云ふ。金武宮は國頭郡の金武に在り、嘉靖年間（我が大永、永祿の間）の創立で、熊野權現を祭神とすると云ふ。金武は神社よりもその巨大なる鐘乳洞を以て有名である。

十六　佛寺

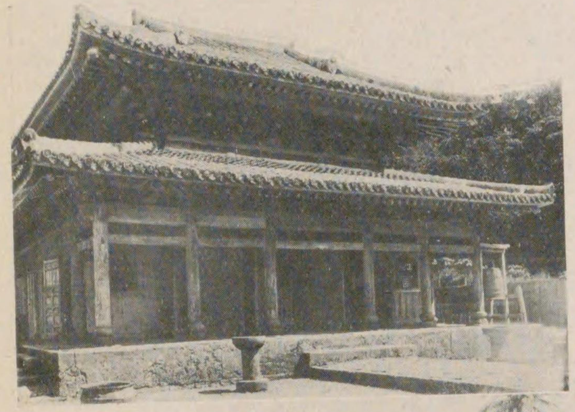
琉球佛寺の巨壁は首里城の北に接する圓覺寺である。これは尙眞王が京都の芥隱禪師を請じて建立した禪刹で尙家の菩提所である。型の如く南面して、總門、放生池、三門、佛殿、方丈が一直線に中軸の上に并び、後方に至るに從て地勢が次第に高くなつて居るので、誠に理想的なる配置が構成されて居る。總門の左右には北脇門、南脇門が開かれ、三門の東北に鐘樓があり、大殿の西に獅子窩、御照堂が南北に并んで居る。必しも大規模ではないが、琉球に於ける唯一の七堂伽藍具足の巨刹で、同時にまた最も美しい建築物である。

總門は弘治五年（我が明應元年）の建築で、八脚門の式に由り、型の如く呵吽の仁王が立て居るが相當の出來榮である。樣式は禪刹の定法なる所謂「から樣」と云ふ造り方であるが內地の手法とは少しく調子が違ふ。金剛垣が下から上の貫まで通つて居るなどは實に目新しい。

門を入れば放生池に石橋が架けられてある。これは弘治十一年（我が明應七年）の作で、欄に左の銘がある。

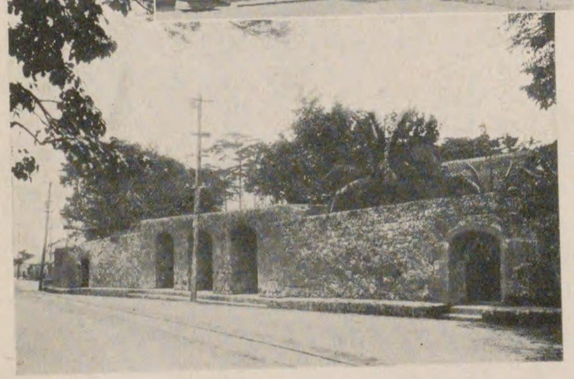
大明弘治戊午歲春正月吉建立

長史梁能



上　圓覺寺佛殿

中　圓覺寺三門



下　崇元寺の第一門

通事陳義督造

この欄には非常に美しい彫刻が施されてあるが、殊にその親柱の頭の獅子が堪らない位の名作で、しかも夫が置物として手頃の大さであるので、その數個は何人にか打ち落され持ち去られた。余は「この獅子なら我輩も一つ取り度い位だ、誰でも欲しがるのは無理は無い」と狼籍者に同情して一行の人を苦笑せしめた。

橋を過ぎて高い石階を登りつめると、三間重層の三門がある。これも弘治五年の建築で、型の如く左右に山廊が附屬し、樓上には定法に從つて寶冠の釋迦と十六羅漢が安置されてある。

次に佛殿は同じく弘治五年の建築で重層である。五間五面の正方形であるが、その前列の六柱の裸柱であるのは内地には例のない處である。勿論支那にはこの型が珍らしくないのである。

殿内の樣子は内地の禪堂と殆んど同樣で、殊に鎌倉の圓覺寺の舍利殿と酷似して居るのは實に面白い現象である。

本尊は釋迦、脇待は文殊普賢であるが、その須彌壇の後の壁に驚くべき精巧な壁畫がある、これは

金剛會を畫がいたもので建築と同時の原作を元祿十年に潤色した彩色の密畫であるが高十三尺餘幅八尺二寸餘、蓋し現今琉球に存する第一の大作で同時にまた傑作であらう。鎌倉君はこの畫を全部摸寫しようと云ふ大勇猛心を發し、既にその一部を完了されたが、これは非常な大事業で到底短日月で成就さるべきもので無い。

佛殿の建築に就ては言ひ度いことも澤山あるが、茲には姑らく遠慮して、次の方丈に移るのである。方丈は龍淵殿と稱し、佛殿に劣らぬ名建築であるが、その規模は廣さ九楹六十四尺四寸、深さ六楹四十二尺三寸で琉球に於ては第一流の巨宇である。南に接して庫裡があるがこれは粗末な建築である。

方丈は康熙六十年（我が享保六年）に尙敬王が建立したものであるが、その手法は我が鎌倉室町の間に行はれた「から樣」そのまゝであるのは實に驚異に堪へない。西北隅の一小室は國王の御座の間で天井は鳳輦式で輪垂木を露出した手法は巧妙である。その東に隣る一室、即ち正面の奥の一室に、歷代の國王の靈を祀る祭壇が安置されてある。

附屬建築は特筆する程のものでない。獅子窩は弘治七年（我が明應三年）、御照堂は隆慶五年（我が元龜二年）の建築である、その南に法堂があつたが雍正四年（我が享保十一年）に取り除かれて今は無い。又その南に鐘樓があつたが、乾隆十五年（我が寛延三年）に今の場所に移建された。

南北脇門は石壁の間に穿たれた石造で、小規模であるが雅趣に富んだものである。殊に南脇門の切妻の石屋根は非常に巧妙な意匠である。琉球第一の名橋眞玉橋はこの門の築造法を模範として造つたと云はれて居る。

なほ寺の境内に焚字爐があるのは珍らしい、これは三門の南手にあるが大破して居るので多くの人は氣が附かぬらしい。

圓覺寺と並び稱せられた天王寺、天界寺は共に今は廢寺となつたが、古圖によつてその規模や堂宇の配置も略ぼ推知され、現場に就てその地勢を察することが出來るが、何れも圓覺寺に比すれば遙かに小規模で、七堂伽藍の體裁を具備したものでない。只だ僅かに門、本堂、左右配堂の四宇を備へ、これに庫裡が附屬した程度のものであつた樣に思はれる。併しそのプランが殆んど純然たる漢土の定型を襲踏した形跡の歷然たる處か面白い。

那覇市の東北境、首里街道の北側に接して有名なる琉球王家の廟所崇元寺がある。琉球國志略に「諭察先王廟圖」と題し、冊封使が琉球歷代の王を祭る儀式の圖があるが、これに由て堂宇の配置や形式

が全く漢式に據つて居ることがよく分る。先づ第一門の前の大道を遮斷して東西に木坊が建てられて居る。これは鎌倉の圓覺寺にも今なほ殘存して居り、支那では伽藍のみならず、官衙にもよく見る處である、木坊の傍に下馬碑があり。碑の表には平假名琉文で

あんしもけすもくまからうまからおれるへし

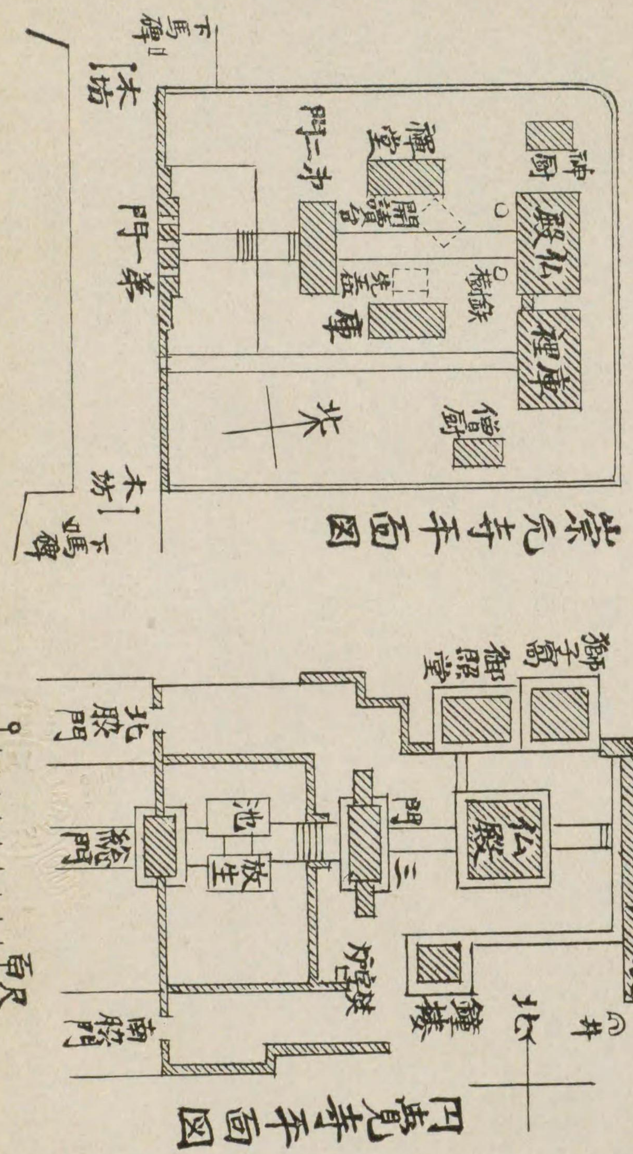
（按司も下司も此處から馬より下りるべし）と書いてあり、裏には漢字で

但官員人等至此下馬

と書いてあるが、全く支那の慣習に從つたものである。

第一門は茲に掲げた平面と寫眞とに由てその大體を想像し得ると思ふが一見最近の西洋式ハイカラ建築の樣で、これこそ實際琉球隨一の美建築であると斷言するに躊躇を要しない。首里城正殿は由緒の尊いのと規模の壯大と手法の特殊とを以て優るが、美の點に於ては完全無缺とは云へない。圓覺寺の殿門は樣式の純眞と手法の確實とを以て勝るが獨創的意匠は豊富とは云へない。然るにこの門は規模は大ならず、手法は簡單であるが、その中央部と左右翼との取り合せの自然なる、その相互の廣袤幅員の權衡を得たる、その全部の輪廓の簡明にして要を得たる、その線の少なくして一も無駄のな

琉球の佛寺



円覚寺平面図

完元寺平面図

き、數へ來れば限なき美點が現はれ來る、一見素朴なるが如くにしてよく凝視すれば益々豊富である。一瞥粗野なるが如くにしてよく觀察すればいよいよ高雅である。極めて無造作なるに似て實は苦心慘憺の作であり、甚だ淺薄なるに似て實は重厚深刻の作である。要するにこの門は舊來の因襲に拘泥せずして、新たに獨創的意匠を試みたもので、清新潑溂たる氣分が横溢して居る。この時この地に於てこの建築に邂逅するは余の最も意外とする處である。

第一門の次に七間三面入母屋の第二門がある、門を過ぎて、左に禪堂右に庫を見て本堂に到る。本堂は七間五面單層入母屋で、内部の中央に龍柱とて龍を畫いた一對の柱がある。奥に壇を設けて歴代の位牌を安置する。天井は奇巧なる構造で、夫に一面に彩色文様が施されてあるが、その調子は支那七分日本三分と云ふ程度である。外部の手法も半漢半和で、妻飾に純日本流の木連格子があるかと思へば窓に純支那流の花狹間がある。柱の上に純和式の舟肘木を用ゐながら、礎盤には純漢式の手法を使つて居る。要するに和漢混用と云ふことがこの建築の主義であるらしい。併し其成績は相當に觀るべきもので、圓覺寺に次で琉球の名建築と稱すべきである。

この外琉球には神社と相伴ふて必ず佛寺があるが畢竟神佛混淆の結果である。即ち波上宮には護國

寺、沖宮には臨海寺、末吉宮には遍照寺、普天間宮には神宮寺と云ふ風である。就中臨海寺はその本尊の藥師三尊に元の至正壬午（我が康永元年）四月十九日云々の銘があるので、これこそ琉球に於ける在銘の最古の彫刻物である。梵鐘には天順三年（我が長祿三年）三月十五日の銘がある。

護國寺にも觀るべきものがある。「から樣」の山門はやゝ觀るべきものである。本堂の本尊及厨子は琉球の作であらう。別に彌陀、藥師、千手觀音の像があるが、これは加賀の日秀上人が沖繩に漂着し、初めに金武の觀音寺を創立し、次にこの護國寺を建立し、自らこの三尊を彫刻したと云はれて居る。

琉球の佛寺に關して茲に不思議なことは塔の無いことである。内地でも禪刹伽藍には塔は無いものと認められて居るが、眞言宗の大伽藍には大抵塔がある。支那では禪宗の大伽藍にも普通塔を建てるのである。若し琉球が支那を學ぶならば圓覺寺などには無論塔が在つて然るべきであり、内地を學ぶならば眞言宗の寺に一つ位は塔があつてもよさそうなものである。琉球に於ける建築術は塔を造るまでに進歩して居らぬとも云へない。只だ琉球が烈風が多いから高い塔は造らないのであると解するのが最も合理的であるが、その眞相はなほよく研究して見なければ分らない。

十七　道觀

余の觀たる沖繩唯一の道教の廟祠は、波上宮の附近にある天尊廟である。建築は三間三面の小堂の前に一間の廂を加へたもので、別に言ふに足らぬものであるが、内部の神像や鐘は甚だ興味あるものである。

内部の奥に、中央に天尊、その右に天妃、左に關帝が祀つてある。天尊は中心に本尊、左右に脇侍前に左右相對して二對の侍神が立て居り、合計七軀が一群をなして壇上に安置される。壇の下に雷公が天尊に向つて立ち、一對の麒麟が狛犬の位置に据へられて居る。賽者が運命を占ふ爲に用ふる木瓜もある。總ての調子が全然支那式で余輩は今や漢土に居るが如き氣分である。

右の壇に祀られた天妃は元來天妃街の天妃廟にあつたので、廟が撤廢されたとき、本尊及脇侍がここに合祀されたのである。天妃及び侍女の形態手法も勿論全く支那式である。

左の壇に安置された關帝は例に由て長髯を撫して中央の座に倚り、周倉は青龍刀をつき、關平は劒を執てその前に相對立して居る。この關帝の傳說は詳でないが、或は某所に在つた關帝廟からこゝに移したものかも知れぬ。併しそれにしては像が餘りに小さい。始から天尊に配祀されたものとして

も合點の行かぬ節がある。

廟に三口の鐘があるが、何れも景泰年間の製作である。琉球には景泰の鐘が澤山あつて夫が皆同型同式である。こゝに在る鐘の一口は景泰七年丙午九月二十三日（我が康正二年）の日附けと

住持權律師良辯證之
大工國吉　奉行智賢

の銘がある。第二の鐘はもと天妃廟にあつたのをこゝに移したもので

景泰丁丑年朔旦施（我が長祿元年）
奉行　與那福
中西
大工衛門尉藤原國光

の銘がある。第三の鐘は傳來不詳であるが、關帝廟から移したものと想像しても善いかも知れぬ。その銘は、

景泰八年正月初一日誌（我が長祿元年）
奉行　與那福
中西
大工衛門尉藤原國光

余が天尊廟を視察して居る時、恰も三人の土地の婦人が參詣に來た。彼等は田舍の農婦らしい賤しい風體で、その携へた風呂敷包を廟の廂の床に置いて、相竝んで坐り込んだ。やがてその中の一人が一束の線香に火を點じ、何やら口の中で唱へつゝ線香を上下左右に靜かに動かすと、他の二人は之に從て默禱を捧げるかの如くに見へる。聞けば線香を振り廻して居る老女は祈禱專門の女で、人の依賴を受けて彼等に代つて勤行をなし、祈禱料を受けて生計を立てゝ居るのであると云ふ。余は支那で屢々廟祀に祈禱を捧げる者を見たが、その作法は彼此よく似て居る樣に思ふ。併し余は琉球の正式の祈禱の作法は知らないから支那との正確な比較は出來ないのである。

十八　文廟

文廟は首里及那覇に現存して居る。首里の文廟は今沖繩の貴族浦添朝顯氏の邸内に移建されて居り建築物としては大成殿、啓聖祠及門の三字を存するのである、大成殿は扁して萬世師表と云ふ、尙育

王の書である。五間四面單層の建物で、例に由て和漢混合の式である。殿内は瓦敷で、二本の龍柱が中央に立つこと崇元寺本堂と同樣である。後壁に接して中心に至聖孔子の位を安し、向つて右壁に顏子、子思子、左壁に曾子、孟子の位を配すること型の如くである。建築は至つて純朴で、柱頭には挿舟肘木を置いたのみで、軒も「一と軒」である。

殿右に嘉慶六年歳次辛酉（我が享和元年）の琉球國新建國學碑があり、門前に道光十七年歳次丁酉十二月上旬（我が天保八年）の首里新建聖廟碑がある、即ち現在の堂宇は道光の建築にかゝるものであろう。

なほ浦添氏邸の建築を見學したが、最も興味を覺えたのはその祖先を祭る位牌壇であつた。夫は一室の奥に設備された莊嚴なる四重の壇で、最上の壇には中心及左右に位牌が恭々しく置かれ、第三壇には造花一對、第二壇には左右に飾燭一對中央に蠟燭一對、第一壇には中央に香爐一具、左右に生花一對が配せられてある。これは最も正式な飾方であるさうで、勿論内地同樣佛式に由る。

那覇の文廟は首里のものと殆んど同樣であるが、規模はよく完備して居り、明倫堂が之に隣接して居る。大成殿は首里のものと同大同形で内容も殆んど寸分違はないが、殿の前に廣い石敷の丹墀が現存して居る。その前に第二門があり、扁して聖廟と云ふ、これは三間牌樓の型で粗略ながら支那氣分を發揮したものである。その前に又頭門がある。これは八脚門の型で寧ろ日本趣味に近い。

文廟の右の一區は即ち明倫堂の境域である。堂は今も學校の教堂として用ゐられて居るが、その奥の一部が崇聖祠として設備されて居る。堂の前にやゝ支那趣味を帶びた門があるが、扁して儒學と云ふ。この門の前に二基の碑がある。右なるは大清琉球國夫子廟碑で、乾隆二十一年歳次丙子季秋既望（我が寶暦六年）の日附がある。碑に大清の二字を冠したのは當時支那は琉球をその領土と認めて居たからであらう。左なるは琉球建儒學碑記と題し、日附は康熙五十八年歳次己亥冬十月（我が享保四年）で、即ち堂宇の年代を示すものがある。

文廟の頭門の前の廣場にも一碑がある。琉球國新建至聖廟碑記と題し、日附は大清康熙五十五年歳次丙申十二月（我が享保元年）とある。碑の題に琉球國と特筆し、日附に大清と特記した處を見るとこゝでは支那は琉球を領土と認めずして附庸國と認めた形になる樣である。

十九　琉球固有の神詞

琉球固有の宗教建築で今日現在する最善最美なるものは首里城歡會門前の園比屋武御嶽の石門であ

る。創建は「球陽」尙眞王四十三年（我が永正十六年）の條に

創造園比屋武嶽石門

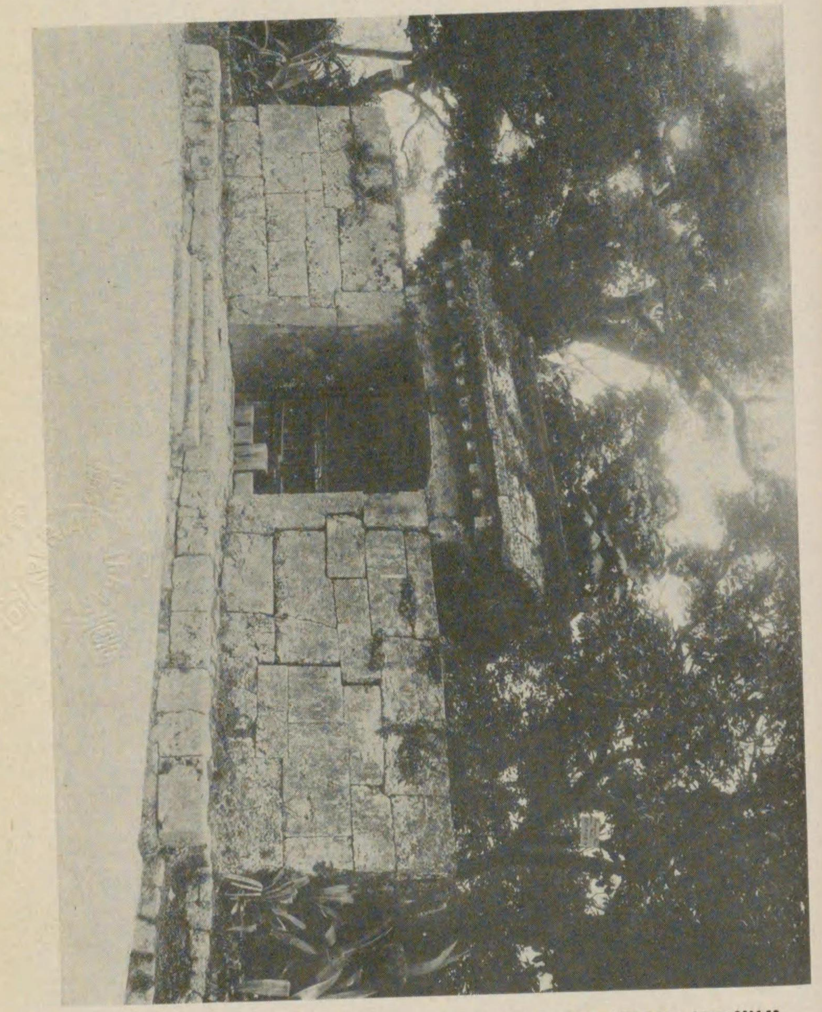
とあり、又門楣にかけて在る陶製の小扁額に

首里の王おきやかもひかなし御代にたて申候

正徳十四年己卯十一月二十八日

と書いてあつたと云ふに徵して明瞭である。この扁額は今も現場にかけられてあるが文字は磨滅してよく判らない。「おきやかもい」は尙眞王の名であり「かなし」は尊稱で、こゝでは殿下と云ふ程の意である。正徳十四年は我が永正十六年に當る。

さて園比屋武御嶽は、今は祠堂は湮滅してただ石門一口丈けが殘つて居るが、これが實に面白い建築である。門の廣さは七尺九寸五分、深さ八尺五寸、高さ七尺五寸、軒の高さ九尺八寸と云ふ小さいものであるが、全部石を以て築き、唐破風の屋根をかけたもので、その全體の恰好が得も云はれず美しい。殊に石を以て垂木、唐破風、懸魚、棟飾等一々精確に造り出した技倆は大に觀るに足る。更に茲に最も面白いのはその手法が例に由て和漢混合である事實である。見よ、屋根の棟の中央に寶珠を



琉球固有の神祠
園比屋武御嶽の石門

載せ、その周圍は六方に火焔を這はせた手法は純然たる漢式である。棟の兩端の蚩吻も漢式である。棟の表面のから草紋樣も漢式である。然るに唐破風以下は純然たる和式である。和漢混用もこゝまで徹底すれば偉いものである。

園比屋武御嶽はもと安國山と稱し、王城附屬の花樹園であつたと稱せられる。門内に一基の古碑があるが、銘文は今は讀めなくなつた。康熙年間迄は明かに讀めたそうであるが、その中の句に

尙巴思王御宇宣德二年丁未八月旣望安國山樹華木記……其神至聖至靈祈必應之……王幸他處時親行拜禮……

とあるに由てその年代が明瞭である。尙巴思王は三山統一の英雄であつたが、この御嶽の開基は統一に先だつこと二年に當る。宣德二年は我が應永三十四年である。即ち王城の中山門建立の前年である。

辨ケ嶽は又辨の嶽又冕ケ嶽とも書かれる。首里市の東北境に聳ゆる山で、この近傍では最高峯であるが海拔約四百尺位と觀測されて居るから、山と云ふ資格はない。頂には珍らしく老松や雜木が生ひ茂つて單調なる風景に趣を添へて居る。西は遙かに支那海の激浪を望むべく、東は脚下に太平